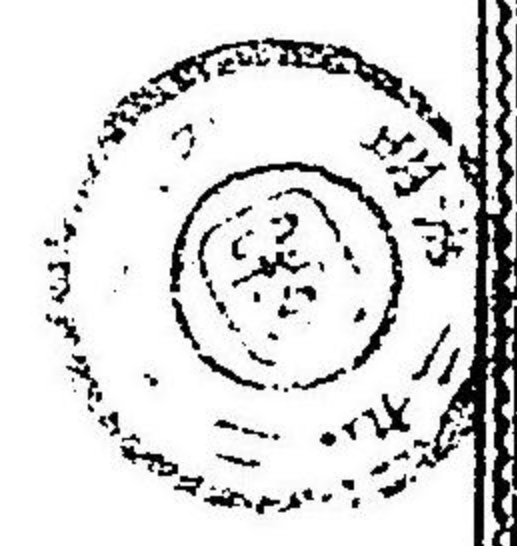


神之自啓

米國エイル大學教授
サムエル、ハリス先生原著
小林彦五郎君譯



東京銀座
メソヂスト出版舎發行

神の自啓序

此書は東京三一神學校の學生に授くるために翻譯したる者なり、初め刈谷虎之助氏之が翻譯に着手し、小崎弘道氏之を校訂して誤謬なきを保する計畫なりしが、惜いかな刈谷氏は中途にして病没し、小崎氏は同志社の總理に選ばれ、遂に其約を全たうする能はざりし、是に於て小林彦五郎氏之を擔任し、更に其刈谷氏の翻譯に係る部分をも校訂し、終に其業を成就したり、今茲前半にむかひて施こしたる改竄の如きは、大抵實際の教授上にて出遭ふたる困難より感じ得たる者なり、不幸にして小林氏は今亞米利加に

あり、故に余自ら責をおひて其中原文の意を未だ十分に寫し得ざるやの嫌ある箇所を改めたり、本書の文章は英語にても六箇敷き者なり、譯文に於ては尙更に然らざるを得ず、然れども勞を厭はずして之を學ぶ人々には其報必ず饒かなる者あらんと信ず、

一千八百九十五年
明治廿八年三月六日

チ
ン
グ
識

神之自啓目錄

緒論 本書の目的

一—廿三頁

第一編

廿四—三百十五

神は宗教上の信仰と奉事の目的者として人類の經驗、即ち意識に啓示せらる、

フライデレル—ヒプル、ジョーナル—ドルチル—ヘーゲル—キチ—諸有識の所説摘録

第一章

廿八—五十九

宗教の定義

(第一)宗教上に於ける基督教の位置

廿八—卅

(第二)人類の宗教性はその靈が神の臨在に對應するとなり、卅

(第三)人が神に對する觀念の經行

卅—卅一

(第四)神明なる觀念の二要素

卅一—卅四

(第五)該觀念は進歩して止まず

卅五—卅八

(第六)神明を有せざる宗教なし、諸の修正説

卅九—五十三

(第七)宗教は人の靈性上に現はる

五十三—五十七

(第八)凡て他教は多くは退化の徴を呈す

五十七

第二章

六十一—九十五

神は經驗即ち意識に由て認知せらる

(第一)意識の説明、經驗の定義、意識なる語の用法

六十一—七十

(第二)神てふ觀念の要素は直覺的にして意識に上り來る、反對論に對する答

辯

七十一—七十六

(第三)神を意識すてふことは一層深遠の義を含む、即ち

(一)該意識たる合理にして且つ預め斯くあるべしと思はる(二)是れ宗教て

ふ觀念中に自ら存するものにして、又これなくば該觀念は實ならず(三)凡

の宗教は皆之を自定す(四)又人の道義的意識の中に顯はる(五)而して人の

學理探究の際にも見はる、神の存在を證するといふは、既に此觀念、信仰ありて、其上の事なり、

七十六—九十五

第三章

九十六—百十八

神は啓示に由て知らる

(第一)啓示とは何ぞや、何れの物を知るにも首として此啓示による

九十六—百一

(第二)凡の外物に就ても、又人自身に就ても

百一—百十一

(第三)神に關しても亦然り

百十一—百十八

第四章

百十九—百四十七

神の啓示の收接、了解

(第一)啓示を以て知識を授與せんとせば、一方に於ては之を受け且解せざるべからず、即ち神を知るに三要素あり、

百十九—百廿三

(第二)思想はその神に就ての觀念を解明し、その信仰の眞偽を檢覈し、又其知識を精練擴張せざるべからず、之をなすに方りて人は誤謬に陥れり、反對

論、

百廿三—百卅三、

(第三)神てふ知識は進歩して止まざる啓示に由る、 百卅三—百卅九、

(第四)聖經上の啓示との對照、 百卅九—百四十六、

(第五)自己てふ意識の裡面には神てふ意識存す、凡神説の誤謬、

百四十六—百四十七、

百四十八—二百十、

第五章

人の神の啓示を收接し及び之に由て神を知るべき能力、

(第一)人に此の如き能力あるとは凡の宗教が自定するところなり、

百四十九—百五十、

(第二)人智の眞實なること、及び智力に關する眞正の概念中には自ら此信仰存す、人の合理力は眞實なりとの説是れ眞の知識論、人は單に自己の理性のみに頼りて神を知り得べからず、理性的感官、 百五十一—百六十四、

(第三)人は神に肖たるが爲め神を知ることが得、超物的と物質的との交界線、

百六十四—百七十三、

(第四)神てふ知識は有心的なる人の本性上固有するものなり、

百七十三—百八十、

(第五)神を知る能力は特殊の信仰器能に非ず、 百八十一—百九十二、

(第六)絶對者は人の意識中に示現するを得ずとの反對論、

百九十二—百九十六、

(第七)信仰と知識との區別、 百九十六—二百一、

二百一—二百九、

(第八)神學は具體的にして抽象的にあらず、

二百十一—二百四十九、

第六章

人の靈能は醒覺せらるゝを要す、 二百十一—二百四十九、

(第一)是れ其靈能の發達を欠ぎ或は其修養を怠り或は之を毀損したるに由る、 二百十二—二百二十五、

(第二)人の靈性いかに其感應力を失ふも、神を知るの能力は尙其中に存す、 二百廿五—二百卅五、

(第三)感應力を失ひたる人の靈を醒覺せんがため神は其靈の感化を人の上

に注ぐ、

二百卅五—二百卅六、

(第四)其醒覺せられたる後に於ける靈智の成長——即ち靈生上の知識を得ては之を消化し、之を組織し以て靈の生命となす、二百卅七—二百四十七、

(第五)キリストの所謂靈の證、

二百四十七—二百四十九、

第七章

二百五十一—三百十五、

神に關する知識に對して實驗的、歴史的、及合理的諸元素の綜合、——綜合的攻究の必要なるは孤立的討求により誤謬を生ずるに徴して明なり、

(第一)實驗に偏すれば神秘主義に陥る、——寂靜風と狂妄風

二百五十四—二百六十三、

(第二)道理に僻すれば獨斷に流れ唯理に陥る——是れプロテスタント教歴史上實例の示すところなり、

二百六十三—二百六十九、

(第三)歴史上の啓示にのみ固着すれば、其弊は單に考古學、又は考證批評の學

となり、或は之に反して、聖經と思想とを分離せしむるに至る、

二百六十九—二百七十五、

(第四)茲に於て以上三要素の綜合は愈其必用なるをみる、

二百七十五—二百七十八、

(第五)歴史的啓示は該三者を綜合せしむる媒介にして、キリストは宗教的徳、學兩者の中心なり、

二百七十八—二百八十、

(第六)該總合を成就せんとは天下神學者の問題なり、——之に反する異論、

二百八十一—二百八十六、

(第七)人の宗教上の經驗及び神學思想の來歴を觀るに、畢竟該總合を構成せんと務めつゝあるものに相違なし、——神學思想上に於ける進歩の三階級、

二百八十六—二百八十、

(第八)該綜合の必要なるは、以て現今神學界の潮勢を卜すべきものなり、

三百十六—四百九十七、

第二編

神は絶對者として宇宙に啓示せらる、

ハルトマン—ハーバート、スベンサー—ヴ井ルヘルム、マ
イヤア—フ井ヒテ諸有識の所説摘録 三百十六—三百十八、

第八章

三百十九—三百四十八、

絶對者を論ず

所謂絶對者存在論の統一—該論に伴ふ普通の欠點—絶對者の定義—絶對者の存在すてふことは理性必然の法によりて知らる—之に反する諸異論の答辨—絶對者を否拒すれば普遍懷疑に陥らざるを得ず—絶對者の存在は形而下學が因て立つところの公準なり—絶對者存在すてふ觀念、信仰は古來より絶へたることなし—不可識論者、凡神論者、唯物論者、自然神論者の符合點—先天的即ち實験學的論證の眞趣、絶對者は宇宙に表現す、

第九章

三百四十九—四百四十三、

絶對者及び非有神論的の諸説

無神説の定義、非神説の彙類

三百四十九—三百五十九、

(第一)絶對者の存在に關する一切知識の否定

三百五十九—三百六十四、

最も能く之を代表せるコムト實驗説、實驗説は宇宙論を無用視し、無道理視す、

絶對者を否定するは知識を否定するなり、而して又形而下學の排斥するところなり、吾人の理性は宇宙論を發見せずんば休まず、

(第二)スベンサー派の不可識説

三百六十四—三百八十八、

該不可識説は純然たる不可識説にあらず、是れ先天的觀念より、絶對者の性質を定義せんとするより起るものなり—其定義たる消極的なり—絶對者の宇宙に示現することを認むるものなり—該不可識説は誤れる先天説を自定せり—定義は物を限定すてふ格言を誤用したるに由る—ス氏不可識説は論理上全然懷疑説に到る—不可識論者の自家矛盾—宇宙有神論—ス

氏もし今一層論理的ならんには有神論者と稱せらるゝも亦不可なかるべし—有神論者の位置

(第三)凡神説

三百八十八—四百卅二、

(一)凡神説の定義

三百八十八—三百九十二、

(二)該説は合理の論據を有せず、

三百九十二—四百三、

(三)該説は矛盾を有し、又理性の必然的疑問を解くに足らず、

四百三—四百七、

(四)又自由意志、道義心及び宗教と相容れず、

四百十五—四百廿五、

(五)其形を異にするもその要旨皆相同じ、

四百廿五—四百廿八、

(六)該説中の眞理を指照して世の注意を促す、

四百廿五—四百卅二、

(第四)唯物説

四百卅二—四百四十三、

唯物説の定義—唯物説は一元論にあらず、—唯物説には眞の絶對者を有せず、—僅に主觀的に之を有す、—又有心的事實を説明すると能はず、—物質的現象に於ても亦然り、—唯物説の諸種の矛盾、

第十章

四百四十四—四百九十七、

絶對者と有神説

神に關する四種の信仰、—之に對する兩反對説、—本論の性質、—我等の崇拜する神は哲學上の絶對者と同一にあらずとの説、

(第一)該説たる誤謬の哲學より起り、

(第二)有信説に關する誤想より起り、

(第三)又有心性に關する誤想より起る、

(第四)絶對者に關する人の智識は積極的なり、但し完全にはあらず、

(第五)絶對者は一切を制限するものなり、

(第六)無神説は自家撞着せり、反て諸派共に有神説と契合するところあり、

(第七)凡神説中に誤解せられたる眞理にして、有神説中に闡示せられたるもの、

第三編

四百九十八—九百四十四

神は物界の本性と進路及び人間の本性と歴史とにより
有心的の靈として宇宙に啓示せらる、

ゲーテ、—エムト、—ハルトマン、—ノウアリ、—クオーレス

諸有識の所説摘録、

四百九十八—五百

第十一章

五百一—五百四十

神は宇宙の因りて以て生じ、頼りて以て立つところの勢
力として宇宙に啓示せらる、

宇宙證論、

絶對者は宇宙に超越する第一原因なり、

是れ宇宙の本性有限にして有碍なるよりして明なり、諸反對説、

五百十八—五百卅三

絶對者が有心者なるとの暗示、

五百卅三—五百四十

第十二章

五百四十一—七百廿五

神は物界の本性と進路に於て有心的の靈として啓示せ
らる、

物理神學上の證論、
フィジコメタロジカレ

該證據の性質及び範圍

反對論

物理神學證論の基とする原則

(第一)物界は表號的なり、

五百五十二—五百七十五

物質的の物は智力的反映として認知せらる—物質的の物は客觀的にして、
しかも心性を有す—有神説のみ獨り此事實を説明す—物界は學術的
に了解するを得—物界にして吾人と一樣なる普遍理性を啓示せずんば
學術なるもの成立せず—形而下學は有神説と相調和す—物界表號説

は人間の言語行爲とも之を認む——物質的の物は凡て一系統中に統一せらる。

(第二)物界は理法に随ひて秩序を有す、

五百七十五—五百八十七、

(第三)物界は理想を實現す、

五百八十七—六百五、

(一)物界の内部的及外部的目的——個特の物及個獨の配置に存する證據——その構造に存するもの——その作用に存するもの——その淘汰に存するもの——及び許多の行動者が合力共働するその中に存する

證據、

(二)宇宙全軀が意匠を實現すると——即ち意匠的進化説に存する證據、

(三)物界の壯嚴美麗なるは理想を啓示するものなり、

(第四)物界は實用的なり、

六百五—六百十八、

(一)その特殊の行動及び作用は有感者及び理性者の用を達す、

(二)物界全軀は靈系に服役す、

(第五)物界と超物界との統一、

六百十九—六百廿七、

神之自啓

緒論

吾人が常に呼んで自然神學及び基督教證據論と稱するもの、裁籍世に夥しくして充服も音ならず、今又之に加へて一書を公けにするは、蓋し無益の業に肖たり、然り、吾人にして徒に從來の陳論套説を反覆するのみならば、則ち其必要を見ざるや勿論なり、然れども彼の基督にありて、世を己に調和せしむるの神は、何れの時、何れの世を問はず、日に新に自己を人に啓示し、以て人をして罪惡よりの救主として己れを受くるや否やを決せしめ、又其義と善との王國を表現し、人をして人間真心の幸福を進歩的に現實すべき唯一の状態として之を求むべきや否やを決せしむ、且つや神を信じ、及び先づ其王國を求むべきの理由は、其元精實に永劫に通じて敢て異なる所なしと雖ども、該理由に對する代々人類の思想に至ては、人智の進歩、文化の増加、世態の變換、輿論の開發に準じて變轉換移せざるを得ず、故に基督に在て神が我等人類の信仰及び奉事を要め給ふの理由は、歲月の新なるに従ひ亦新に討

32-285

究せざるべからず、夫れ紅玉よりも貴重すべき彼の古の眞理は、決して變轉する者に非ず、然れども其眞理は時代々々の人智と生活によりて、新規の方向を取らざるべからざるなり、

今や化學上の發見と、工業上の發明とは駁々乎として巧妙を極め、之が爲めに宇宙及び其物質と勢力とを人生の需求に適用する吾人の智識日に益々廣大に爲れり、而して宇宙其物は恒に在ます神の顯現則ち啓示なれば、其宇宙に關する人智の廣大になるは、取も直さず神の存在の新たな證據、及び神の性質の新たな啓示を呈出するものなりとす、且つ人間物形上、政治上、及び社會上の福利に關する智識の發達も、亦同じく人事、殊に基督に於ける神自己の啓示の眞實なるとに就て新たな徵證及び證定を供し、且つ人間の罪より救るゝの必要に就き及び人類の改新と其眞正の進歩、幸福とに對して地上に於ける義と善との神の王國の進歩的成就に就て、新たな徵證及び證定を供す、且つ哲學上の思想も、亦此の有神的信仰の爲めに、從來よりは一層廣大ニ一層確實なる基礎を發見しつゝあるなり、之に反して、人類思想の勁烈なる活氣と、其境域の廣大に爲りたると、其發明の偉

大なること、人智の大なる増殖と、其廣大なる播布ありて、吾人をして日々新たな境遇に進入せしめ、吾人の爲に新たな討究の境を開きたれば、勢ひ神の存在と、宇宙殊に基督に於ける啓示の眞實なるや否やとに關して、諸種の新たな問題、新たな困難、新たな反對起らざるを得ず、而して是等のものたる、或は物質學中より斬て出て、或は社會學、經濟學の世界より突^ツ起し來り、或は哲學界より勃興し、悉く一團と爲つて以て吾人を襲撃するなり、試に見よ、韓圖哲學の如き、其發達の線路を看るに、一方に於ては有神説の補助者となりたるも、他方に於ては現象説、不可知説、及び凡神教等諸種の妖孽を産出せしにあらざや、

故に神と其啓示とに關する今代人士の考案は、懷疑家に於ても、信神者に於ても、皆非常の熱心と勇氣を存し、深遠廣大の境に趨き、而して其一般に流行するに至ては實に古來未曾有と謂つべき程なり、左れば彼のバットラーの類推論、ヘレイの自然神學、及び基督教證據論、ブリッヂウオタル論集、及び前世紀の終より今世紀の初に於て、渾て之に類似したる所の基督教有神論防衛説の如きは、最早今日に至つて充分の効用あらざるなり、勿論是等諸書の呈出せる證憑の確實なるは今猶ほ昔日の

如し、然れども如何せん、是等は一として今日の必要に應ずる新規の徴證を呈出する能はず、又目今吾人の眼前に横はる所の新問題と新反對に打勝つべき勢力を有せざるなり、而して其論法往々批難すべきの點あるを免れず、又其自定せし原理の或者は今正に疑問の中心に在るものありとす、是を以て獨一、有心の神として神自己の啓示、及び聖書に記せる如く、世を已に調和せしむる人類の救主として、基督に於ける神の絶倫なる啓示の眞實なる徴證を、今日に於て再考再説せざる可からざるの必要あるは、吾人の深く信して疑はざる所なり、

且つや右の如き再考たる他の方向に於ては、今代の困難と反對とに應答する方法の眞偽を區別し、及び基督教を防衛せんと欲して、反て之を賣る如き拙策に陥るものを豫防するにも亦必要なりとす、看よ或る神學者の如きは、懷疑説の急流を防塞せんとして、却て凡神説の思想に陥るべき傾向を有せる彼のヘーゲル主義を仰かんとするものあるに非ずや、蓋し彼等の如きは基督教を防衛せんため、實に基督教を犠牲にするのみならず、亦人と神との有心者なるをも併せて烏有に歸せんと

するものなり、

本書第一編に於ては、余將に神に就ての智識の本原に就て研究する所あらんとす、蓋し神に就ての智識は、其初人間の宗教的經驗即ち其意識に於ける自然的信仰として發生するものなればなり、

今夫れ基督教有神論の證據を提掣し、之を當今の思想に恰當せしめんとするものあらば、其第一に證據とすべきは、神に關する人の智識は必ず經驗に始まると云ふとなりとす、夫れ神の智識は人間の思想に於て之を理解し、若しくは之が眞理なるの證左を尋求するに先ち、早く已に自然的感情及び信仰として隱然其意識に存在するものなり、

蓋し渾ての智識皆經驗を以て生まればなり、抑も思想は決して實躰の新元素を發見する者にあらず、只直覺力を以て既に内と外より表現したる實躰を認知し、説明し、及び補全するとを得るのみ、是れ他なし、經驗上より、或る實躰の現出し來る迄は、此心は何事をも思惟し能はざればなり、成程吾人は合理的の直覺力を以て、凡ての思想と行爲との標準たるべき道理の自明原理を知る、然れども心意は單に其經驗

が思想を喚起する場合にのみ、意識の中には是等の原理を表現して以て、其合理的直覺力を運用す經驗上何等實體の表現なくして先天的に智識の發生するの純念なるものは到底成就すべからざるなり、此事に關しては、今の思想海に羅列せる諸派の學說皆一致せり、故に今基督教有神論の證據にして満足の成果を獲んと欲せば、須らく斯主義の礎上に論據を確立すべし、夫れ人は經驗に依らざれば決して外界を見出すと能はざるが如く、經驗に依て神の觀念を得るとなく、單に思念のみを以て神を見んとするも、能はざるなり、所謂純念も亦然り、其經驗に依らずして神の觀念を得る能はさると、宛も盲者の物を見ずして彩色の觀念を得ると能はさるが如し、人若し實驗なくして思慮を費すときは其自己の意思の外には何物をも看出し得ざる可し、次に吾人の保持すべき論據は、人が經驗によりて神の智識を有するは、即ち神の人に自己を啓示するの意義を預斷するといふと是れなり、凡そ經驗を以て知覺せらるべき事物は、人の意識に之を表現する或る作用を以て人に顯はるゝ者なり、而して人も亦自己自身の智識を有するは、唯自己が或る行爲に依て動作し、以て自己の意識に自己を顯はすときに於てのみ然るなり、之と同じく經驗に於

ける神の智識は、神が人に自己を啓示するに因て得らるゝなり、是れ神が直接に、或は間接に或る動作若くは感化を人類の上に及ぼして、其意識に自己を表現し、以て自己を人類に啓示せしなり、人に神の智識あるには、神先づ人に之を開示せざるべからず、神既に人に接近せざれば、人は決して神を知る能はず、又決して神と交通する能はず、只神が人に自己を啓示せしとあるか故に人は神を知るのみ、基督教の最大真理は、人先づ神を求むべきに非ず、神先づ人を求むるに在り、是れ能く人の神に於ける智識の起るべき根底の哲理に契合する者と謂ふべし、又次に神は何物を啓示するやの問題に就て吾人の保持すべき論據は、神は自己に關する教理を顯はすよりは寧ろ先づ自己本身を顯すと是れなり、夫れ教理なる者は、神が自己を啓示せる其啓示の真意を、人が其智力を以て理會したるものたるに過ぎず、只其れ人の知るべきものは神自身に在るのみ、請ふ天體を以て之を喩へん、天體は天文學を顯はさず、只其天體其物と其運行とを示すのみ、而して其示されたる所の天體より所謂天文學を生ずるは、即ち人の攻究に在り、人の知得する所は天體其物と其運行の理法とのみ、今や思想海の潮流は一瀉して抽象より具體に移り、

言語及び抽象的概念より事實及び事物に移り、思想の法式より其含蓄する所の實
 體に移り、滔々として止まらざるなり、左れば神に關する吾人の思想も亦此の如く
 ならざるべからず、即ち其考ふべき問題は他なし、吾人は眞理、教理、及び倫理上の條
 規を知るや否やに非ずして、吾人は神を知るや、神に關して何を知るやに在り、吾人
 は思想の系統として基督教の眞理を證明し得るや否やにあらざりて、吾人は罪惡よ
 り世界を救ひ、及び人間の眞正なる福祉の成就として第一に求むべき義と善との
 王國を建て給ふ所の基督に在る神を知るや否やにありとす、
 若し夫れ啓示の方法に關して、基督教有神論の正當なる防衛論は左の如し即ち吾
 人神は主として自ら爲せる事蹟を以て歴史的動作に於て自己を啓示するとを證
 明せざるべからず、夫れ神は一個人に對する自己の動作と感化とに依て其人の意
 識の中に自己を啓示し、又萬物の進路、及其攝理上の動作たる人類歴史の進路に於
 て道徳上の統治に於て、救贖に於て、義と善との王國の進歩に於て動作し、以て一般
 人類に自己を顯す者なり、聖書に記する所の神自己の啓示は、重もに其歴史的の動
 作を通じて顯るゝ者なり、彼の眞理、教訓、誠諭、契約、及び先知プロフェットに關する神の豫言的啓

示は當時既に起り、或は將に起らんとする事變の爲に發せられたるものにして、皆
 神の歴史的作用の進路に於て或は機に臨で發し、或は其進路に隨て發する者たる
 に過ぎず、

是に於て、吾人は人類に神の啓示を受け得る靈の能力あり、且つ其啓示を受くると
 きは神を知り得る靈の能力を具備するとを認め、神の光自己を照すときは、直に之
 を見得る靈眼ある事、又神の感化自己に及ぶときは、直に之を感受し得る靈の感性
 ある事を認む、

此外吾人が取らざる可からざる論據は、神若し自己を人間に啓示する者とせば、人
 間は自己の思想に於て其啓示を認知し、解釋し、確定せざるべからざる事はなり、看
 よ外部世界は人間に其覺官を通して自己を現はすも、人間は思想に於て其自生の
 信仰を認知し、解釋し、確知せざるべからざるなり、是れ古來人間の爲しつゝある所
 にして、學術思想の人心に發生せし以來、遅々兀々として進歩しつゝある所なり、然
 り而して是れ神に就ての知識に達するに於ても亦同様に必要なるものにして、殊に
 學術疑惑の盛なる世に於て必要欠くべからざるものなりとす、吾人か宗教上の信

仰を以て道理験討と合理的思想の究察との外に置かんと欲するは、是れ取も直さず、其信仰を知識に質せば道理なき者なるを認め、及び宗教を以て神秘説及び迷信と見做し去るに外ならず、

扱上來陳辨し來りし所を約言すれば、神の知識に於ける三要素は即ち、曰く神の啓示曰く宗教上の經驗、曰く合理的の思想是れなり、

既に此の如し、故に吾人の次に考察すべきは、神は吾人の宗教上の經驗即ち意識に發生せる自然的信仰を確定し又其信仰によりて得たる神の觀念を訂正し或は擴充し得べき他の啓示を爲したりしや否やを審にするにあり、是れ此篇以下三篇に於て論究する所なりとす、

抑も神は宇宙に於て、即ち萬有と人類とに自己の啓示を爲し、又基督に於て自己を啓示せり、是に因て人は自己の意識に於ける神の啓示の眞否を験討し確定し、而して其神に關する知識を擴充するなり、要するに人が其宗教上の經驗に於て啓示を受けたる同一の神は、絶對的存在者として宇宙に啓示せられ、萬有の本性と進路と、人類の本性と歴史とに於て、其間に活動する普通絶對の理性なる有心的の神とし

て啓示せられ、而して基督に於ては人類の救主として啓示せらるゝを見るべし、余は此講究を爲すに方り本書の第二篇に於ては、絶對無碍の實在者が存在して宇宙に表現せらるゝとを示すべし、此命題は理性の第一原理にして、思想の必然法たり、英米兩國の神學者は概ね之を不問に附し去り、時に或は之に着眼するとあるも、只無益なる形面上學の問題として顧みざるなり、然れども是れ大なる謬見にして、此命題たる實に神に關する眞正の觀念に必要なものなり、何となれば神にして絶對なる實在者に非ざれば、正當に之を神と爲す可からざればなり、且此命題は、右に次て起る所の證據論に對して眞正の基礎を供し、且つ其眞意と要點とを確證するに尤も必要なればなり、夫れ斯の如く絶對的の實在者を承認するは、彼のスペンセル派の不可知論者も、凡神教派及び唯物論派の一元論者も、皆我有神論者と一致せり、只之を否定する者は、普通の懷疑に陥るべき極端の知識説を維持する少數の人士のみ、蓋し理性の第一原理として絶對的の實在者の存在を保持するは、古來種々様々の方法を以て之を先天的即ち實體論的の議論に訴へて之を求めんと欲して求むるを得ざりし眞理なりとす、

第三篇に於て第一に究明すべきは、萬有の本性と進路に於て、絶對的實在者は果して何物として啓示せらるゝか即ち是れなり、今夫れ世人の通例稱して世界學的議論と做す所の者によりて、吾人は明に絶對的實在者は宇宙の據て以て立つ所の第一原因若くは第一勢力なるを發見す、スペンセル氏の如きも此點に至迄は吾人と其意見を同ふせり、而して吾人一層進歩して萬有の本性と進路を觀察するとき、則ち更に之を統御する心意の存する明證を見るなり、是れ世人の通例稱して意匠論或は結局論と云ふものなりとす、然れども此論證の區域は尙ほ甚だ廣し、吾人は萬有に於て理性の四個の根元觀念の一々顯現するを見る、曰く眞、曰く善、曰く全、曰く福、是れなり、萬有は合理的思を表彰し、理法の下に整齊せられ、理想の方向に進行し、用を足し、殖を生出す、故に吾人は神に於て、連續の理法斷るとなく、物界的のものと超物的のものと互に相契合するを見出すなり、或は謂ふ、若し進化論にして眞實に證明せらるゝならば、此全體の證據論は一切齟齬に歸すべしと、然れども吾人宇宙全體の進化は、眞理若くは思想を啓示し理法の下に整齊せられ、歴世歴代を通過して愈々存在の高尙なる階級に進歩し、且つ此存在者の爲に用を充たし、而して字

宙の進歩的發育統一及び連續を表することを論示し得べし、假令進化論にして萬有統御の心意に關する假定の徵證を、細末の點に於て破毀するとするも、吾人は其之あるを見されども、其破毀する所のものと回復するところのものとを比するときは、彼此の得失相償ふて餘りありとす、何となれば進化論は萬世に通し、無數の分子と勢力の合致せる動作に依り、元初の純一原質よりして全宇宙が進歩的に發達せるの事實に顯れたる心意的統御の證據を表示して、吾人に許多の貴重すべき確證を與ふればなり、

次に吾人は人類の本性と歴史とに就て觀察を下し、神に關する信仰は、其根元合理的有心者たる人の本性の各部即ち理性、意志、感情に存するを示すべし、又此信仰の眞理なるとは、正しく人類の歴史を理會し、及び人類生存の目的を發見するに極めて切要なることを證明すべし、

第四編に於ては、余當さに基督に於ける神の啓示を考究すべし、然れども詳に其細事を擧げて基督教の證據論を講究せんと欲するに非ず、只基督に在る神の啓示及び奇蹟に係る必要の觀念を確定解説し、並に正當の意義に於て萬有の連續律を遮斷

するとなくして、奇蹟を行ひ得可き合理の基礎を發見せんと欲するのみ而して、結論に至りて、吾人は物質と超物の兩世界に於ける神の啓示は、太古純一原質に運動の始まりしより、合理的人類の出現に至るまで、幾世幾代間斷なく進化して、始終統一繼續したるの事實を表示すべし、又其初より道義系を成せる人類の進歩的の教育と發達とは駁々乎として止むとなく、遂に一大時期到達し、神は基督に在りて出現し、世を已に調和せしめ、聖靈に因りて新に人類を産み、地上に在る義と平和の王國なる、高尚靈妙の境域に之を掖導するに至る迄、其啓示の統一連續して、少しく紛亂せしとなき事實を表示すべし、

以上種々の線路に沿つて吾人の研究を遂ぐるに方り、吾人若し本書の問題に關係せる今代各種の思想を網羅せんとせば、吾人は只神の觀念に關する疑念と困難との點のみならず、亦た其最高至上の觀念をも羅識せざるべからず、今吾人何れの處にか行かん思へば、必ず其現に在る所よりして行歩を始めざるべからず、之と同く各種の學術に於ても、亦其既に到達したる最高至上の點を基礎とし、之よりして其研究の歩武を進めざるべからず、然り而して神の觀念に於て既に到達したる最高

至上の點はと問へば即ち總ての力と智と愛とに毫も欠けたる所なく、而して世を己に調和せしめんが爲めに常に人の中に働くの靈なりといふ基督教の觀念に外ならざること非とするものなかるべし、夫れ基督教に於て神は絶對の力なり、然れどもエピキユリアン派の誨へし如く、宇宙より隔離するものに非ず、反て常に宇宙に活動して、吾父は今に至るまで働ま給ふ、神は我儕各人を離るゝこと遠からず、我儕は彼に頼て生活し活動し又存在するを得るものなり、神は又絶對的の理性なり、然れどもストアイク派の信せし如く、無意、無情の理性に非ず、生命ありて活動する所の理性なり、所謂絶對の理性たる神の内には、總ての真理、理法、及び至福至美の理想永久無限にして儀型的に存在するなり、而して神は宇宙の間には是等の者を進歩的に現實して、以て永世に自己を啓示するなり、神は又宇宙に遍滿するものなり、然れども凡神教派の誨ゆる如く、宇宙と同一なるものに非ず、迥かに宇宙の上に超越し、永く宇宙に活動し、全愛の作用に於て全智の思想を其中に現實するものなり、神は又宇宙に存在す、然れども其存在するや、只無明なる力の下に必然上より開展する物質系に於て存在すのみならず、亦罪惡より人類を救贖し、義と善とに人類を誨

誘し、而して進歩的に世界の中に天國を建設して、以て道德法の下に在て活動する有心的自由作用者が成せる靈系の内に存在するなり、元來物質系なる者は靈系が其内に存し、之を通過して以て自系を顯す所の形體たるに外ならず、要するに余が本書に於て明答を試みんと欲する所は、即ち吾人は自己の意識に於て、宇宙に於て萬有の本性と進路に於て、或は人類の本性と歴史に於て、耶穌基督に於て、地に於ける神の王國の發達に於て此かる神が人類に自己を啓示しつゝある證據を發見し得べきや否やの問題に在りとす、

(余が通例理性なる語を用ゆるは、有限的心意か其合理性の徳に因り既に知られたる者より未だ知られざるものに移る所の推理力のみを表するに非ずして、原始、普般の原理を具へたる合理的直覺力を有すると認められたる心意若くは靈其物を表はすものなり、蓋し人の心意は有限にして推理の必要を感じるか故に、此かる理性は即ち有限の心意中に在て推理力を有するものなりと言を須たず、獨り絶對の理性なる神に於ては、凡ての智識儀型的にして無究無限なり、) 吾人は神に關せる最高觀念を以て吾人の研究を始むと雖ども、吾人は神の人類に

己を啓示するは必ず進歩的にして完備し能はざるものなることを知る、何となれば是れ絶對無限の神が有限界中に於て有限なる人類に對して啓示するものなればなり、然るに懷疑論者が常に反對を試むる所の議論に曰く、絶對の理性は完全具備の宇宙に於てのみ己を啓示し得べし、若し其啓示を通過せしむる所の媒介者にして不完全ならば、則ち之に因て啓示する所の神も亦不完全なることを證明するなりと、此論者は、絶對若くは無碍と有限との區別は、眞偽若くは正邪の區別の如く、理性の根基にして、如何なる威力も、如何なる全能力も、敢て之を毀壞すると能はずと云へる事實を看過せるものなり、若し神にして己を啓示する者ならば、必ず有限の媒介物を看過して、有限的實在者に顯はれざるべからず、而して啓示現の度は、其通過スル所ノ媒介物及び其受る所の心意の發達の程度に符合せざる可からず、故に啓示其物と、人の之を受て有する神に關する理會とは、必ず進歩的ならざるべからず、而して常に不完全ならざるを得ず、又其啓示する所の神は眞の神なれども、人の此を理會するは人類發達の程度に隨ひて不完全なるのみならず、亦甚しき誤解の爲に防害を受くるとあるべし、

以上述ふる所のものは、本書に於て吾人の眼前に横はれる問題にして、又之を解説せんとする思想の要領なりとす、而して余は右の證據の細事を挙げ一々考察するとを務めず、何となれば其事たる本書一冊の盡す所に非ずして、宇宙の間森羅萬象一として神に關する知識に對して多少の關係を有せぬものなければなり、今一々之を擧ぐるは容易ならず、故に吾人は吾人の當に取るべき論據と、證據論の因て起る所の諸點と、今代の思想と生存の傾向とに對して、此證據を論述すべき方式を指示するのみ、

今日廣く世上に弘布する懷疑說にして何等の智力的基礎を有する限りは、是れ原理と事實との誤謬に由るか、或は實驗的若しくは哲理的學術に於て、眞理と事實との適用を錯まりたるに由るものとす、故に其論は哲學、物理學、人類學、及び社會學に關する極めて深遠なる問題を網羅するなり、然れども其諸問題と諸探究は極めて深遠にして、之に熱心傾意する者は勢ひ世に甚た拙きにも拘はらず、其誤解、疑惑、不信の枝葉は極めて多衆人の思念中に浸淫したり、今夫れ韓圖の哲學を講究する者は寥々晨星の如し、日耳曼に於て福音主義の生活及び其思想を痲痺せしめたる凡

神教の如きは、皆之より流出せしなり、佛教も又右に類する哲學の誤謬より起りて、數億萬の人心を支配せり、サー・井リアム、ハミルトンの哲學を研究する者は甚鮮し、然るにスペインセルは此說を不可知說の應援と爲し、其結果は印度日本に於て勢力を逞くし、基督教會に正反對の位地を占む、而して宛も基督敎國の學校に於ける如く、彼國の職工場に於て講究せらるゝなり、又物理學を充分に研究するの機會を有するの人士は極めて多からざるなり、然るに進化の理法、勢力對立及び保存、萬有の不變の理及び其連續等は、普通の講筵及び文學上に於て、神或は超物的實在者の存在を否定するに誤用せらるゝなり、故に其枝葉の論を撰せんと欲せば、則ち其根本よりして之を截斷せざるべからざるなり、而して有神說を辨護するに當て、吾人の銘肝して忘る可からざる壹事は、則ち神に關する吾人の信仰は、外部世界に於ける吾人の信仰の如く、自生的に吾人の心中に湧出するものにして、又能く確乎たる基礎を有せるものたる、及び神に關する信仰に人を開導するには、第一人類に對して神の必要なるとに就ての意識に、及び神の存在と其恩恵とに就きての經驗に、人類の靈的感性を醒覺せしむべき能力ある、神の聖靈の威力に依頼せざるべからざる

ると是なり、蓋し學術的研究と學術的證據に據らすして神を信するとの確實なるとは、猶學術的知識なくして日月、星辰、水火、風土等を信するとの確實なるが如し、然れども有神説にして一度懷疑派の攻撃に遭逢するときは、則ち單に自由的宗教心に訴ふるのみにては、其敵より自己を防衛する能はざるなり、懷疑派が進撃の武器として使用する深遠なる問題と、怖るべき困難とに對して躊躇逡巡すべからず、之に反して智力的に有神説を講究する時は、忽ちにして是等の諸問題を征服すべし、何となれば有神説は真正なる宇宙説にして、宇宙を以て絶對完全なる理性に根據し、其永遠にして儀型的なる智能を表顯する全備統一せる合理系を成すものと爲ればなり、故に有神説は常に感情を搖かすのみならず、併せて知識に明證を與ふべきものたらざる可からず、若し有神論者にして此智能的證明論を主唱するとを廢止するとあらば、則ち是れ議論の全勝を擧て之を不可知説派と懷疑主義派に放任するなり、又有神説の根據及び之に關する懷疑説の謬論誤説を輕忽に付し、是を以て哲學者と神學者の書齋の闕外に出つるとなき形而上の論となし、普通一般の思想家と宗教の利害には秋毫も關係なき者とするか如きは、蓋し有神説を辨護せん

と欲して反て自殺する者なりとす、

さて哲學、物理學、人類學、及び社會學に於ける是等深遠なる原理と事實、及び其原理と事實との正當なる理會と適用とは、神の智能的又は道理的の智識と相待つことを、余已に、有神説哲學基礎と稱する拙著に於て論述したり、故に本書に於ては、人の經驗或は意識に於て神の啓示の眞實なると、及び宇宙の本性と進歩と、並に基督とに於ける神の啓示に因て、其經驗と意識とに於ける啓示の眞實なることを證明して、彼書に確定したる原理の適用を示すべし、若し必要の場合には複雑を避けんが爲めに、時に或は前書に就て引照を求むるとあるべし、

以上述べたる所よりして生ずる斷案は他なし、基督教有神説は實驗的及び哲學的學術と、進歩的文明との面前に於て、幾分か寛恕せられたる、而かも劣等にして且つ確定ならざる立脚の地を見出し得べしと云ふが如きのみならず、反て宇宙究竟の理性にして宇宙に啓示せる絶對的の理性なる神の存在は、凡て學術的智識に必要不可欠の前定たりと云ふこととなり、神の存在は一定不易にして一般普通なる道德法を承認せる凡ての倫理哲學に於て、必要の基根たりと云ふこととなり、全及び美と

云ふ合理的にして一般普通なる標準の實在を確認せる凡ての審美學に欠くべからざる基礎なりといふとなり、人間行爲の目的の中に就て、人生追求の目的物と快樂の源泉との間に區別をなし、而して道理の光明と其不變の標準とに因て、合理的實在者として、人類に相應せるものは如何、千變萬化の事情境遇の中に在るも、依然として不變永續なるところの彼の眞福なる者は如何と、之を決定する凡ての結局^{テロク}、學に欠くべからざるの基礎たりといふとなり、人類を罪惡の中より救ひ、義と善との王國を建設して之を進めつゝある、基督にある神の啓示は、殊に人類歴史の完全にして満足なる哲學なりといふとなり、是に因て吾人は獨り人間進歩の眞目標を知り、義と善との地上に於ける王國に在て、人間の享く可き幸福を眞正に現實すべきとを知り、及び其進歩を成遂すべき動機、光明、及び活氣を知るとを得るといふこととなり、將た又神の王國の進歩は時世の進歩に隨伴して、諸種の疑問、困難、及び反對を征服し、以て永久に増加する宇宙の知識は、永久に神の啓示を増進する所以なることを示すと云ふことなりとす、吾人は是に至てアレキサンドリアのクレメントが、哲學者は基督に因て成人とせられたるに非ざれば、則ち是れ小兒のみと云ひし所

以の眞意を明解し得るなり、(ストロマタ(書名)第一卷十一章に出づ)

本書は余が多年神學生を教授する間に、斯問題に就て講明精究せし所の成果なり、其講究の際に、吾人今代諸種の研究と發明とより發出せる新光明を利用して、以て百般の疑問と困難とに當らんとを務めたり、又吾人は基督教有神説と經驗的及び哲學的學術との和合を看出して、皆に之を學術系に統一して以て之を曉得せるのみならず、亦神の進歩的啓示として、一層廣大に宇宙を統一せる觀念を以て之を曉得するとを務めたり、余は神の存在、其啓示の眞實なると、及び基督教有神説と經驗的及び哲學的學術との契合を信せしむべき完全なる理由として、本書を公衆に呈するに非ず、只た本書は此の如き結果を生ずるに幾分の補助を與ふべく、懷疑説の誤謬を明かにし、信徒の信仰を堅確にし、其智識増進するとを得べく、紛亂疑惑の中に、我等を去ると遠からざる神を求む、世の忠實なる研究者を利導せんとの希望を以て之を呈するのみ、若し其れ本書にして余が希望を満足せしむると極めて鮮しとするも、主は寡少の事に忠實なる奴隸の爲に其恩恵を垂れ玉ひ、而して其僅少なるが爲にとて、主より付與せられたる才能を隠秘する奴隸を譴責し給ふべし、

第一編

神は宗教上の信仰と奉事の目的者として人類の經驗意識に啓示せらる、

凡て宗教に關する哲學の根念は實に此に在て存す、此根念は宗教の中に進歩の階段と變轉する形跡とありて、靈の元精上欠くべからざるところのもの、即ち神に於ける眞の自由に迄靈魂を高むることを承認し而して純然宗教の眞面目を抽出せり、

フライデレル

要するに宗教の元精を組成するものは、吾人が神に關する人類的の觀念に非ず、又神を禮拜する方式にもあらず、只神は存在すてう吾人の意識及び神の指導と神の攝理に依頼すてう吾人の意識とにあるのみ、而して神の崇拜者は禮拜の方式に關して差異あるにも拘はらず、皆此點に於て同一なり、吾人は凡て一人の父を有せざる乎、唯一の神は吾人を造らざりし乎。

ヘブリュシヨナル

宗教家は彼自身の思想と相交通するを欲せず、而して神と眞の交通をなさんと欲す、……宗教的感情は神と觸接せんとを望む、只教義及び過去の歴史と

觸接するを以て満足せず、

ドルテ

神は元精上靈なる者なり、宗教は靈と靈との關係なり、此關係は宗教の根基なり、故に有限の感想外に其心を擴むると能はず、永久無限の高位に登りて、靈の純境を觀ると能はざるの徒をば、茲に研究せんと欲する斯問題に近接せしむると勿れ、

ベトゲル

吾人は何の所に社會の全精神を包括する原理を發見すべき歟、技藝に於て之を發見するか、文學に於て之を發見するか、哲學教系に於て之を發見するか、將た社會制度に於て然るか、若し各國の人民中に此數者よりも尙一層深遠にして、社會生活なる觀念に尙ほ一層直接にして、一層離れ難き要素あらざりせば、以上の數者の中に之れあらんと疑なし然れども世實に此者あるなり、其物たる永く社會に現存し、生民の心髓之に因て陶冶せらる、斯の如きものは宗教に非ずして何そや、何となれば彼の政治的制度、技藝、詩歌、哲學、及び或點に至る迄は人事の進路さへも皆其必要の結果として生出し來るものなればなり、今汝一國の民風を看察し、其人民の崇奉する神の性質如何にまで汝の研究を進めざる限りは、汝決して其民風に通曉したり

と思念する勿れ、……若し汝一社會の教義を知らば、汝は眞に其社會生存の
 状態と傾向とを知れる者なり、其秘訣に通曉せる者なり、即ち汝は其社會の笑語と
 涕淚の如き幻影の爲めに汝の觀察を謬まらるゝとなく、實に其社會の表面上より
 其思想を讀得せしのみならず、其社會の精神の奥底に神の自ら形成し、記載し玉へ
 る奥義を讀み得たるものなり、

キ
子
一

宗教なる者は吾人の意識に對して一種の郷となれるものなり、茲に世界の種々の
 迷妄は解曉せられ、思想の諸々の紛争は説明せられ、調停せられ、諸々の苦勞と諸々
 の悲痛は治愈せらるゝなり、是れ眞に永劫眞理、永劫休靜、永劫平和の郷なり、夫れ人
 の人たる所以の者は何そや、思想あるか爲なり、一層嚴密に具體的に云へば、則ち其
 靈あるか爲なり、彼の學術、技藝、政治、制度等百般の事物は、皆其靈たる人類より湧出
 する者なり、然れども是等百般の事物及び其他雜駁なる人事の關係、舉動、快樂并に
 凡て幸福と榮譽を求むる爲めに人類の常に爲すべき事は、一として其終極の中心
 を宗教に於て發見せざるはなし、神に關する思想、意識、感情に於て發見せざるはな
 し、神は萬物の元始にして又萬物の終極なり、萬物皆神より出づるか如く、萬物又神

に還るのみ、故に神は萬物を成育し、活動し、感化するの中心點なり、而して人類一た
 び宗教に因て自己を此中心に關係せしむれば、則ち他の百般の關係も亦皆此中心
 に集まり、以て自己を意識の最高度に進むものなり、又諸々の吸引より超脱し純
 潔に其心を満足せしめ、自由に其身を高めしむるものなり、……感情より言
 へば、此神に對する關係は吾人の休福と稱する自由の享樂に外ならず、活力より言
 は、神の榮光を顯はし、其主宰權を現はすに外ならず、而して苟も此境に到達したる
 の人は、最早自己の爲めに、自利の爲めに、虚榮の爲に生存する人に非ず、反て絶對的
 目的の爲めに生存する人となるなり、凡そ人宗教的意識の眞理を保つものたるを
 知らざるはなし、人類品位の原因として、生存の安息日として常に宗教を尊崇せさ
 るはなし、假令如何程吾人の疑惑困憊を來すとあるも、吾人は此が爲めに逡巡する
 となく、勇往奮進して、凡ての繫累、煩勞、及び限りある世俗の利益を浮世の沙岸に棄
 て、顧視するとなく、宛も地上幾千尺の最高峯頭より悠然として四方を瞰視する
 如く、吾人は靈眼を適かに紛々たる生活場の上に下し、靈の太陽より發出する和煦
 の光線に因て、清潔なる靈の境域を望むなり、

へ
一
ゲ
ル

第一章 宗教

宗教とは吾人が神と稱し得べき超人的及び超物的なる勢力と人との關係に就て人の有する意識にして、自然の信仰感情及び神に嘉納せられんと欲して奉事するところの行爲に於て現はれ、宗教とは人と神との關係に對應せる内部の心情及外部の行爲なり、宗教とは實に常に在し、常に活動する神の臨在及行爲に向て人の靈魂が意識的に對應することを云ふ、

(一)基督教とは絶對的宗教即ち一統宗教なり、然れども之を以て唯一の宗教と爲すとを得ず、蓋し宗教なる名稱は、唯敬虔の心を以て基督教主義の信仰及愛の生涯を送る人にもみ附するを以て正當とすとは、普通に基督教徒の間に行はるゝ思想なるが、此れ決して一般に此語に附せられたる意義にあらず、何となれば世人は之を世界の諸宗教に適用し、其多神教たると一神教たると、其鄙教たると基督教たるとを問はざればなり、固より神の嘉納を受くるに信仰と愛の至要なるは言ふ迄もな

し、左れど此は宗教の定義に對して切要欠くべからざるものにはあらず、基督教は絶對的の宗教なれども、自己の外に宗教あるとを拒むものにあらずして、却て異邦宗教に存する眞にして是なるものは一切之を採用す、其之に反對するは唯其信仰、行爲若くは精神に於て誤れるところあるときのみなり、基督教は實に諸宗教が漫りに辿り寄りんと試むる目標にして、基督教の贖罪は諸宗教が徹かに其要を感じ、仄かに其望を寄するところなりとす、基督教は恰も太陽が星晨の光を消さるるも、蒼空に溢り渡る赫々の光の中に之を吸収し去りて其光を亡ぼすが如く、終に諸宗教を亡ぼすに至る可し、

若し然らすとせば、是れ基督教の外には世に宗教なるものあらざるものにして、基督教の前には宗教なかりしものたらざるを得ず、果して然らば宗教が人の本質にして東西古今人間の特有質なりしとの證據は一も之れなきに至るべし、果して然らば宗教なるものは幾世幾代人間が之を有せずして生存せし後、人間の歴史、成長と毫も聯絡なくして、忽然奇怪、不思議に地上に現はれ出しものたらざる可からず、果して然らば宗教は外部より人心に植えられしものにして、毫も人性に其根を發

せしものに非ず、又人間の歴史上にも生活成長を爲せるものにもあらざるなり、是れ甚た解すべからざるとなり、

(二)人の宗教性とは、常に活動して萬有の本質、運行及人の本質、歴史の中に自己を啓示する眞神の臨在に、人の靈魂が對應するとを云ふ、人は神の面前に生活し、神の活力の中に生存し、又其本質は神の感化を感受し、之によりて神の臨在を覺知するものなるが故に宗教的なりとす、最も下等の蠻人と雖ども、至るところに活現する神の面前に生活し、其活力の中に生活す、彼は其靈の情性によりて神の臨在を覺知すると、猶其肉の情性によりて大陽樹木の臨在を覺知するが如し、吾人世界の宗教を見るに、人は一般に此秘密なる實跡の面前に生活し、而して自己は之に依頼して立てるものなりとの意識を有するとを知る、人間が如何なる進歩段階に在るにもせよ、人間生活の摸型の何たるにもせよ、人は自ら超人的及び超物的のものを認む、

(三)人は其意識中に神の臨在を覺ると右の如し、然れども其思想中に形くる神の觀念は、其始め曖昧不充分にして、又通常誤謬あるを免れず、其真正なる觀念に到達するには永き歳月を要するとなり、此點に於て人が神に就て有する知識は、人が外界

に就て有する知識に同じ、例へば、人は始終日月、星辰及び地球の面前に生活し、且千古渝らざる活力に接觸せり、彼れは此等のもの、臨在を覺知し、又之に就て或る正當の觀念を有す、然れども彼は太空を以て光點斑々たる蒼色の圓天井と爲し、地球を平にして動かざるものと思ひ、大陽、星辰は天上に轉るものと考へたり、彼が萬有に就ての知識は其神に就ての知識と同しく誤り、其正當なる觀念に進歩するの遅々たるも全しく相若けり、然るに斯く人の思想の如何程誤りしにもせよ、彼の始終人に接觸し、始終自己を啓示しつゝありしものは、實に眞實の日月、星辰、地球にてなりしなり、此の如く昔人の神に關する觀念の如何に誤れるにもせよ、神は一個の眞神なりとの知識に進歩するの如何に遅かりしにもせよ、彼の始終自己の臨在、行爲を以て自己を啓示し、人が實際始終之を意識したりしものは、實に眞の神にてありしなり、

(四)諸の宗教に於て、宗教的の信仰、感情、及奉事の目的者は超物的(苟くも直覺的理性自由意志を稟有する靈及び有意者は超物的即ち萬有の上に位ひするものなり)及超人的の存在者なり、神は絶對的靈なり、此絶對と靈なる兩語は、神の二様觀念を示

す、神は其普及の臨在及行爲によりて、自己の無限即ち絶對の靈なるとを啓示し、人の靈魂は神の臨在に對應して自然に其中に宗教性を有す、故に吾人は此自然の宗教的意識中に、少なくとも神の二要觀念の何れか、必ず其印象を爲せるの跡あるを發見せざる可からず、蓋し右の兩語は裝昧不文なる人民の用ゆる語字の中に存在せざる可く、而して此等の語が表示する觀念なるものも、此かる人民の思想中には明瞭に整頓せらるゝとなかるべしと雖ども、彼等の心中には無限者に關する或る模糊不明の感情ある可く、果して之に關する觀念を有すとせば、此無限者を超人的のものを思考し、且神は靈即ち超物的なりとの或る感情即ち念を有せざるべからず、要するに世界人類の宗教中には神の無限性及靈性に對應する自然の感情及信仰あるべき筈なり、然り而して吾人は事實上正に斯の如くなるを見る、無限的なる念は、萬有中の超越的勢力を見るよりして起り來るところの嘆異、畏慕、恐怖の念に於て現はる、吾人の世界は至るところ人の曉得力及び其勢力の外に出て、上に超るところの存在者及勢力を人に向て發表す、彼は上下四方に自己を啓示する無限者の面前に生活す、彼の人の近くべからざる大空にも、彼の廣大幽鬱なる

森林にも、彼の渺々たる大洋にも、舟楫の通せざる河川にも朝な夕な新なる曉の光にも、雷霆にも、電嵐にも、種子より植物の發生するにも、陽春三月草葉花卉の萌生するにも、將た產生生命に關する一切の秘義にも、凡て無限的の現はれさるところなし、人は此く至るところ常に其曉得力、及其能力に超越せるものに接觸して、自ら畏慕の念を生ずるより、轉た自己が此等の當り難く、曉り難き勢力の中に閉ち籠められ、限られ、捕はれ、又自ら之に依頼して立つことを感ずる神は常に超人的なりとす、

之と同時に人は自己の中に思想、感情及意志あるを發見し、自己の有志的行爲よりして始めて勢力即ち原因力の理を知る、彼は其四邊に目撃する結果を以て、勢ひ自己の如く思想、意志を有する勢力の致すところと爲すに至る、此傾向たる今日下等の蠻民中に發見せらるゝところなりとす、嘗て某の蠻人ありしが、始めて時計を見て之を活物と思へり、已にして其廻轉し了りて運動を止るを見るや、是れ時計の眠れるなりと云へり、嘗て蠻民の中に派遣せられたる宣教師、一僮に命して他の宣教師の許に果物を贈りしが、之に添ふるに一書を以てし、而して其中に果物の數を記

し置きたり、童兒は書狀が事を通ずるとを知らるが故に、途中人無き處に於て石下に之を隠し、而して其中の一二顆を喰ひたり喰ひて後再び書狀を取出し、殘餘の果物と共に之を呈せしに、豈に圖らんや、宣教師は其紛失せし果物に付て童兒に問ふところありしかば、彼大に驚きて、石の下に隠せし書狀が如何にして己の爲せしとを知りけるかと奇異の念に堪へずしてありしと云ふ、此の如く蠻人は己か畏敬する超越的に且曉得し難き勢力を以て、自己の如き睿知を具へたる存在者となすなり、彼既に他に依頼するの念を有す、是を以て彼は此勢力に號呼して扶助を求め、又如何なる供物を献し、如何なる奉事を爲さば、其忿怒を避け、其恩恵を受け得べきかと思を凝らす、

神は有心者即ち靈なりとの或る意識は、宗教と離るへからざるの關係を有す、何となれば恩恵を受けんと欲して神に奉事し、以て神と交通することは宗教の骨髓たるどころなればなり、ロセ曰く、宗教的の自覺とは、神と交換の交際、即ち神と相交通することを直接に意識するを云ふ、然り而して此事たる唯有心的の神とのみ爲し得べきところなりとす、神が一個の「我」にてありてこそ、始めて彼は吾人に對して「汝」

たることを得べし、然り而して神は實に最下等の宗教に於る宗教的の人民に對しても、常に「汝」たりき、何となれば、斯る下等人民の宗教の骨髓たるところは、神に祈禱することにてあればなりと、

此によりて觀れば人が自然に有する宗教性とは、獨り其無限的に關する念を云ふにあらず、又は唯其靈者に關する念を云ふにもあらず、神は只到るところに己れを現はす超越的に且曉得すべからざる勢力たるに止まらず、唯靈人(幽靈)を云ふ、例へば死去せる祖先の再現の如し、たるのみにもあらざるなり、神は實に此兩者を結合す、原始自然の宗教とは、人の靈魂が神即ち絶對の理性、永遠の靈の臨在行爲に對應するの意識如何に其模糊不完全なるにもせよ、を云ふ、宇宙は即ち此神の儀型的思想の發表にして、神は宇宙の中に遍滿し、而して常に之によりて自己を啓示す、

(五)人の進歩するに隨ひ、人の神に關して形くる思想は、漸次に淨められ、正され、補はれて自ら變化を爲す、然れども彼は常に無限的、及靈的即ち超物的に接觸するが故に、以上の二要素は常に滅するとなし、

始めには有限的と無限的即ち絶對とを區分し、又人の曉得、支配し得るものと人の

知識能力に超越するものとを區分するの地平線は、其距離頗る遠し、原始の世靈魂アウロムの行はれし時に當ては、人の未だ見聞せしとなき作用者とあれば、皆活物と信じ、何物と雖とも神の住所若くは合龍廟たるを得べしと信ぜり、然るに人が知識上及教育上に進歩を爲すに隨ひ、右地平線は漸く遠きに退き、知り得べきもの、及既に見聞せしもの、範圍は益擴張せらるゝに至る、然れども萬有中の偉大雄剛なる勢力を見ては、人は尙無限者の面前に在るを感して畏恭の念を生し、而して其中に一個の心意の作用するあるを發見し、諸神中の大なる神を崇拜す、蓋し此等の神祇とは、或は大陽の中に寓し、或は月球の中に宿し、或は海の中に、或は他の萬有の大勢力の中に在りて支配する力を云ふなり、且人は人の災厄を濟はんが爲め、又は大幸至福を施さんが爲めに、未だ嘗て見聞せしことなき大能力を發揮せる人を見るときは、直に之を神として崇拜するに至る。

此かる朦昧不文の状態に於ては、日常普通にして説明し得べきもの、終に宗教的感情を醒覺するの力を失ひ、人は非常奇異なるものを見て、纔かに神の念を永續す、然れども彼れが一層の進歩をなし、終に萬有の一樣なること、其理の不變なること、及

宇宙の美なることを認むるに至るや、彼は始めて無限的を見、又此等のもの、中に理性の臨在するを見るべし、是に於て彼は宇宙に自己を啓示する無限の靈に關して一層高尚なる觀念に到達するに至る、且や如何に學術が進歩すればとて、毫も神なる宗教的の意識を排斥することなく、又は智性上絶對の靈を認むるの必要を拒むこともなし、太陽系及一切の物質塊相互の交渉を説明するに於て、學術は引力なるものを認む、然るに此引力を以て物質固有の力となすも、將た中間の媒介物によりて他より傳與せられたるものと爲すも、到底其説明の究極するところは、説明すべからざるもの、に達せざるを得ず、學術は勢力對立法及勢力保存法なるものを説き、之を以て宇宙の秘訣を闡明したりたりと考へ、分子動と物塊動とを一視し、遍在的イデア精氣の顛動を以て光を説明す、然るに實際其説明を始むるや、困難四出して復た解くべからざるのみならず、一見矛盾不可能的事實に遭逢するを發見するに至れり、學術が元子及分子によりて發見せるところは、結局此等の物が究竟的のものにあらざることにして、其製造せられたる物品たるの跡あるを示して、吾人の思想を其裏面の勢力に注かしむ、有神說哲學基礎四一六頁至四二五頁、學術の最も

明白なる光明によるに、宇宙は今尙自己を通して、又自己の裏面に吾人曉得力を超越し、宇宙の中に活動し、宇宙を支持し、宇宙を指導するの勢力として、絶へず己れを啓示する絶對の靈あることを示して止まず、人は物界的に必用欠くべからざる裏面として、常に超物的のものに發見せり、ハートマン曰く、凡ての物界的に至るところ超物的に基し、超物的に極まるとは、餘りに思想を費さずとも人の承服し得べき説なり、萬有の元子は一々其超物的の起原及實在者を説明し、機械的作用の力は一々内部に隠れたる感情に究極す、蓋し此感情は意志に給するに其目的物を以てするものなりと、學術の進歩は毫も超物的を排斥せずして、却て益々明白に、其眞實にして雄大なることを啓示し、超物的が實に萬有を包括するに止まらずして、人間知識の全體を包含し、之をして合一ならしめ、一貫せしめ、眞實ならしむるところの絶對理性なることを啓示す、學術は實に此廣濶なる超物的を排除するを得ざりしのみならず、却て之が實中^中の最も確實にして根本なるものたることを示すに至れり、故に吾人にして若し絶對理性を知るの力を失ふことあらば、一物とも知ること能はざるに至る可し、

夫れ宗教は實驗學術及び哲學、神學に先立て世に存せり、宗教が自己を顯はしたる感情及び奉事の種類は千變萬化なれども、皆宗教の特性を顯はさぬはなし、試みに思へ、惡靈の凶熾を消除せよと信徒を勧誘する沙門教シヤム教の慘烈の如き、三位一體の秘義を尋思せるエトワーズ奪魂の如き、凡て己が物を喪失するをも顧念せず、基督に於て顯はれたる神の恩惠の嘉音を人類に傳ふるを無上の快樂とし、己れを犠牲にしたるポロの仁愛の如き、人の宗教に關する意思、感情は千萬も畜ならずと雖も、其超人的及び超物的實在者に對する干係の意識を顯はすに至ては即ち一なり、以上述たる宗教的概念は、有神說の見解の點よりして必要なるのみならず、亦人類學者が世界萬種の宗教の研究に於て確定したる事實に因ても維持せらるゝなり、(六)之に反して、如何なる信仰、感情又は奉事に於て顯はるゝとも、其意識にして無限、超物なる者より感受したる印象の端を全く欠くが如きことあらば、則ち是れ宗教には非ざるなり、

人間の本性的宗教心は、其者自身にては人に宗教を賦與する能はず、乃ち其本性的宗教心の目的者としては、神たる者あらざるべからず、然らずんば則ち宗教ある能

はざるなり、人は本性上、覺官の印象を受くるを得べき性を有す、然れども、設し其覺官上に活動して人に自己を顯はし、且其人自身の感性を其人に見はす可き外部世界あらざりせば、則ち被覺物又は能覺者自身の知識を其人に與ふる能はざるなり、之と同じく宗教的印象に對する人間の感性も、亦其宗教的感性上に活動し、之を通過して以て自己を顯はし、及び之に因て其人自身が本性上有する宗教的感性を顯はすべき神なくんば、則ち神及び自己の宗教的感性の知識を人に能ふる能はざるなり、夫れ神は無限の靈なり、故に若し其往く所としてあらざることなき神の存在と作用とに因て、人の宗教的感性は神を意識すると同時に、自己の宗教心を意識するものとせば、則ち此意識は神の無限性と靈性の兩者に就て多少明白なる印象を顯はさざる可からず、然らざれば宗教あると能はざるなり、人の本性的宗教心と、及び之に對して目的者を發見するの必要は、今日に至て一般世人の承認する所なり、而して之を満足せんとて有心的神の外更に種々の目的を提出せられたり、何となれば、今の世の人、宗教の目的物として神に就ての意識なくとも、充分正當の意義に於て宗教を建設し得べしと謂へはなり、

不可知説は、不可知者の祭壇に在て靜肅なる種類の崇拜といふことを吾人に告げたり、スベンセル氏は凡て學術的知識に於ける必要の基根として、又は宗教の目的物として、絶對力の存在を承認せり、蓋し人間に在て此絶對の存在に於る信仰は本性的なるが故に、常に人類進化の途上を通じて存せざるべからず、故に氏は言へり、「何人も宗教的意識の消滅し、或は其進化の線路を變轉すべしと預想するを要せざるべし、其形骸の特質は、嘗て顯著殊異のものなりしが、過去精神的進歩の間に幾分か不明瞭に赴けり、而して將來に於ても永く衰廢する者なるべし、然れども此意識の實質は常に繼續す可し」と然れども氏は絶對のみを承認したり、抑も絶對なるものは神の觀念に必要な要素中の一たるに過ぎず、故に氏の説は宗教意識をも、又は理性の需用をも満足せしむると能はざるなり、夫れ宗教は其崇拜者と神の間に或る種類の交通あるとを假定するものなり、而してスベンセル氏は大膽にも斷論して曰く、學術は決して宇宙より秘義を取り去ると能はざるが故に、宗教は永く存在すべしと、然れども宗教は徒に不可知的絶對の秘義の上に存立し能はざるものなり、

スベンセル氏社會學原理に於て(第一編十三章より二十五章まで)主張して曰く、宗教と神に關する觀念とは其初め祖先の崇拜に起因せり、而して祖先の崇拜は幽靈を信するに因て來れりと、此說や、崇拜の目的者は不可知的絶對なりと云へる氏の教系と相反するものに似たり、且つ神なる觀念は決して幽靈の信仰に起因すると能はず、何となれば、人は死後の復活を信するの前、已に肉體に於ける靈の觀念を有せざる可からざればなり、故に氏が説は全く無根據の論たるを免れず、蓋し氏が自己の理論は、論理上の必要よりして下の如き事實に吾人を導くものなり、即ち人の靈魂に就ての觀念は、見るべからざる思想、意志及び勢力たる一の能力を有するものと自己を認識するに起原せること、是れなり、是れ實に事實の觀察に因て維持せられ、普通の考に符合し、此觀念の説明として全く満足なる自然單純の説明なりとす、抑も此觀念の根基を説明する爲めには人間の幻影及び夢想に依頼するを要せず、故に人は自己の周邊に常に見る所の萬有中の運動をば、自己と類似せる心意或は靈物の作用に歸すべきなり、スベンセル氏其人も其自説を辨護して下の如く云ふに至ては、極めて多く上述の如き意義を含むに

似たり、曰く、吾人は外部の勢力を考察する爲めに、内部の勢力の名辭を使用せざる可からざる必要の下に在り、是れ宇宙に物質的形狀を與ふるよりも寧ろ靈的人形狀を與ふる所以なりと(一八八八年正月發兌第十世紀雜誌十頁を参照すべし)思ふに宗教の根基として此幽靈説を精細に論究せんと欲せば、必ず奈何ともする能はざる困難の地に陥落せざるを得ざるべし、例へばスベンセル氏は日月、山川、草木、禽獸を崇拜する宗教を説明して、是等物體の名稱時として人間の姓字に假用せらるゝとあり、又勇猛の酋長は比喩的に山岳と呼稱せらるゝとあり、而して其人死する後に至ては、其假用したる名號を有する物體と其人とを混淆するとありと云へり、是等の説たる、全く氏が先入、偏愛の理論より編し出したる辯論中の著明なるものなり、之に反して他の一方には、彼の人類を崇拜するコント氏の徒弟の如き、神の觀念より有心的即ち靈的要素を離脱し去り、其中より絶對性及び超人性を拒斥して、以て宗教的意識の目的者となせり、是れ宗教の必用をも理性の需用をも兩つなから満足せしむると能はざるなり、蓋し是れ信賴と奉事の目的者として、有限的宇宙と人類とを超越せる絶對的靈に人の思想と精神とを進ましむるとあらざればなり、實

に此説の如きは、崇拜の目的者たる所のものを掲表せず、何等の一個の人間をも顯はさず、又人類自身をも掲表せざる所の者と謂つべし、何となれば其崇拜の目的物は、人類歴史の進路上に顯はれたる人の高尚優美なる品性に就て、崇拜者の心裡に形成せる一個の抽象物たるに過ぎざればなり、其崇拜者の心を満足せしむる所以のものは、崇拜者が不知不識の間に、力と智と愛とに於て完全欠くるとなき超絶的靈の概念の中に、眞善全福の抽象物を、實在物として存在せしむるに是れ由らざるはあらず、

人類は本性上より宗教的需用と感性とを有するが故に、吾人は人類の歴史に於て宗教が一の勢力たるを失ふに至るが如き時期あるとを憂慮するの理なし、又宗教の目的物が艱性なき不可知的、或は存在なき抽象の資性と成り果つべき時代あるとを憂慮するの理なし、幾世幾代、星移り、物換るも、依然として生存すべき宗教的目的物は、之に對する概念の度に時として消長あるも、永く人間の意識に自己を啓示する絶對の理性若くは絶對の靈たるべきなり、
マツシウ、アルノルドは道德と宗教を混一視したり、其言に曰く、宗教なる者は、感情

の爲めに激動、燃發、獎勵せられたる倫理に外ならず、道德より宗教に移るの途は、道德に感情を加へたるべきなりと、

然れども、道德は如何に激勵、燃發せられたりとも、宗教的信仰なきときは、宗教に非ず、又靈魂上の宗教的需要を満足する能はざるなり、元來道德をして宗教の地に登らしむるものは、凡ての感情にあらずして、只神に就ての意識より發生する所の感情のみなり、是れ韓圖氏の定議中に説明する所なり、曰く、宗教とは、凡て吾人の本分を神命として承認するを云ふと、

夫人類の神に對する關係の意識は、其勢勁猛にして、人類の生活と行爲との種々の境域に侵入せざるはなし、人若し明晰に無限の靈、絶對の理として神を知るとを得るに至れば、則ち凡ての眞理と理法は神に於て無限なると、凡ての人は神に對する共同の關係を有して、道義系の中に在ると、而して該系の理法なる者は、博愛の理法なると見るべきなり、人は又被造物として、自己が全く神に附屬するの意識を有するよりして、自己の眞實の情狀と契合すべき唯一の生活、眞理、理法に契合し、及び神の意に適ふ奉事たるを得べき唯一の生活は、博愛の行爲に其能力を使用して、人

の全く附屬する神を信仰し信賴する生活ならざるべからざる所以の理を見るべし、夫れ斯の如く道德は宗教により、進んで神に敬事するの境にまで至るなり、絶對一般の義務となるに至るなり、遍滿なる愛の理法の下に一括せらるゝに至るなり、愛に因て活氣を有し、又自然に發するものとして、無上大法の上に位するに至るなり、神の人に於ける恩惠と人の信仰に對する神の恩惠に因り、人の神に奉事するに於て感動せられ、又強健にせらるゝなり、此に於て乎、人は信仰と愛とに因て、道德を變して、神に奉事するとなし、愛なる神の像に、道義上人を化し、以て單純なる道德の生活より超脱し、而して神と相交通する靈的生活の境に至るなり、若し道德にして神の意識を欠くときは、是皆に宗教に非らざるのみならず、亦殆んど眞の發達に於ける道德にもあらざるなり、其眞の意義より之を云へば、良心の命令に服従したるものにあらざるなり、此只生命の水をして迸出せしむるを得べき神の觸接を待てる乾躁、頑堅なる岩石たるに過ぎざるのみ、思ふに無宗教の道德は、神に附屬せる被造物たる人類眞正の情狀に通ぜざる者なり、其最も必用とする所の神に對する信仰は生活に通ぜざるものなり、肉體と人慾よりして、靈と神とに自

己を上げんとを望む所の人をして、失望の境域に陥しいらしむる者なり、斯の如きは、神力の必要を認めずして、直に人を導きて自足の生活に至らしむる者なり、是に於てか、人々自己の自治力のみを承認して謂らく、自己の服従する所の理法は、其位皆自己より高からざるものなりと、斯の如くなるときは、則ち人間の本分をして、絶對の義務力と一般の適用とを失しむるなり、神の理法と政治の下に在る道義系を知らざるときは、則ち道德は愛の理法に對して、人類の價値に對して、一般の父と主なる神に對する、關係上人間の權利平等の神聖なるに對して、及び靈の生活は凡ての形狀と作用に於て、信仰と愛の顯現たるが故に、統一なりといふとに對して哲學的基本を有せず、單に義務の念と理法の必然なる命令とにのみ止つて、之より一層高尚なる愛の生活の統一、自然、熱心に達する能はざるなり、是れ蓋し規則の生活と謂ふて可なり、斯の如きは道德法の意義を極めて不十分に理會せるものに過ぎずして、其命令に對して、片面に且不完全に服従せるものと謂はざるを得ず、吾人が道德に就て此に論述せし所と同一の概念を以て、ウナルヅウナルスは、詩人の碑銘に左の如く記述せり、

(人間偶然に道義を存するも知らず天意の人間に存するを目は譬者の如く耳は譬者自尊自大己を神と爲す)

故に宗教道徳兩者の區別を考察し、靈の生活を現實する上に二者の必要なる契合及び共同補助を知悉するとき、則ち明瞭に以下の事實を知る可し、曰く、道徳は宗教と同一視し、或は宗教に代用せらるゝと能はず、神を信せざる所の人は、神に代用し、人の宗教的意識を満足し、及び其正しき靈の發達を現實すべき宗教の目的物を、道徳の中に發見する能はざるなり、

夫れ未だ嘗て道徳的立法者又審判者として神を承認せず、隨て未だ靈的生活に迄道徳を進達せしめざりし所の宗教は宛も未だ其正當なる成長に達せざる萌芽の如し、又宛も蕊雄植物の蕊が雌蕊と同一樹上にありながら、未だ其豊熟なる蕊粉を落すべき雌蕊花を發見せざるが如し、而して道徳若し宗教に因て靈の生活に進められざるならば、宛も是れ成熟するを得べき雌蕊が、方に蕊粉の落ち來るを俟ちつゝあるものゝ如し、

アト、エストラウス氏は曾て其舊時及新規の信仰と云へる書中に論じて曰く、吾人

は尙ほ宇宙其物を崇敬するに因て一宗教を組織し得べしと思ふに氏が斯言たる、平日虚偽の哲學の爲めに其信奉したりし神を捨棄し去られ、其信賴と崇拜の新目的者を氏が精神に渴望したるの餘り、遂に斯の如き傷心的の語を發せしものゝ如し、然れども宇宙は決して宗教の希望を満足し能はざるなり、蓋し宗教的信仰と奉事との目的は人類にあらず、而して人類の以外に存して、人類が之に従屬する所の秘奥なる實體に在て存するなり、其目的宇宙あらず、只宇宙以外にして、宇宙が之に従屬する所の無碍實體なりとす、所謂宇宙なるものは有限以外に超へず、又は有限以上に上らざるなり、然り而して人は此物質塊及び無明にして目的なき勢力より成立せる所の宇宙の下に自己の敷かれ居るが如き感想を抱持す、故に宗教の眞の目的と必要は、是等無明なる必至、物質的勢力及び宿命に従屬するとより人を解放して、智慧と愛とに因て働らく絶對、完全なる理性と、絶對的能力とに自己の從屬するものたるを知らしむるに在るのみ、彼のシユライエルマーヘルの如き從屬の感情を根基と爲せる宗教上の概念は全く十全なる者にあらず、抑も宗教の宗教たる所は、從屬の感情に非ずして、吾人が意識的に從屬する所の目的物如何に在りと

す、凡ての能力に超越して之を支配するの能力を有する超人、超物の實在者、明察を以て凡ての事實と出來事とを貫徹照燭し、智慧と愛を以て全能力を指示制裁する絶對的靈に從屬するの感情に在るなり、吾人は智慧と愛を以て凡ての能力を指揮する所の絶對的理性に於て、宇宙の究竟基本を發見す、而して正當なる宗教的生活なる者は、本心上より此神に從屬し、喜んで之を信じ、之に事ふる所の生活を云ふなり、苟も絶對的靈の存在に對する靈魂上の關係の痕跡を顯はさざるものは、宗教と稱するに足らざるなり、

ゼー、アル、シー、レー氏は其著書「自然宗教論」に於て説を爲して曰く、人の熱心に學術の研究に身を委ねるも亦是れ一種の宗教にして、其本性的宗教心を満足するに足ると、氏が此論たる、技藝文學に、奴隸廢止に、禁酒其他の慈善的運動に其身を委するにも、皆同様に適用せられ得べし、然れども吾人は此等の事業に於て毫も著しき宗教の特質を發見するとなきは極めて明晰の事實なりと謂ふ可し、夫れ主管觀念ケイリツクンアイダの爲めに精神を一方に傾注し、熱心に身命を顧みずして一個の目的に向ふ所の有様のみを以て、宗教の特性と爲すべからず、何となれば人は利慾の爲めに斯る如き

有様を顯はすとあればなり、善にあれば惡にあれば、何等の目的に對しても熱心に身を委ねるとあればなり、思ふに人間の天然に備具する偏向にして、其精神の全體を挑撥、包括する所の主治感情マツガイ、シンゴと爲らざる者は、蓋し一も之れあらざる可し、故に熱心に身を委ねるとは、決して宗教の特質となすべからず、只其れ宗教の特質は、其身を委して奉事する所の目的物が、超人、超物の存在者たる神なりと云ふ事實に在て存するのみ、而してたとひ有限以外に在りと雖ども、人も亦自己の合理的並に自由の有心性を有するか故に、亦超物性を分有するものとして神と交通す、人の思想と精神は、其信頼と奉事の最上目的者として神に傾向す、故に神をしてあらざらしめば、則ち又宗教あらざるなり、而して人の宗教に對する本性的感情には全く真正の目的物なきものなり、其宗教心は墓なき幻影なり、又虚偽なり、

世の不可知論者や、實驗論者や、唯物論者やは、宗教の眞實を定言するに際して、常に宗教なる語の特意を除いて以て此語を使用し、宗教なる名をして雄大宏壯ならしむべき一切のものを該名稱より捨奪し去り、其虚影の下に自己の教系を匿したり、是れ實に宗教の人性中に根基を有して、其幸福に缺くべからざる所以を證明する

ものにあらずして何そや、之と同時に彼等は自己の教系が、根元の事實を論述、證明するにも、人性の最上目的を現實するにも、共に不充分なるとを顯はせり、昔時人類の幼稚にして無學なりしときに在て、人は己に神に對して己が手を廣げつゝ、超物的なるもの、方向に進行せり、此時に當りて宗教は方に生育し、神怪も亦形成せられたり、乃ち當時の人々は萬有の諸大力と、曾て地上に生存したる諸大英雄とを崇拜せり、是れ其中に彼等が探求せる所の超物的及び超人的なる者を、自ら見たりと思考したればなり、是れ神の片時の顯現にして、人智の漸く進歩するに及び、一層明晰にして眞確なる神の智識を得るに至れり、然るに何ぞ圖らん、今代に於て宗教製造者の世に出でんとは、彼等吾人を誘ふて、今日の煌々、穠々たる文化場裡を退きて、更に太古に遡り、久しく廢棄せられたる神を崇拜し、其廢敗せる宗教を信奉せよと云ふ、而して是等の人は想像上の神として之を崇拜せよと、吾人を誘ふに非ずして、充分に其神に非ざるとを知りながら之に奉事せよと云ひ、神に對して廣げたる手を以て、超物的なる者の品質を一層明瞭に知らんと欲するの熱望に因るに非ずして、全く神なる者なしと云ふことを確信しながら、人の宗教心は神なしと

雖ども満足し得べきことを證明し、以て思辨的不信説を一貫せんと、明白なる目的よりして、是等の物に奉事せよと云ふなり、而して彼等は之が爲めに、人は其智識の發達せしむるに至れば、容易に人類、或は物質的宇宙、或は甚しきは自己の學術及び技藝を崇拜するを以て満足するものなりと謂ふに至れり、されど此赫烈なる中夏の大陽の如き、方今文化の光明中には、彼れが如き古代の宗教の枯骨より採取せし種子を下すも、決して成長蕃殖すべき道理あらざるなり、設ひ幸にして成長蕃殖するも、亦決して今日宗教の希望を満足する能はざるなり、但し是等の宗教は實に秩序正しく製造せられたるものにして、古代の宗教の如くに、自生的にして蔚乎たる發育を爲さず、今日有神教は、吾人の間に過去の宗教が幾世代を費やして發育したる活宗教たり、今日の文化社會に於て人の宗教的希望を満足するとを得るものは、只絶對の靈のみ、蓋し其靈は完全無限の智慧と愛とを具へ、凡ての能力の起原となり、合理的原理と理法に従ふて能力を指導し、以て合理的理想と目的とを進歩的に現實するところの無上普通の理性なればなり、

(七)宗教は萬人靈能の作用中に顯はるゝ宗教は智性に屬するか、情性に屬するか、將

た意志に屬するかと云へる問題は古來久しく激烈の論争を経たるものなれども、今は智情意三者の中に顛はるゝと云へる事實に因て消滅したり、

日耳曼に於ける斯論争の事情と評論とを知らんと欲せば、フオイグド氏の「アンダメンタル・ドグマチック」五五頁より七六頁までを見よ、此議論と關係して、レリキオと云へる羅句語に就て種々語學上の研究ありたり、但し若し此語學上の眞義にして確定せらるゝとありしとするも、宗教の何物たるを説明するに於ては、其功餘りに大なるものにはあらざるべきなり、

宗教は自生的信仰の點に於ては智力中に、宗教的動機又は感情の點に於ては情の中に、神に喜はれんと欲して爲したる所の自由的行爲の點に於ては意の中に、自己を顯はせり、

若し人にして神の存在を信仰しながら、反て神を惡み、凡ての奉事、崇拜、及び從屬を好まざるあらば、則ち其人は宗教家と稱せらるゝと能はざるなり、蓋し斯人の如きは、宗教を受納するの能力を顯はすと雖ども、宗教を有する者にあらざればなり、若し又人にして神を信すると雖ども、其信仰未だ活動せず、神を敬し、神に事ふるとを

爲さいれば、則ち其人は正當に宗教を有するものと稱せらるゝと能はざるなり、何そや、宗教は信仰、感情、及び自由の奉事を含蓄するものなればなり、

假令如何程其種類を異にするも、神たる者に對する世人の奉事は、神に喜ばるゝものと思ひ、又は神の恩恵を得んと欲して爲すの點に於ては同じく契合す、是れ最も粗野なる飲食、香物等の犠牲の上に顯はれたる所なり、又贖罪的犠牲、苦難、難行及び凡ての宗教的奉事より、祈禱を以て神と秘密の交通をなし、本分と愛の誠實なる生活をなせる基督教徒に至るまで、其上に顯はれたる所なり、サモイエデの一老婦カスツレンが、汝は曾て祈禱せしことありや否やとの間に答へて曰く、妾は毎朝吾幕屋の外に出で、日輪の前に跪坐して云ふ、汝の上るとき妾も亦寢床より起つと、而して又妾は毎夕云ふ、汝没するとき妾も亦休臥すと、是の如きもの即ち彼女の祈禱なりき、是恐くは彼女が宗教的奉事の全躰なりしなるべし、若し各人の眼より之を見れば、則ち如何にも粗漏なる祈禱と見ゆべけれども、彼女に於ては然か見へさりしなり、蓋し此祈禱や、此老女をして少なくとも毎日二回地上よりして迥かに天に心眼を高めしめ、己れの生活の一層高遠なる生活中に包含せられたるとを恍惚の間

に覺悟せしめ、深慮たる神榮ゴッドライヒ其日常生活を圍り照らしたり、且つ之に就て、彼女自身は鮮少ならざる誇負心を懷けり、何となれば彼女は自己を義人と感じたるが如き風情を以て、下の如く言ひたればなり、曰く、世には朝夕の祈禱をなさざる瘠惡なる人民衆しと(エフ、マクス、ミシュラー氏第三講義)テルトリアンはサトルンに小兒の犠牲を捧ぐるの狀態を最も沈痛に記述して曰く、實に小兒の父母は喜んで其兒を犠牲に供せり、其兒殺害せらるゝとき悲泣せんとを恐れて、之を慰撫せり」と然れども若し此兩親に問ふに、何故彼等が之を爲すやを以てせば、則ち彼等は答ふるなる可し、曰く、我等は吾等が最も珍重せる所の物を神に捧げざる可からざればなり」と嗚呼是れ博愛主義の宗教が承認せる所の原理なり、縦し其誤解と誤用とは斯の如く寒心戰慄すべしとは云へ、(アポロシ 第九章)

夫れ神に對して自由の奉事を做すとは則ち宗教的信仰と感情とを含有するものなり、而して其種類は千差萬別なりと雖ども、是二者に於て眞の合一を發見し得べし、拜物教フエチスムは萬物に超物的心意ありとなし多神教ポリセイズムは其各物中に神あるを承認し、神の數を増加し、遂に無機物の作用、有機體の發生、人の身軀、家族、社會、及び政治的生活、

及び道義上の感情、行爲、及び品性等の細微の事物に至る迄悉く其特別なる神の監視の下に在るものと想像するに至れり、而して神に時間と空間の制限なしとなす所の獨一神教モノテイズムに於ては、神を以て其勢力の宇宙に遍滿して、凡て萬有の形體と作用と、人間の生存と、歴史との中に自己を顯現するものとせり、博士ドルテル論して曰く、東方の宗教は其本源神より出で、神を人間に引き下さんとするものなり、故に其結果は凡神教パンテイズムに陥れり、然るに西方の宗教は之に反して、其本元有限より出で、人間を神に引上げんとするものなり、故に其結果は遂に英雄を神として崇拜するに至れり、然れども此兩者は皆な同一の目的を求むるものなり、神人の一致即ち是れなり、廣義を以て之を言へば、古代宗教の全歴史は、概して宗教の完結に係れる預言と稱して可なり、語を換へて之を言へば、神人一致の預言なりと、

(八)吾人の歴史上より識る所の各種々族の宗教は、屢々其本原なる靈的要素の一部分の埋没せらるゝが如き墜敗の形狀に陥落せるとあり太古の韋陀經ヴェダ中に顯はれたる宗教は、其神に關する觀念と、神に對する奉事とに於て、後世に於ける印度の宗教よりも適かに優れる所あり、彼斯の古代に起れる、ゾロアスタ教ゾロアスターに於ても、之と同

様の状態を顯はせり支那に於ては孔子の教へし所に比較して、一層明らかに宗教の性質を帯へる、古代人民の信仰と奉神の遺物とを見るべき許多の儀式あり、是れ其古代の宗教は、今日其民間に行はるゝ所の者よりも適かに優りたる所以の事實を證明するものにあらずや、蒙昧種族の中に在りても、其過去の世に神と宗教的奉事との存したる口碑を聞くことは、決して非常のことにあらず、時あつては神は死したりとの奇語を耳にすることあり(エフ、マクス、ミユラ、一五、一六、頁) を見よ宗教の原起及び成長而して此れ等の口碑は、則ち明らかに古代宗教の今代の宗教より尙ほ優れる所の事實を顯はす、羅馬帝政の時代に迄では、共和政治の時代に行はれたる純潔健全の宗教全く腐敗したり、其結果の驚くべき實境はポロの羅馬人に送れる書牘の發端に於て之を顯はせり、此時に際して羅馬の人民等は其心裡に於ける宗教を必要とする不滅の意識炳然として蔽ふ可からず、已に他の宗教、特に中保の祭司と罪惡の救贖とを宣言せる東方の宗教を探求したり基督教は、彼等心に神を存するとを願はざれば云々とポロを以て此腐敗を説明し、之を以て好んで神の純潔なる智識と奉事とを棄廢したる人民の罪惡の結果となせり、然れども如何に之を説明するにもせよ、以上

陳述したる所とは、人類の本性的宗教心と、及び宗教は一般に靈魂が超人的及び超物的なる存在者に對應するものなりとの至要の點に於て互に相一致するてふ歴史上の證據を研究し、又眞神に就ての知識と奉事とに對する宗教心の進歩的發達を講明するに際して、必ず思考せざるべからざるの事實なり、蓋し此宗教的腐敗と同一の現象にして、生物進化の理論を研究するに當て思考せざるべからざる事實あるなり、

第二章

神は經驗即ち意識に因て認知せらる

神は經驗即ち意識に因て認知せらるゝものなり、

第一、此命題の意識を充分明了ならしめんが爲めには、或る小引的の説明を必要なりとすべし、

吾人は何物に拘はらず、表現直覺にて知る所のものを、經驗に因て知ると稱するなり、即ち種々の發動と形狀とを有する心意其物にも、又心の外なる實體にも皆之を適用するを得べし、凡そ何の實體にても吾人直接の目撃の下に來る所の者は皆な經驗に因て知らると云ふべし、他の語を以て之を言へば、吾人は何にても吾人の意識に表現し來る所のものをば、皆經驗に因て認識すると謂ふなり、故に其經驗を以て認識せられたる所の者をば、亦意識を以て認識せられたる者と稱し得べし、

上の如く使用せられたる意識なる語は、主観客觀兩者に就ての原始の智識、即ち直

覺的の智識なる意識を含有するものと知るべし、

然れども以上解釋したる所の意識は、只是れ陰在意識のみ、其意識の與ふる所の事物は亦從て朦朧にして不明なり、智慮、撰擇、感情等は已に之を其中に含有すと雖ども、未だ全く分明なる能はず、其智識は未だ感情の襤褸外に脱出して、獨り自ら其足を以て立つと能はず、一度其意識中に存する不定の含有物の上に辨決心の反省を加ふるに及びて、智識、感情及び決意は茲に瞭然分割して復た疑ふべきなきに至り、而して知識其物は辨別せられて、客觀の意識及自覺の意識となるなり、

人は神を意識し、若くは神は人の意識に自己を啓示すとの命題に於ては、則ち以上の意義にて意識なる語を使用するものなり、夫れ神は人間の靈と同一なる實在者として、人の明了なる自覺心に自己を啓示する者に非らず、反て人間と異なる實在者として、人の意識に自己を啓示するものなり、然れども神が此く自己を啓示すると云ふ事實は、取も直さず、神が人と同からざるにもせよ、人に似たるものにして、人に同情を表し、人と交通するを得べきことを表するものと謂ふべし、今夫れ人の身軀と其質を同くせる物質は、人の萬有と交通すべき器械たる覺性を通過して、人の

上に作用を及ぼし、以て其原始の意識に自己を表現し、人の思想に領會され得るが如く、人の靈能に類似せる神に於ても、亦靈なる所の人の上に作用を及ぼし、以て其意識に自己を啓示し、人の思想に於て之を領會し得べきなり、
 以上の如く説明するとき、右の命題たる神は或る方法を以て人の靈の上に活動し、而して人は之によりて神の存在と行爲とを意識し得るとの意を含み、萬有中に包括せられたる人の肉體は、絶へず其上に活動して、其意識に表現せる物質的包圍の爲に纏繞せらるゝが如く、人の靈も亦常に自己の上に活動して、其意識に啓示せらるゝ靈的包圍の爲に纏繞せらるゝとの意を有す、而して此靈的包圍とは則ち吾人が頼て活き、頼て動き、頼て存在する所の神なり、神の能力に屬し、其理法と愛に服従する所の靈的存在者の組成する道義系なり、故に吾人の命題は、彼の時に或は誇張の言なりとの世評を受けたるカントの語の眞理を含めるものと謂つべし、曰く、吾人は自ら了知するところの世界の一部分なることを意識すと、
 然れども吾人は神が圓滿具足の觀念を以て人の意識に啓示せらると論するに非らざるなり、蓋し何物と雖ども斯の如く表現せらるものあらざればなり、凡そ意識

の領會せられず解定せられずして思想の中に存留する者之を陰在意識と云ひ、意識中の含蓄物悉く領會せられ、解定せられたるもの之を稱して陽在意識と云ふ、原始意識、即ち陰在意識に於ては、其表現せられたる所の目的物を明解せず、又は其物に因て感動せられたる自己の心意の状態を會得せざるに、既に其目的物は人の心を刺撃振動し、陽在意識に於ては、其意識の包有する含蓄物は單純意識の場合と異るとあらずと雖ども、是等含蓄物の性質、前の場合の如く不明に非ずして、瞭然人の心意に表現せらるゝなり、原始意識に於ては、何時にても直接知識の材料となるべき一切の實體表現せらる、而して心意は其含蓄物の上に反省して、其表現せられたる實體の含包する種々の事物を領會し、區別し、及び解定し、又其依て以て相統一する所の干係をも覺るなり、是事や、常に外物に對する知識に就て眞正なるのみならず、亦人の自己に就ての知識に於ても眞正なり、故に人が其自己なると及び同一なるとに就て自己を知り、其合理性、其自由、其有心性、及び其他屬性に就て自己を知るに至るは、只其意識の含蓄物の上に心意の反省するとあるが爲のみ、
 右の事は人の神に於ける意識に於ても亦眞正なり、人の靈的包圍は濛朧不明の物

躰として其原始意識に表現するのみ、而して斯の如く表現せられたる實躰が、明解せられて、充分の觀念に結合せらるゝは、單に領會と思想を以て該實躰の上に心意の反省を及ぼすとあるが爲なり、若し神果して意識に因て知らるゝとありとせば、則ち神の觀念を明解して之を充分明知するの手段は只右の一法あるのみ、而して宗教的意識なる語の意義は、此の神に就ての意識、即ち吾人が經驗に憑て有する此神の知識に外ならざるなり、

儻し此廣濶なる意義にて意識なる語を使用すれば、則ち吾人は自己に就ての意識と自己ならざる實躰に就ての意識とを有するとを得べし、語を換へて之を言ふは、主觀意識及び客觀意識を有するを得べし、而して客觀なるものは、其物躰なると靈躰なるとを問はず、皆な人の上に發動して其の意識に表現するものなるか故に、人の包圍たらざるべからず、夫れ人は物形世界と相關係するが爲に、其感受官を賦與せられ、之に因て物形世界は人の上に發動して、其意識に表現するなり、之と同じく其靈系との關係に於ては、合理的及び靈的感性を賦與せられたり、乃ち之を通過して其同類者は人の上に發動し、以て其合理性、自由性、及び有心性を人の意識に啓示

す、而して神も亦斯の如く、人の上に發動して、其の意識に自己を啓示するとを得べし、

抑も吾人は、宗教意識若くは神意識なる語を使用すべきか、將た然らざるべきかと、只た是れ言辭上の疑問のみ、茲に吾人の研究すべき實際必要の問題は、則ち吾人は經驗に因て神を知るか、將た之を知らざるか、吾人は神に就て直接の意識を有するか、將た之を有せざるか如何に在りて存するなり、

近頃一記者あり明言して曰く、基督教的意識と云へる語は、神學研究の唯一説明式として、七十五年以上の間世に勢力を有したりしが、是れ決して神學上に鴻益を與へたるものに非らずして、之より生したる結果の如きも、亦基督教の信仰に不利なりしもの少からずと、若し此語にして、心意が自己の心理上の状態と作用とを意識すると云へる狹隘の意味にて使用せられしとせば、即ち外物は意識に因て知らると云へる斷言中には、人は唯だ自己の心理上の形狀と作用とを知るに止るとの意味を含有し、彼の主觀的唯心説を以て唯一真正の知識説と許さるべからざるに至らん、吾人若し神は此狹隘の意識に因て知らるゝものなりと言へば、即ち上と同

一の論理に歸着せざるを得ざるべし、斯の如くなるときは神は客觀の實在なくして、唯だ吾人自己の意識の主觀的形狀として知らるべきのみ、又斯語を凡神教の意義を以て使用せるものあり、彼の凡神教は世人に教へて曰く、神は人が意識を有するに至りて、始めて意識を有するものなりと、若し斯の如くならば、人の自己に就ての意識は、取も直さず神に就ての意識なるべし、何となれば人の神に就ての意識は即ち神の自己に就ての意識なるべければなり、是れ蓋し人と神と同一視せらるゝものなり、然れども若し余が前に説明せし如く、意識なる語を廣濶の意味にて使用せるときは、則ち神に就ての意識なる語は、上の如き誤謬に陰蔽せらるべき恐れあらざるなり、何となれば然かするときは、宛も外界の物體が吾人の上に活動して以て吾人の意識に表現するが爲に、吾人が之を意識し得るが如く、神は客觀的實體として吾人の意識に自己を表現し、以て吾人の上に活動すとの意義を、此語の中に含めばなり、故に人は神に就て意識するものなりと云へば、是れ徒だ人は經驗に困て直接に神を知る者なりといふとを、他の方法を以て言換えたるに過ぎざるのみ、然り而して此語法の使用に對する唯一の難題は、之に附與せられたる唯心說的及ひ凡

神教的の意味と之を混淆するの危険ありと云ふにあるべし、固より語辭の使用に就て彼此爭論を費すは甚だ無益なりと雖ども、余の意見によれば、廣濶の意味にて此語を巧に使用するときは、則ち吾人の哲學及び神學に利益あるべしと思ふなり、
「宗教的意識」若くは「基督教的意識」なる語を上如く説明すれば、則ち單に人類通用の宗教的經驗若くは基督信徒通用の經驗を一箇人が分有すと云ふ意義を含蓄するに過ぎず、今日の基督信徒は自己の宗教的經驗と前代の基督信徒の經驗と相一致することを發見す、基督教の聖書は即ち其結合の媒介物にして、各基督教時代に於ける最深の靈的生活を説明せり、其第五十一編及び第二十三編の聖詩、主の祈禱、若くは其他許多の聖書は其記述せられし以來、恒に神の眞の禮拜者の靈的經驗をば、彼等が自ら撰擇せし所の言語よりも迥かに精細に、又満足に吐露したり、是れ猶ほ幾世幾代の間、聖徒等が神座の前に捧けたる所の祈禱と云へる馨香を以て充滿せる金盃の如し、而して基督信徒は其經驗、信仰、及び聖書の解釋をば、過去の最良の思想及び智恵、又最も熱心なる禮拜、最も眞實なる基督教の生活を顯彰せる讚美歌、及び祈禱文、或は又信經、信仰的及教理的文學、傳記及び歴史等に於て顯はれたる凡

ての基督教人民の經驗と思想とに照らして之を檢討するなり、故に基督信徒は凡ての基督教人民より集めて大成せる經驗に因て、自己の信仰と聖書の解釋とを檢討し、若くは擴張するとを得るとにして、自己一身に限畫せられて、神の啓示を研究するものにあらず、凡ての時代の相續者となり、人類の宗教的經驗及び判定の積集したる倉庫の相續者として、自己の經驗と判定とを富贍にする者なり、
 ポーロは以弗所の信徒の爲に祈れる文中に、明に此基督教の意識の契合あるとを承認せり、其言に曰く、爾曹をして愛に根ざし愛を基として諸の聖徒と偕に測るべからざるキリストの愛を知り其潤さ長さ深さ高さを識らしめ又た凡て神に満足れるものを爾曹に満たしめ給はんことなりと、
 或は曰く、人は其有心性により、孑然獨り立ちて他の侵入を許さずと、然れども人の有心者たる本性は凡ての合理的存在と皆其致を同一にす、普通一般なる理性の原理と思想の理法とは、有心者たる人の本性の中にありて之を支配し、人類通有の包圍は之を纏繞し、人類全體通有の動機と感情とは之に侵入す、人は自己の身より幾條の線の發出するありて凡の言語に於て、凡の思想の交通に於て、凡の文學と文明

に於て、自己を他の同胞人間に結合するを見る、宗教に於けるも亦然り、均しく萬人を圍繞せる靈的包圍、即ち吾人が賴て以て活き、賴て以て動き、賴て以て存在するを得る所の神より、人の靈魂上に侵入する勢力のあるあり、故に神を知るときは則ち人の靈生は自然に吾人の心中に瞭然たるに至り、吾人は靈的及び宗教的存在者として其同類人間と相契合するに至る、是れ即ち一般の宗教的意識なり、此理や、特に基督教に於て真正なるものあり、該教に於ては、人々皆な神と最も親しく、且つ喜しき交通を爲し、神に就て最も明白にして充分なる知識を得、基督教徒は如何に他と相離れて立ち、獨り神とのみ秘密の交通を爲すものと雖ども、若し其人にして神と交通したしどの一片の心あらば、同じく之と親密の交通を爲し得べし、而して斯の如く神の恩恵に關する一般普通の經驗に因て、彼等信徒の愈々神に接近する丈け、人々互に愈々親密となるなり、故に各信徒は歴代基督教徒の經驗に因て、其自己の基督教の經驗より起れる信仰を試練し、訂正し、確定し、測るべからざる神の愛を、諸の聖徒と偕に知るとを得ると云へる事實に於て悦ぶことを得るなり、是れ一般の基督教の意識なり、

若し基督教の教師にして諸の聖徒より自己を孤立せしめて、自己の燃せる蠟燭の火光を以て世界を照すの明光と誤認し、基督教の各年代に顯はれたる祈禱文、信經、及び神學は固陋、狹隘、愚昧、謬妄なりとて之を論辯攻撃するに其一身を委して他を顧みざる者あれば、則ち吾人は轉た過去りし古代の雲の中より、彼れに語る所の聖靈の聲を聞くが如くに覺ゆ、曰く、汝豈に最初に生れたるの人ならんや山よりも前に出來しならんやと。

第二、吾人は神に就ての觀念を有する者なるが故に、少くとも此觀念の元素は、直覺より出で、意識の内に来りたる者ならざるべからず、是れ心意は直覺の力にて認知せられ、而して後に意識の内に来らざりし所の者をば、思想を以て理會すると能はずと云へる一般の理法と適合するものなり、故に假令ひ神の觀念其物は、既知の要素を結合したる思想を以て造られたるべしと雖ども、其觀念の凡ての成分は直覺に因て知られ、而して後に意識の内に来れるものなり、此意味を以て之を言へば神は意識に因て知らるゝと瞭然なりとす、夫れ地球は正當なる思想の目的物なり、然れども其直覺力に因て知られたるものは地球にあらずして、其觀念の種々の成

分のみ、吾人は是等の成分を思想に結合して以て地球の觀念を得るなり、吾人若し石若くは其他の物體を擧ぐるときは、吾人は吾人の手力に或る抵抗力あるとを意識す、然れども吾人が此事實に因て引力の觀念を得るに至るは、唯た思想の結果のみ、之と同一の方法にて、神に就ての觀念の成分も亦意識に因て提出せられ、而して觀念其物は、思想に因て是等の成分より形成せらるゝなり、

吾人が有する神に就ての觀念には、二箇の語を以て指示せられたる二要素あり、絶對的「靈」といふと是なり、絶對即ち無碍の實在者の現存するとは、合理的直覺力に因り、必然の真理として知らるゝなり、故に此真理は他の理性に於ける必然的真理の如く意識上に表現す、蓋し實在者といふことは積極的に本我の意識によりて知らる、然れども先天的に配與せられたりとのみ思はる可き實在者の絶對性に至ては、毫も意識中に積極的含蓄物を有せずして、只消極的方法に因て解せらるゝとを得るのみ、即ち他に從屬するとなき、時間、空間、及數量に制限せらるゝとなき所の實在者なりと思考せらるゝに過ぎず、神の觀念の第二の成分は即ち靈といふとなり、吾人若し自己の合理的にして自由なる作用者なるとを認知するときは、則ち直に

有心的超物的なる者を認知すべし、是に於てか、吾人は初て靈の何物たるを通解するなり、夫れ此の如く絶對と靈の二者を充分認識したる後、吾人は吾人の神に就ての觀念中に此二者を結合して、以て絶對的靈なる神の觀念を造るなり、此觀念や、正式に因て造られたるものなり、何となれば之か成分たる者は直覺力に依て認知せられたるものなればなり、

吾人は神の觀念を有し、絶對的實在者の現存するを認知したれば、則ち自然の順序に因り、絶對的靈として神に就て造られたる吾人の觀念は、果して正確なりや否やを研究せざるべからず、吾人が此宇宙の中に顯はれて、而して宇宙が屬する所の究竟の實在者若くは能力たる絶對的實在者の存在すべしといふ必然的信仰を起すは、即ち吾人が宇宙を知るによれり、是に至て吾人は道理上、宇宙と宇宙に顯はれたる諸の潜在力とは、皆な絶對的實在者の内に在りと斷定するなり、故に吾人は萬有上より或は人類上より宇宙を研究尋索して、以て此絶對的實在者は果して彼の無限の靈たる所の神なるや否やの明證を得んと欲するなり、今夫れ萬有界中には、吾人スベンセル氏が言ふ如き絶對力ありと確信するも差支なき勢力の存在する

明證を發見す、人類及び道德的及び靈的系統中には、吾人彼の能力を看て、無限の靈なる神なりとの徵證を發見すべし、且つ萬有界其物の中にも、吾人只だ靈の顯現として之を看るの外到底説明し能はざる所のものあるとを見る、然り而して此絶對的實在者の絶對的靈たり、有心的神たるに就て此かる證據は、全く學術的思想の理法に隨ひて正當なるものなりとす、果して此徵證にして發見せらるゝとせば、則ち余が斷案は確實なるものたらざるを得ず、假令ひ絶對性に就て先天的に思考せられたる觀念は、積極的含蓄物なくして、徒に消極的思想に因てのみ解説せらるべしと雖も、然れども吾人は思想の根本法に従ひ、宇宙の究竟基礎として絶對的實在者と宇宙の間に存する必然の干係を認知するが故に、吾人は宇宙の兩系即ち物系と靈系とを探索して、宇宙の何物なるかを研究し、之に因て其絶對的靈たることを知り、以て絶對的觀念に對して積極的含蓄物を見出すべし、
吾人は此に至て、神の存在は其觀念を豫想せざるべからざるなるが故に遂に證明すべからざるの反對說に答ふるを得べし、元來此反對說は二箇の方法に因て適用せられたり、

論者時に曰く、此證據は正當のものに非ざるなり、何となれば其内己に此觀念の預想あればなりと、然れども此觀念を預想すると云ふとは、嘗に神の證據のみならず、亦凡て學術の研究に於ても必要なり、若し吾人にして神は存在するものなるや否やと問ふとあらば、則ち吾人は已に神なる語に因て果して如何なることを意味するかを知り、而して此證據は果して能く此觀念と契合する所の實在者の存在を明證するや否やを判定せざるべからず、例へば引力、若くは水星と太陽間の遊星、若くは或る他の物形的勢力又は作用者は果して存在するや否やと考究するも、亦之と同一の理なり、此場合に於ては、嘗に物躰の觀念を以て探究を始めざるべからざるのみならず、此觀念は研究の方向を定め、其斷案を作爲する爲に、終始其考究の中に存在せざるべからず、吾人が既知の結果に對する未知の原因若くは理法を探討するには、先づ假定説、即ち其原因若くは理法の觀念を作り、以て之に着手せざるべからず、而して後此假定せられたる原因と理法との眞の存在は果して事實を説明するに的中、必要なるや否やとの探究に入るなり、此の如く、既に人の心裡に存在するの觀念を以て、有神論者が神の存在の證據ありや否やを研究するとに着手するは、

是れ單に凡ての學術が未知なるものを探討するとき使用する所の法則に依頼するのみ、懷疑論者が形而下學に於て確實眞正なりと許容せられたることを舉げ來りて有神説に反對するの不公平に陥ることあるは、吾人の時に見るところなるが、今や吾人は其一例を見たり、

又他の反對論に曰く、神の存在に就て正當なる證據は蓋し世に有るべからざるなり、何となれば神は吾人が直覺力に因て之を認知し、而して意識の内に来る者に非らざればなりと、吾人は之に答へて曰はん、此觀念の成分は直覺力に因て之を認知し、而して心意は反省的思想に因て正當に之を結合す、是れ即ち思想は其表現的たると合理的たるを問はず、最初直覺力に因て與へられざるものを含蓋せずと云へる理法の要する所の全躰なりと、而して此點に於ても、有神論的議論は形而下學の法式と互に相契合す、

以上吾人が到達したる論點より、吾人は正當に、神は意識に由て認識するを得べしとの斷言を下し得るなり、即ち神なる觀念の成分斯の如く認知せられ、而して思想に於て之を結合して、絶對の靈なる神といふ觀念を成すとの意義に於て、意識に因

て知らると云ふとを得るなり、今若し斯の如き實在者存在せりとの假定説にして、諸の事實を解説するに足り、他の假定説は決して之を解説するに足らざるの理にして證明せらるべきものならば、則ち此神の存在に就ての證據は、全く學術的思想の理法に従て正確なるものなりと爲さざるを得ざるべし。

第三、神に就ての意識なる語は、實に上に述べたる如くなるのみならず、尙一層深遠の意義を含むものなり、夫れ人は經驗に依て神を知る、即ち只た其觀念を組成する所の元素を知るのみならずして、神其者を知るなり、即ち人の合理的直覺力、觀念、感情及び靈的經驗を通過して神を知るなり、

(一)是れ道理に合し、且つ先天的に有り得べき筈の事なり、若し神にして宇宙之に基因し、之に整理せらるゝ絶對の理性なるか、若し神は宇宙に遍滿し、吾人は之に因て活動し、生存する者なるか、若し神は凡ての物を最高なる靈の目的に導き、以て之に屬從せしむるの愛なるか、則ち神は人の上に活動し、人の心の中に普遍理性の光より赫々たる光線を放射し、人の靈的感性を挑發し、人の意識に自己を顯はし、以て人の經驗に自己を知らしむることあるべき筈なり、

然れども此の如きは、有限の心意に對する無限者の啓示なり、限りある人の經驗と意識との内に於ける神の啓示なり、故に進歩的にして常に不完全なるものならざる可からず、夫れ神は人に對して自己を啓示すれども、人は其啓示に關する自己の經驗を通して神を理會するものなれば、之を理會するの度は、其不完全なる發達と教育の度に並行せざる可からず、而して其理會の度を進むは、只之を了解する所の能力の度と、之を受納し、解釋して之に隨順する所の誠實の度に應じて然らざるべからず、夫の外部の世界も亦如此常に人の上に活動し、人の經驗に因て知られ、人の意識に自己を表現するに非ずや、而して人は只各時各代、一步一步より進み、以て此の世界が自己の意識に表現せる所のものを理會するのみ、其目に因て外界の或物を發見し、耳に因り、手に因て其或物を發見し、尙ほ反省に因り、推理に因て之を發見し、此處に其些少の理を知り、彼處に其些少の理を悟り、今日は其或物を究め、明日は其或物を發見するのみ、況して神は永恒同一に人間の意識に自己を表現するとはいへ、人の神に就ての理會は始終局部的にして且つ進歩的ならざる可からざる筈にあらざるや、宜なり、靈化せられたる預言者に因ての神の啓示も亦多くの區別を

なし多くの方を以て爲されたとや、而して吾主も亦曰く、われ尙ほ多く爾曹に言ふべきことあれども爾曹は今之を悟る能はずと、

其れ然り、吾人は覺官の印象に因て吾人の物形的包圍を認識する如く、合理的、靈的の原理、情操、感性を通して吾人の靈的包圍たる普通遍滿の理性、絶對の靈、及び之に關係せる有心的、靈的實在者の系統を識認し得る也、

要するに人は外界を意識すると同一の方法に由て神を意識するものなり、

(二)人の經驗に於ける神に就ての知識は、人の有する宗教の觀念の内に含有せらる、而して宗教を眞實なるものとせば、必ず此知識なかるべからざるなり、人の神に就ての意識は其宗教的意識の内に包含せらる、何となれば、神と人と共存すると、神が人の上に活動し、之を感化すると、及び人が其作用感化を經驗して以て神を知るとは、是れ宗教なるもの、元精たればなり、蓋し經驗を以て知れる思想の元素を結合して組成したる神なる觀念は、思想と議論とに於ては正當の基礎なり、然れども未だ之れを以て宗教の基礎となすに足らず、何となれば此の如く論結するも、神は尙ほ吾人より離隔して存在し、吾人と交通するとなく、而して其直接の活動と感化と

に因て吾人に自己を啓示せず、吾人は神の吾人と共存するの意識的經驗を有せざるべければなり、思ふに吾人はアダムスとウエリエルが海王星の發見前、已に其存在を信せし如くに、神の存在するを信ず、吾人は盲目なるサンダーソンが意識に於て顯はれたる光線を有せず、又其經驗に於て光線、色采、及見る可き物體を認知せしとあらざるも、猶ほ光線の幾何學的理法に就て、十分なる學術上の智識を有せし如くに、亦神學の教系を組成するを得べし、然れども是れ未だ以て宗教を成すに充分ならざるなり、何ぞや、只此方法に由て知らるゝのみにして、他の方法を以て知られざる所の神は、固より以て宗教的信仰と奉事の目的者と爲すと能はざればなり、蓋し宗教は其元精に於て神と人との交通を含み、神の吾人に對する活動を含み、神の感化を意識に經驗するとを含み、神の引力に對して、意識的に順從若くは抵抗するとを含み、意識的に神に信賴奉事することを含蓋するなり、即ち宗教に對するの神は、元精上吾儕と相交渉するものたらざるべからず、粗笨の比喩なれども、人の神に對する知識は、尙ほ、マテリア、毒に對する知識の如し、蓋し其、マテリア、毒人の体内に働けば、人は其働を經驗して之を知るなり、之を見る

とを得ず、捉へて瓶に入れ、且つ分析すると能はず、然れども其毒の人に在るや、毎自己の身軀に感ずる所の結果に徴して、其毒の存在と、勢力とを知るなり、蓋し此毒や、先づ人の身軀に活動す、而して人は之によりて以て其毒の存在と、勢力及び作用とを経験するなり、此の如く先づ神の靈は人心の内外に活動し、而して其存在と、勢力は人の靈的經驗に因て認知せられ、靈的能力及び感性の活動挑煽せらるゝに因て認知せられ、靈生の發育と、靈的品性の改良、靈的能力、純潔、休福の發達に因て認知せらる、今夫れ人は其靈の中に此く働くところの神を見ず、神も亦一定の形軀を備へて人の意識に現映せず、然れども人は只自己の經驗する所の結果に因て、神の存在能力及び其勢力の性質を知るなり、譬へば一株の樹木の如き物軀は、人の五官を刺激して以て感覺を惹起し、而して心意は是等の感覺の上に反省して、以て其物軀を理會す、然れども此感覺は樹木其物に非ず、又樹木の映像に非ず、其樹木を心意に認識するは、單に種々の覺官を通して得たる幾多の感覺、知覺による、左れど此樹木は絶へず人の感受官を刺衝して、人の意識に自己を表現する所の結果を生じつゝあるなり、此の如く吾人の前後を圍繞し、吾人の上に其手を按く所の神は、吾人の靈

的感性を攪動し、常に靈の勢力に因て種々の靈的結果を生じ、以て人の意識に自己を啓示し、人も亦之に因て神を知るなり、故に若し宗教にして虚妄ならざりせば、其目的物にして眞實なりせば、其信仰と奉事にして理性の需求に契合せば、則ち吾人は吾人の靈魂の中に存在し、之を感化するの神を意識して、以て神に就て眞實の知識を有するなり、

(三)凡て宗教は、其禮拜する神を経験に因て知るとを自定す、

懷疑者は常に曰く、形而下學と凡て眞實なる知識とは其基本を経験に置きたり、然れども宗教的信仰は之に異なり、其基礎全く抽象的即ち思辨的思想に在り、若くは想像力の製作物に屬するものなりと、此説未だ信すへからず、吾人世界宗教の歴史を看るに、人類一般の意識に關しては、其事實の全く之に相反對するを見るなり、何れの時代、何れの宗教を奉ずるの人を問はず、皆な其神の知識は、自己の經驗より出たるを信せざるものなし、
基督教に於て、人の經驗に由て神を知ると云へる教義は蓋し著明にして痛切なるものなり、其信徒社會にて、再ひ神に歸して新しき靈の生活を始むる者あるや、乃ち

彼は經驗的宗教を有したりとて、其有様を記述するを常とす、嘗て一人あり、年壯なるに及びて、初めて神の意識に醒覺せられ、其從來の不敬虔にして私慾なる生活の價値なきとを悟り、信仰と愛の新生活の怡悦と、感化と、優美とを感じ始めたりしが、其人予に謂て曰く、斯くの如く余を激變せしめたるものは神の靈能ならざる可からず、何んとなれば余に於ては斯の如き働を爲すべき能力ある理由なければなり」と、蓋し凡て基督教の實際的生活の特質は、皆信徒が其意識の中に、眞實に神の存在と能力とを經驗せしに基せずんばならず、之と全じく基督によれる救贖の歴史、及び福音中凡ての教義、訓誨若くは約束は悉く其信徒が經驗に由りて神を知り得べきことを自定せるものなり、故に基督及び其使徒等は誨へて曰く、人は自己徳性の作用に依て神及び神の律法を知り、又神に對する自己の罪惡をも悟るものなり、曰く、神は人間歴史の進路に於て自己を啓示し、其動作に由て人類を罪惡より救贖す、曰く、神の靈は罪より人を導き出す爲めに恩惠ある天の勢力を以て人に來るものなり、曰く、信徒の生活は他なし、人間が神の靈の勢力の下に新らしく生るゝときに始まるなり、曰く、基督に由れる罪人は信仰によりて義とせらるゝなり、曰く、人は他

の祭司及び中保なくして直接に神の前に來り、獨り神と對して、從來罪惡を犯せし所の聖なる獨一者に向ひて其罪を明言し、以て赦免せらるゝなり、曰く此の如くして、人其密室に入り、戸を閉ぢ、陰れたるに在りて父に祈る、父其陰れたるを見て明るきに酬ゆ、曰く、此の如くなれば、凡て基督教信徒の生活は神と交通の生活となるなりと、

かるが故に、福音の宣傳は主にも證據を立つるに在りたり、成程彼の使徒等は耶蘇の歴史的事業と教訓とに就て、自ら其證人となり、以て證據を立てたり、然れども彼等は又神の救贖的及び更新的恩惠に就て自ら經驗せし所を證明せり、ポロロ羅馬の獄中に在て慘怛たる死期を竣ちし時、われわが信する者を知る」と宣言し、而して彼は恒に此精神を以て福音を説けり、后来何れの時代に於ても、基督教徒が基督を宣傳するの至深至剛なる根本は、皆神の更新的及び救贖的の恩惠に關して自ら經驗せし所に就て立てたる證據なりき、故に福音の宣傳者は元來一個の預言者にして、神の精神に觸接したるが爲めに、其教訓心中に明射、活動するに至りしものなり、此意味に於て、基督教は常に「ペンテコステ」の日に彼得の引用せし預言を成就する

ものなりとす、曰く、我れわが靈を以て凡の人に注ん爾曹の子女も預言すべしと、宜なり、自己の血を以て基督を證明し、及び其證據を確實ならしめたる殉教者は昔より、マーテル即ち證明者と稱せられしこと、古昔の「イスラエル」人あり、禮拜の爲め神殿に到り、乃ち歌ふて曰く、神を、そるゝ人よみな來りてきけわれ神のわがたましひのために作したまへる事をのべん、誠に神はきゝ給へり聖意を、我祈の聲にとゝめたまへり神はほむべきかな我祈をしりぞけずその憐憫を我よりどりのぞきたまわさりきと、之と同じく、諸の時代に於ける基督教徒は、自ら神と交通するに因りて神を知れることを宣言し、又其靈の能力を醒覺獎勵し、之を感化し、絶粹にし、及び強壯にして、信仰と愛の生活に進ましむる所の神の恩恵に就て、其經驗に知りたる所の神の知識を宣言するの證人たるに外ならず、

夫の諸族宗教も亦人の經驗に由て神を知ると云へる自定を基礎とするものなり、最下等の宗教に於ても、無智なる人皆な信ずらく、吾は能く自然物中に止息する所の見る可からざる勢力よりして出る禍福を經驗すと、又謂らく、此見る可からざる勢力に對する吾人自己の行爲に由て、能く禍を避け福に就くとを得べしと、リユク

レシアス曰く、恐怖は能く神祇を作ると、然れども此恐怖なるものは、所謂神祇が其人に及ぼす作用に因て自己を人に知らしめ、而して人は其犠牲と禮拜とに因て、神祇と直接の交通を爲すと云へる人の信仰を顯はすものに外ならず、之に反してライデーレルは曰く、元始のアリアン族は韋陀宗の上期に在て、已に卑屈なる恐怖の念を離れて、小見らしく、愉快に怡ばしき信賴の情を有したりきと、而して氏は此論を證明せんが爲めに、ヴェダの詩歌中より、ヴァルナ神に捧げたる、左の如き祈禱を援引したり、曰く、

おゝ大にして且つ善き主よ願くは母難が災厄より其難を保護せん爲めに其翼を張る如く、我等を畏懼せしむる災厄よりして吾等を保護し玉へ、

氏は同詩歌中より、其インドラ神に捧げたる祈禱の首句を援引せり、曰く、
「インドラ神よ、願くは我等に對して父たれ、母たれ、願くは仲間たれ、朋友たれ、兄弟たれ、

今夫れ此ヴァルナとインドラに對する和樂の信賴は、其禮拜者が經驗上より此等神々の慈恩に賴りて立つ者たるを知り、祈禱に依て之と交通するとを得ると信し

たることを示すものにあらざして何ぞや。

希臘羅馬に於ては、神託を主れる神女が神の出現ましますとの意を以て、デウス、エツクセー、デウス（神現はれたり、神を見よ）と叫ひたるのみならず、神は人に自己を顯はし、人は其經驗に因て神の存在と能力を知ると云へる信仰、一般に人の心意に透徹したり、教授チーレー曰く、ソクラテスは心内經驗の道途に於て其神に於ける信仰を得たり、而して氏は心中に己を導く善靈の聲を聞けり、是れ氏に取ては比喩にあらすして、勁烈なる確信なりきと（チーレー氏宗教略史カ）ゼノフォンは大に祈禱の必要を主張せり、プラトリー又言へり、祈禱と宣誓を以て神と絶へざる交通をなして生活するは、是れ君子に取りて最も善に、且つ高尚なる所業なりと、希臘及び羅馬に於て能辨の大家等は、其演説を初むるに先て、屢々祈禱を爲したり、コルチリウス、シビオ、ジュピテル、カピトリニユスの神殿に到り、獨り數時間を遷すに非らざれば、決して重大の事務に取掛らざりき、凡ての公事、必要の私事、及び盛大の宴會等は皆宗教的儀式を以て祝したり、此と符合してセネカは曰く、ルシリウスよ、余汝に語らん、神聖なる靈吾人の内に坐せり、是れ吾人善惡の觀察者及び監督者なり、彼れは吾人に

待遇せらるゝ如く、亦吾人を待遇するなり、何人と雖も神を有せずして善人たること能はざるなり、上の如きは、是れ畏怖の宗教の例に非ずして、神の慈恩に於ける信頼の證據なり、又他の例證あり、羅馬人は家内の諸神を信じ、其府民は府の鎮守の神を崇拜したると是なり、ヘーゲル曰く、異教人民の内には一の幸福なる意識ありて之を支配す、即ち彼等は神が人民と都府の神として彼等の側に在ることを信じ、神は彼等に對して親切に、且つ最善なる快樂を與ふるものなりとの感情、彼等を支配す、故にアテンス人民はあてな神を以て彼等の神となし、以て之を禮拜し、且つ彼等は元來其神と一體にして、其神は彼等の靈能なりと信じたりと（ヘーゲル氏宗教哲學第一卷二二五、二二六頁）フヒローは世界を創造せる所の神を以て水の充溢せる盃に比したり、東洋の或る宗教は、世界の元始を以て神の善なることに歸せり、且つ謂らく神は其天地を創造するに方りて、世界に自己の元精を分與し、自己の一分を犠牲にして以て之を創造せりと、是れ造化の神の善なることを顯はせるものに非ずや、是れ等の事實は、異教民の間にも神は自ら證しせさりし事なしとルステラに於て爲せるポローの證言と契合するものなり。

(四)神に就ての意識は、人の道義的意識の中に含まる、人は道義的義務の意識を有し、此によりて自己に命令するところの必然、不易、一般なる理法を知り、隨て自己の力によらずして、自己の思想行爲を支配する普遍眞理が儀型的に且つ永遠に存在するところの絶対理性を覺る、彼の良心の「余は此くするを要す」と命し、律法の「汝は此の如くすべし」と命するを聞くや、人は此を以て神の聲と爲さぬはなし、若し反省的思想によりて、吾人自己の道義的意識を分析するときは、則ち吾人は其中に神の意識ありて、之に其價值と、元氣と、能力とを與ふるものあるを見るべし、而して日常の行爲舉動に於て道義的本性の正當に發達するに及びては、吾人漸次其中に神を認識するに至るべし、是れ自然神學上極めて普通の議論たり、彼のカント氏の如きすら、一の觀念として思辨的理性に必要な神の觀念は、人の道義上の本性及び意識によりて積極的含蓄物を有すと定言せり、其言に曰く、神及び他の世界に就て有する我が信仰が、我が道義の性質と相結合するの密なると、其信仰を棄つるときは、則ち我が道義の性質をも失はざるを得ざる程なり」と、
苟も人間種族にして、道義的辨別の意識を有せず、又宗教的意識を有せずして此世

に存する者として、吾人の未だ之を見ざる所なり、然れども蒙昧種族にして此二者を結合し、正義を行ふは神を怡はしむるの業にして、神は即ち道義的立法者なり、審判者なりとの思想を有するの證據あらざる者に至ては、則ち是れあり、蒙昧人の宗教を以て自然宗教を代表するものと爲し能ふ限りは、夫の宇宙が道徳的に統治せらるゝと云ふことは自然宗教の欠く可からざる教義なりと云へる世上普通の觀念は忽ち地に落つへし、蒙昧人の靈魂宗は文化日に盛なる今日の人心より觀て實際的宗教の眞の基本たるべしと思ふ倫理的要素を備へざるものなり、但し此く言へばとて、余か前に云へるが如く、下等人種の生活には道徳を欠くと謂ふには非ず、若し道義の規律なくんば、粗野至極の種族と雖とも決して存立すること能はざるなり、否な、彼の蒙昧人種の間に見に存立せる道義の標準は、随分明晰にして嘆稱すべきものあるなり、故に下等の靈魂宗は道徳に反するものに非ずして、道徳に關係なきものなり(タイロ氏ブリミチア、ガ
ルチユア第三卷三二七頁)
且つ吾人思ふに、是等蒙昧種族に就て一層深く研空を費したらんには、吾人は彼等も亦其宗教道徳の結合を承認するを見出すべし、若し然らずとせば、是れ彼等の

發達不充分にして未だ其結合を承認するに至らざるが故なり、然るに此等種族と雖ども、尙ほ且つ神の知識を経験上より得、禮拜を以て神と交通するとを自定するものなり、今此かる種族を除くときは、世界一般各種の宗教に於て、人は皆に其經驗に因て神を知るとを信するのみならず、亦神に對する道義上の本分も承認せり、彼等は神を以て道義上の立法者及審判者にして、惡人を責罰する者と爲し、自己の罪惡を意識し、神の譴責に畏怖し、罪より免かれ、神を喜ばしめんとを求む、要之、彼等自己の道義的意識は即ち神に就ての意識となるなり、

(五)神は宗教上及び道義上の生活に於て、人の意識に自己を啓示する而已ならず、學術上に於ける智力の作用に於て自己を啓示すと云ふも、蓋し過言に非ず、神に付ての意識は、人の學術的意識の中に包含するものなり、

抑も凡ての學術の基礎たるものは何そや、曰く、左の假定是れなり、曰く、人類の理性に由て認知せられ、而して人類の思想を支配する所の普通原理は、凡ての空間と時期とに通して真正なり、曰く、宇宙は是等の原理に従ふて了知せらるへし、曰く、宇宙を支配して、宇宙に顯はるゝ所の普通の理性は、其種族に於て人類の理性と全一な

りと、是れなり、蓋し是れ廣大の假定なり、然れども凡ての學術は之れに由て起るものなり、故に之れ等の假定にして虚偽なりせば、凡ての學術成立す可からざるなり、故に學術は皆な其基礎を普通理性の實在と承認の上に置くなり、蓋し絶対普遍の理性に於ける永遠の真理は、即ち、凡ての人を照す眞の光なり、

故に吾人は藝術家を稱して、其解説と發明とに於て神と智力的の交通をなす者と爲すを得へし、彼は其心意に照徹する永遠の理性の光明に由て照耀せらる、若し夫れ最遠の一方に輝ける星の光線、一たび星學者の目に映して、彼に星體を現はすときは、之に伴隨したる永遠理性の光線亦全時に星學者の心意に映し、以て其學術上の意味と法則とを彼に示す、是を以て永遠理性其物即ち神を彼に顯すなり、又極微にして人の覺官より漏れ、只顯微鏡に依て見らる可き凡ての物體より、若しくは物體内部の成分より若くば覺官に感せずして、只舍密家の實驗に由れる純粹の知能に顯はるゝ所の分子及びエーテールよりして、夫の最遠の空間と時間とを支配するか如く、物の極奥なる本性と元精とを支配する絶対的理性の普遍なる真理と法則顯はれ來るなり、由之觀之、吾人は真正なる意義を以て、人は神の中に凡ての物を見

ると云ふとを得へし、此理たる、ケアレルの已に明知せし所なり、其言に曰く、神よ、吾爾に従ふて汝の思想を讀むと、此外氏は數々宇宙の造化主の前に在りて壯嚴肅畏の熱情を現はし、之を其學術書の諸部に記述せり、其他許多偉大の學術家は、學術的研究により認知せる神に就ての意識をば、敬虔の念を以て説明せり、故に古昔のプロチナスの如きは、哲理の考究を以て神に對する祈禱と思惟したり、

博士ゼーアール、ゼーレーは、其著書、自然宗教論に於て説を爲して曰く、學術的研究の熱心は即ち一種の宗教にして、充分に人の本性的宗教心を満足せしむべしと、若し學術にして物質と物形的勢力とに其知識を限畫する者ならば、又硝子函に於ける鼠の如く、唯物説の中に人を密閉する者ならば、則ち是れ靈魂の生存す可き空氣を消盡するものなり、此の如くなれば、學術家が其空氣、ボンブを運用するの熱心と敬虔とは何程偉大なるも、到底宗教と爲すを得ず、而して人の宗教心を満足せしむると能はざるなり、然れども、學術家にして、凡て己の學術的觀察の光明は、即ち絶對にして普遍なる理性に於ける眞理の光明なりとの事實を敬虔に確認するならば、則ち彼は又凡て宇宙の説明に於て、己は智性上眞理の神より交通を受けたることを敬

虔に感せずんばあらず、而して其學術上の熱心は絶へず、宗教上の敬心を養成すべし、

余が此く謂へばとて、學術的思想に於て、其考究の際に憑依し且つ確信する所の普遍的原理の基本たる絶對理性に絶へず注意を傾けて止まずと云ふに非ず、唯其憑依することは完全なりと雖ども、暗々裡に之に依據するものなりと云ふに過ぎず、彼の道義的感情、信仰、及ひ作用に於ける神の意識に就ても、亦之と全一の説明をなさざる可からず、彼の宗教的意識に於ては、人の注意己に、其或る方法に因て表顯せられたる神に向ひ、而して人は其思想中に神に就ての觀念を作り、及ひ神を喜はしむべき奉事を爲さんとを勉む、然れども、學術的及ひ道義的意識に於ては、人の注意唯其學術的及ひ道義的目的物に存し、而して神の意識は素より此中に含蓄すと雖ども、人の注意を起さず、故に人或は思想の中に神を認知するとなきが如きとある可し、然れども、吾人若し其心裡の状態を正當に且つ完全に分解せば、則ち其中に神に對する意識の陰在するを發見すべく、而して其合理的能力と感性にして正則に發達せば、次第に其意識の明白なるに至るべし、故に人の自己に就ての意識、及ひ

其自己の心理の狀態に就ての意識漸次に發達するに隨ひ、神に就ての意識も亦常に其背面に發見せらるると謂ふて毫も不可あるなし、
右の講究によるるときは、吾人が反省的思想に由て神の實在に就ての證憑を研究するとき、神の觀念と其存在の信仰とを以て、其研究の端を開くとは明かなりとす、然り而して此研究法は是れ吾人が外界の實在を信するに相當の論據を有するや否を討究する方法と異なる無し、夫れ外界は種々の部分をなし様々の方を以て吾人の意識に表現せり、吾人は先づ思想に於て之を考明、解説し、而して后ち始めて外界なる觀念を明亮にするを得べし、然り而して吾人果して其實在に就て眞實の知識を有するや否やとの問題は、何れの時代にも新たに起り來るなり、
今夫れ世には思辨を逞ふして、神の知識を疑ひ、若くは否定する者甚なからず、然れども彼の諸種の唯心說、非宇宙的凡神說、現象說、及び純粹の不可知說等を以て、外界に關する吾人の知識を疑ひ、若くは否定せるものは、其數決して之に劣るものにあらず、而して其論據も亦互に相類するものなり、然るに吾人は遂に吾人研究の結果として、神に於ける信仰は、吾人が有する他の原始的信仰の如く、精確なる知識たる

を知るに至るなり、

第三章

神は啓示に由て知らる、

人は神の人に對する自己の啓示に由て神を知る。

先づ第一の疑問は他なし、啓示とは何ぞやといふと是なり、

扱此疑問を考究するに方り、世人概ね啓示は特に神にのみ限れる作用なりと爲せり、然れども吾人若し深思熟慮せば、苟も吾人が有する知識なるものは、其何者に關する知識たるを問はず、物先づ其の作用を以て自己を啓示せるによることを知らん、

夫れ物が自己を啓示するとは、吾人の上に及ぼす作用に因て、吾人の意識に其自己を表現することを云ふ、故に啓示とは、只神に就ての人の知識にのみ限れるに非らず、人が己に對する外界の啓示に由て、外界を知るに於ても亦同し、夫れ外部の物體へ或る方法に因て吾人覺官の上に活動し、其覺官を通して吾人の意識に自己を表現す、而して吾人の心意は之を反省して、以て其物體を認知するなり、故に感覺の作

用中には二箇の要狀を有す、即ち外界の實在者は覺官上に活動し、以て其自己を意識に表現し、而して心意は之を反省して以て、其物體を認知すると是なり、是れ物を知るに於て、二箇の差別ある、併しながら唇齒相輔くる作用なり、而して其知識の眞實ならん爲めには兩から必要なるものなりとす、而して人の自己に就て意識を醒覺するも、亦只此外界の實體を認知するときにあり、然り而して凡百の思想及作用を嚮導する合理的直覺力の初めて人に閃耀するは、則ち此外界の物體の觸接する場合にありとす、其狀宛も鑽石を以て撃打すれば、鋼鐵より光輝の閃發するものあるが如し、

夫れ有限者の知識は、決して自ら之を生出し、若くは無碍的に存すると能はずして、其初め必ず外界より醒覺せられざるべからず、即ち外界より心意に對する物體の啓示に惹らざる可からざるなり、之に反して絶對的知識は既に其定義を得たるところが如し、曰く、自ら思考するの思想にして、自己以外に他の事物あることを知らざる所の思想なりと、是れ外部より心意の中に何等の物體の活動するに由て起るに非らず、自己の意識の中に、知識として完成せらるゝものを謂ふ、此の如きは獨り神

の有する所たり、故に未だ嘗て神は啓示を受けたるとなし、彼の外部より來れる物
 體の表現は、嘗て神の意識を醒覺せず、又其心意を活動せしめず、神は常に主觀者た
 り、客觀者たり、而して宇宙は覺の力に依て空間と時間とに於て有限なる實在に創
 設せられたるに先ちて、永久に神の智能中に存する思想なり、然れども人は絶對知
 識を有する力なし、其靈魂は外物に接觸し、其表現せられたる物體之を醒覺して、意
 識を起すにあらざれば、則ち恬然として睡るなり、故に物體の人の靈魂に啓示せら
 るゝは、取も直さず、靈魂が自ら自己に現はるゝものなり、此の如くにして一たび靈
 魂を醒覺せられたるときは、獨り外界の物體を認知するのみならず、自己を以て知
 識の目的となすとを得て、自己の思想の客觀者たると同時に又其主觀者たるを得
 べく、而して其意識の中に知識の環を完ふするを得るなり、故に人は知能の圓内に
 於ても、亦神に屬從するものたるなり、彼の外界の作用は沈睡せる靈魂に及び、其表
 現したる物體を知るにより、以て靈魂を醒覺し、而して自己の靈魂たることを意識せ
 しむ、而して神は常に宇宙に活動するが故に、吾人は吾人の靈魂を意識に呼起すも
 のは即ち神なりと云ふも不可なかるべし、是れ猶ほ慈母の受撫は、以て睡夢の兒女

を呼起すあるが如し、

啓示なる語の本來の意義を究むれば、直接に人の意識に物體を表現するを云ふ、然
 れども又必しも此の如くなるに限らず、苟も其意識に表現する物體が外部の結果
 にして、心意は其結果を起せし作用者を承認する時は、此事も乃ち一の啓示なりと
 す、例せば、余若し矢箭の正鵠に向て續發するを見れば、余は直に之を放つものある
 を知るなり、星學者にして遊星の運動を見れば、則ち其の相互の間に活動する引力
 あり、又之を支配して整然たる運動をなさしむるの法則あるとを斷定するなり、學
 術家にして光線の現象を見れば、則ち精氣の存在、震動及び覺官の感する能はざる
 超覺的作用者あるとを斷定するなり、蓋し其作用者は智性的思想にのみ自己を啓
 示して、人の意識に表現する者は、只其結果たるに過ぎずと雖ども、是等の作用者は
 其作用の結果の中に自己を現示したりと斷言するも不可なかるべし、蓋し此の場
 合に於ては、其作用者は吾人が其結果を觀察する間に是等の結果を惹起して以て
 自己を啓示するあるとに注意せずんばあるべからざるなり、
 又彼の作用者なるものは一種の結果を生じて久しく靜止せし後に至りても、其作

用者が當時果して何かなるものなりしやを明かに其觀察者に啓示するものなり、例へば埋没したる都城を發掘すれば、其建築物、器具、彫刻品、及び碑銘等の中、明かに古昔人民の歴史品性及び文化等を啓示するなり、太古石器の時代に於ける人類と雖ども、尙且つ粗惡の遺品中に、其存在と穢風とを啓示す、是を以て見れば、又吾人の意識に表現する者は、單に其結果に過ぎずして、其作用者の啓示せらるゝは唯だ吾人の思想のみなるを知る、

故に物躰の直接に意識に啓示せらるゝの場合と、單に其結果のみ意識に表現して、其結果を生したる作用者は思想によりて啓示せられたる場合との、二者は區別せざるを得ず、而して人の物形的包圍は此かる種々の方法に因りて人に啓示せらるゝものなり、

以上の理によりて、人の靈的包圍は人の靈的能力と感性とに因て人に啓示せらるゝものなりとす、蓋し物形系の外には靈系即ち超物系なるものゝ在るありて、物形系によりて以て自己を啓示す、夫れ物形的宇宙は神の儀型的思想の表現なり、而して靈系は物形系の如く、現に人の周圍を纏繞し、人は其靈的能力と感性とによりて

之を識る、凡そ人の靈的包圍は二様の形狀を以て人に啓示せらる、即ち直接に人の上に及ぼす作用に因て意識に顯はるゝか、間接に結果を通して顯はるゝか、此二者是なり、而して此等の作用によりて以て現在に活動するか、若くは過去に活動したる靈的作用者を顯はすものなり、

有心者と非有心者の分界線は、超物的と物形的との分界線なり、又靈魂と物質の分界線なり、是れ神の存在を信するの理由を講求するに當りて最も必要なる事なりとす、(有神說哲學的基礎 四〇九四一四頁)吾人神の問題を究むるには、已に吾人自己に就て得たる所の超物的及靈的の知識を以て發程すべし、此知識によりて吾人は、他の有心的、及び超物的なる實在者が吾人に啓示せらるゝとき、之を認知するとを得べし、此の如くにして、吾人及び吾人の同類を含有せる超感的、靈的、及び超物的なる存在者の一郷は乃ち吾人に啓示せらるゝなり、

夫れ人は物形的實在者として吾人の覺官を通して知らるゝものなり、若し人にして吾人視力の圍内に來るときは、吾人之を感ずべし、若し人にして崩壊せる鑛坑に埋没せば、其人は叫號の聲音に因て、吾人の耳に自己を啓示す可し、然りと雖ども覺

官を以てするときは、人は單に他の物體の如く、物形的實在者として吾人の覺官に表現するのみなり、

然らば則ち、人は如何にして合理的なる自由の作用者として自己を啓示するか、如何にして自己が神を知り、眞善全福等の何物たるを知り、又如何にして此等のものに對して吾人が興味を感ずる、其感情に對して吾人に同感を表するを得るとを啓示するか、一言して之を蔽へば、如何にして人は有心的實在者として自己を吾人に啓示するか、

(い)先づ過去に於ける人の作用の結果に由りて之を啓示す蓋し此結果に由りては、單に自己の有心者なるとを啓示するのみならず、亦其一個の品性、藝能、及び精神の特質をも啓示するなり、例せば、彼のローマ聖ペテロ會堂は是れ石材を以て築造せられたるミカエル、アンゼロの思想なり、又ローマシステナ會堂にあるマリヤの畫は、リフハエルの靈才と、其美術の思想とを啓示し、蒸氣機關、電信器等は各其發明者の靈才、思想を啓示するが如し、

(ろ)人が自己の有心性を啓示するは、又た吾人の目撃する人の作用に由るものなり、

蓋し此かる作用は其人の如何なる人物なるかを啓示するものにして、其人の品性、能力等を知る可き標章記號なり、凡そ啓示なるものは人の心意、其啓示せられたる物體の上に反省し、以て其眞實と意義とを認知することなり、見る可きの物體を通して見る可からざる者を観るなり、感すべき物體を通して感すべからざるの物を知るなり、之れと同一の有様に由り、同一の能力に由り、吾人は他人を看て、其吾人の前に動作するとき、其人の有心性を認知するなり、即ち其作用を通して之を看、而して其有心性を知るなり、人は其作用に因て眞善全福及び神に就ての知識を啓示し、又其意識的自由及び道義的本分を啓示す、之に因りて其人も亦吾人と同じく、合理、自由の者たるを知るなり、凡そ人の事物を知識するに當て、其覺官と理性とは決して互に離れずして、其感覺と合理的直覺力とは共に其間に作用す、若し覺官の目的物覺官に表現すれば、人は其物が覺官に表現する通りに之を認知し、之と同時、冥々裡に作用する合理的直覺力に因て、理性が之を視る所の形狀を以て其物を知る、是に於て人は其思想を用ひ、此物を以て、物體即ち非有心者の具有する資性を保てるものと認識す、之と等しく、人ありて自己の眼前に活動するとき、則ち合

理的にして自由なる者の資性として、自ら其意識に認知せる資性をば、其人の中に認知するなり、

(は)此外人は言語を以て其有心性を啓示す、夫れ人に言語を使用するの事實あるは、則ち其有心的及靈性的能力を有するを啓示する所以なり、然れども人が言語を以て思想を交通するの能力を有するは、則ち是れ自ら自己を啓示するの不完全の方法たるどころなり、何となれば人が言語の意義を會得するを得るは、先づ實在者との作用との知識を有せる後の事なればなり、故に、余は爾の母なり」と語るのみにて、人の母は其母なる語の意義を幼兒に傳通すると能はず、彼は只だ悠々たる愛の動作を以て、此語の意義を啓示することを得べし、蓋し動作の聲は言語の音調よりも適かに高し、故に人其能力、品性及び才藝を啓示するは、則ち其作用によるなり、然りと雖ども、實事の符表たる言語の意義にして、一旦人に會得せらるゝときは、是れ其啓示の至要なる媒介物なりとす、

(に)人の有心的實在者として自己を啓示するに、尙ほ一箇の方法あり、自然の舉動に因る者は是れなり、夫れ人の精神は其眼目を通して外部に發顯し、又形容、態度等に因

て發顯す、人の顔面は即ち說話者なり、設ひ言語は如何に之を拒否し、舉動は如何に之を掩蔽せんと務むるも、其思想と感情は油然として其上に溢るゝなり、一瞬の凝視は以て心中の極秘を顯はすべし、一聲の音調は以て陰密なる生活上の戦争と悲哀とを現すべし、蓋し靈魂は靈魂と觸接し、而して彼の自然の舉動を解するの能力の如きは、實に自然に人に存し、教を俟たずして然る者の如し、彼の母の懷にある孩提は、未だ一語を解する能はざるに、已に笑を以て母の笑に答へ、涙を以て母の不興の色に酬ゆるに非らずや、凡て其見たる所の者は、皴線の光影の數點に外ならざれども、是等に因て母の精神を窺ひ、其愛と不快とを知る、夫れ幼兒にして、斯の如く自然に於ける不明の文字を解するは何の故ぞや、是れ只寒氣酷烈の北海より野雁を驅り、寒帯より暖帯に移らしめ、漫々たる天空を通過して、確實の進行をなさしむる神殊に之を誨ゆるのみ、

(ほ)世上又一種の説あり、曰く、人は心意の心意に對する或る直接の作用に因て、遠隔の地にある他人に自己を啓示するを得るものなりと、是れ未だ學術の説明せざる所なり、而して其説の多分は確實の證據あるが如し、此説果して眞實なりせば、則

ち合理的自由の有心者即超物的實在者として、一個の未だ説明を経ざる人の啓示なりと謂ふ可し、

(一)夫れ人に對する人の有心性の啓示は、第だ吾人が頼て以て人の有心性を推測する所の外部結果に由るのみに非らずして、又靈魂上に於ける靈魂の作用にもよるなり、是れ其生する所の結果は、之を受納する所の人の意識中に在るが故に、最も直接なる者なりとす、吾人徳大に、識高き人の面前に在れば、自然に之に薫陶、感化せらる、而して其感化は特別の舉動を以て測度すると能はず、只和氣藹然として四表に光被するのみ、徳を高ふし、精神を旺ならしむるが爲に一箇の大集會を開けば、集會其物は、至大の目的の爲めに活氣を生じ、如何に雄辯なる辯舌者と雖ども、單獨孤立して施す能はざるが如き感化力を演舌者と各箇人とに波及せしむるなり、何の法に因るも、人の靈魂にして一たび他人の靈魂と交通するときは、直に他人の靈魂の上に活動して之を感化するに至る、愛情なり、友情なり、是皆な人を激發奮興せしむる者なり、而して雄大なる思辯的問題及び實際的計畫に對する同感の情に至りては、人の能力を増倍せしむるなり、且つ人は論說、誘導、摸範、勇氣、希望、高志等を以て

他人を感化するを得べく、兩人相愛し、相薫陶し、相勵まし、相化し、以て生涯相背くとなきを得るなり、此時に際しては、一人の靈魂絶えず他人の靈魂上に活動して、常に他人の意識に自己を啓示するなり、

此の如く、人は吾人に自己を啓示す、人の感覺に超絶せる者を啓示す、是れ超感にして超物なるものなり、又其有心性、自由意志、其品性及び目的を啓示す、此に於て乎、吾人は自己が道義的及び靈的系統の中にあるを發見す、

故に啓示は神に限るものに非らず、何かなる實在者と雖も、自己を他に認知せしめんと欲せば、自己を之に啓示せざるべからず、

神も亦人に自己を啓示す、吾人は其啓示に就ては、今より將に考究を始めんとす、古より多數の人は、神の啓示を以て單に聖書に記載したる啓示のみと思へり、然れども實際神に就ての知識は、自己を啓示する神の作用あるとを預想するものなり、神の啓示は、獨り基督と聖靈によれるものゝみに止まらずして、猶他に之れあり、而して該啓示は、凡て他の啓示の頂點なりとす、此くありてこそ、知慧と智識の凡ての財寶は、皆な基督の中に隠れたりと謂つべし、

神は直接に人の意識に自己を啓示す、(い)智力的及び學術的思想の範圍内に於てすらも、人は自己の光明に因て自己を啓示し、其人の思想を照らし、嚮導し、及び之を支配して、其思想中に耀ける普遍的原理を發見す、而して此原理によりて普遍絕對の理性は人の心を照らし、以て其意識に自己を啓示するなり、夫れ凡百の學術は、普遍的理性の原理を自定し、而して其職分とする所は、宇宙に於ける普遍的理性の啓示を發見し、及び之を説明するに在り、とす、

(ろ)日常普通の行爲に於て、人は道義法に従ふべき義務の下に存在するを知り、是に由て又人は其意識に自己を啓示し、儼然として良心に命令する絕對の理性に對するを知り、

(は)人の特別なる宗教的意識は、人の靈魂中に自己を啓示する神に就ての意識なり、とす、

神は右の如く、密に直接に人の意識に自己を啓示するのみに非らず、間接に、神が其原因たることを啓示する所の結果によりて、智力的思想に自己を啓示するものなり、此啓示は即ち神が宇宙其物を通して自己を啓示するものを云ふ、所謂宇宙は神

の思想の進歩的表現なり、神の智慧と愛との儀型的觀念の進歩的現實なり、而して是れ宇宙に就ての有神的觀念に必要なり、とす、宇宙を以て此の如きものとせば、是れ宇宙は其元精に於て、神の不斷にして進歩的なる啓示なり、神の自己を啓示する所の言語は、世界、宇宙の組織、及攝理と救極との永劫の作用なり、吾人が知識と思想の運用に於て、絕對の實在者が宇宙の根基として存在するを知らざるべからざるは、是れ吾人合理的本質の必然性なり、とす、然れども其絕對者の果して何物なるやは、宇宙其物を通して啓示せらるゝなり、彼の絕對者を發見せん爲に用ひたる、凡て純然たる先天的計畫は、只何等の意味もなき至大の響ある言語として終らんのみ、
(有神說哲學的基礎、三八七、二八九頁)

蓋し此啓示は宇宙全體を以てするものなり、神の自己を吾人に啓示するは、奇怪不正則の方法に因るに非らず、却て人の心意の合理性と理法とに従ひ、合理的能力の作用を以て、之を受納曉會するを得べきの運用と結果とに因り、又殊に非常、特殊、或は奇蹟的方法に因るのみにあらずして、一般の理法に従へる尋常一様の方法にも由るものなり、とす、故にボロロ曰く、それ人の見ることを得ざる神の永能と其神性

とは造られたる物により創世より以來さとり得て明かに見るべし」と、又曰く、「神は我儕各人を離るゝと遠からざるなり」と、神は永く宇宙の間に活動して、凡て驚く可き變化、錯綜したる作用と、其萬殊の智慧に於て啓示せらる、吾人が頼て以て物形的及び靈的宇宙に觸接して其感化を受くる所の、物形的及び靈的本性の諸能力は、正に是れ吾人が頼て以て神に觸接し、頼て以て其感化と啓示とを受くるの門なりとす、故にゴエテ歌て曰く、

爾其限りある視力を以て無限者を測定せんと欲するか、請ふ信仰願盼して六合を望めよ、左らば其有限者の中に之を發見すべし」

而して詩篇作者は自己の八方より神に圍まれ、神の作用と勢力の爲に取捲かれたるに就て、著名の記述を爲せり、曰く、「爾吾が歩むをも我臥すをもさぐり出し我諸の途をことごとく知り玉ふ、爾は前より後より我を圍み我上にその手ををき玉へり」と、夫れ物形世界の人を包圍し、八方より其上に活動し、以て形而下學に因て知られたる實体を啓示する如く、宇宙に於ても神は人を包圍し、八方より其上に活動し、以て宗教に在ては經驗に因て知られ、神學の思慮に在ては、反省に因て知られたる

實体を啓示するなり、

(イ)神は物形系に於て自己を啓示す、即ち萬有の本質中に於て自己を啓示し、又常に萬有の中に進歩して、永遠の思想を表明する所の自己の作用中に自己を啓示す、進化論者の唱道する所に依れば、萬有は完滿にして且つ固定したる成果に非らずして、常に發達、生長して、時代より時代に及び、新奇にして且つ優等なる勢力を顯はすものなり、左れば萬有は増加或は變化によりて直に破損する所の鑄鐵の如きものに非らず、萬有は機械の如きものにあらずして、有機体の如きものなりとす、故に其の中には進歩的に自己の完全性を啓示し、常に萬有中に遍滿活動する神あるとを承認せざるを得ず、(有神論哲學基礎頁、四九一至五三六頁)

(ロ)神は又道義的及靈的系統中に自己を啓示す、夫れ人にして自己と同類とが、合理的及び道義的系統の中に在るの事實を發見せば、其事實其物は直に其人の思想を神に導くべし、若し自己と他人を看て、單に之を隔離孤立する者と認知するときは、則ち此知識其物は道義系の知識には非らざるべし、然れども人は箇々隔離せるものとして、自己及び他人を認むるとなく、反て同

類人間として之を知る、苟くも人相互に其合理的、有心的實在者たることを知るるときは、則ち共同の知識、共同の理性的原理、共同の意思、感情を有し、互に義務の下に在て、一社會を成して生存するを知るべし、是に於てか、彼等は自己の合理的及道義的系統中に相結合せるとを知る、然り而して此かる結合なるものは、只該系統の究竟基礎となり、以て其中に自己を啓示するところの絶對理性若くは靈なる神に對して、彼等が共同の關係を有してこそ始めて成立すべきのみ、若夫れ絶對的理性に於ける此基礎なくんば、則ち其系統は土崩瓦解して、餘す所は只箇々分立の箇人あらんのみ、

(は)神は又合理的、自由的及び有心的實在者にして、合理的動機と感情とを有するを得べき人類の本性中に自己を啓示す、

(に)神は又攝理的及び道義的政治に於て、人類の歴史中に於ける其作用に因て自己を啓示す、

(ほ)其他神は耶蘇基督に至りて完成したる作用即ち人類歴史に於て罪惡より人類を救拯するの作用に因て自己を啓示す、

(一)神は基督の死後、世界の救贖的作用に因りて常に自己を啓示す、人を更生し及び新清にする聖靈の存在と、靈能とに因て常に自己を啓示す、凡て基督教徒の著顯なる基督教の意識に因て常に自己を啓示す、義と、平和と、善との王國の發達に因て常に自己を啓示す、

以上述べたる二種の啓示に名を命ずるとせしに、人の意識に於ける神の直接の啓示は、之を一個的若くは預言的啓示と云ふを得べく、又宇宙に於ける間接の啓示は、之を稱して公共的若くは歴史的啓示と云ふとを得べし、

夫れ啓示とは神に屬する未知の或物に就て知識を交通するに限るものにあらず、例へば余が朋友は毎日友愛の舉動に因て、既に知れたる友情を啓示し得べし、神も亦此の此く、其律法と、義と、愛と、完滿なる恩恵を以て、日々新に吾人に啓示し得べきなり、然りと雖ども、吾人は人に對する人の啓示を以て、神の啓示の摸型と爲し、後者は前者の域内に包括せられざるべからずと斷定するを得ず、何となれば神は人間の手段よりも遙かに超絶する方法に因て、人の心に觸接せざるべからず、特に心意に對する心意の作用に於ては、吾人神の靈が一層容易に人の靈に接觸すること

を思はざるべからず、又神と人との間には、人と人との間よりも、一層親密の交通ありと思はざるべからず、

是に由りて之を見れば、神の吾人に對する啓示は、凡ての物幹及び人類が吾人に對して爲すところの啓示と同様なりとす、神は吾人の上、又は吾人の眼前に活動し、而して吾人の心意之に反省して以て神を知る、此啓示たる或は直接なることあるべし、恰も吾人が外物を認知するが如し、又間接なるともあるべし、即ち思想を以て、吾人を刺激する所の物を發見し、其意味を解釋するとき是れなり、要するに神は吾人を發見し、吾人も亦た神を發見するのみ、コレリツヂ曰く、聖書中には余が他の諸書に於て經驗したる所の者を打て一丸と爲せしより、尙我を發見する者夥多なるを見る、聖書の語は、我が實在の深底に於て我を發見す、而して此の如く我を發見するものは、其何たるを問はず、皆確かに聖靈より出てたる者たらざるべからず、と、聖書を讀むに際して、吾人の秘密を發見する者は則ち神なり、其真理によりて、最も深遠なる奥底より吾人の靈性を感動せしむる者は則ち神の靈なり、神は聖書の著者に啓示せる如く、亦現に其讀者に自己を啓示す、蓋し是れ決して信すべからざること

にあらず、何となれば若し神果して存在し、人果して神の像に肖たる靈的實在者なれば、則ち神が神として人類に自己を啓示するは、外物が覺官に對する目的物として自己を啓示し、他人が有心的實在者として自己を啓示するに比して、殊更に奇怪なりとか、曉解し易からずとか云ふべき謂れなければなり、

抑も神が自己を啓示し、而して吾人が有する神に就ての知識は、其啓示を通して得らるべしとの事實を確認するは、蓋し正當にして完全なる神學講究に必要なものなり、夫れ人が神を求むるに先ちて神は人を求むとは、聖書及び哲學の誨ゆる所なり、而して是れ罪惡より人を救拯する神の歴史的作用の始より終に至る迄、人と神との交通せし事に就て最も眞なり、然るに此事たる、屢々神學者の看過する所なり、彼の神學者は思想の一撃を以て神を發見し、及び他人に其實在を證明する者の如く、一氣奔放に其講究場裡に突入せり、然れども若し其實在を啓示する神の運動吾人に對して存せざりせば、又吾人の心意に反省す可き神の活動吾人の上若くは吾人の前に在らざりせば、則ち吾人は勞苦の結果として、自己の思想を以て造りたる荒唐無稽の講究に陥るのみ、神は吾人が神を發見するに先ち己に吾人を發見す

るものなり、此點に於て吾人が神を知るは他の存在物を知ると毫も異るところなし、果して然りとせば、凡て神學者の真正なる品性は、夫の古代の預言者の如く、常に懈らずして神の啓示を收接するにありとす、曰く、吾はエホバなる神の言ふ所を聞くべしと、又曰く、見よ僕その主の手に目をそゝぎ、婢女その主母の手に目をそゝぐが如くわれらは我神エホバに目をそゝぎてそのわれを憐れみ玉はんとをまつと、此く、直に神の手の合圖に従はん」と専心注視する所の者には、神必ず之に現はれて其能力、智恵及愛を示すべし、

吾人は既に啓示の何物なるやを答解せり、次に考究すべき疑問は、神は何を啓示する乎といふとなり、而して吾人は之に答へて曰はん、神は自己を啓示すと、アレキサンドライアのクレメントの言の如く、神を宣傳すると神に就ての物を宣傳するとには、其間に一大差異あるなり、

神は言語を以て記述せし眞理、教義若くは誠命にもあらず、又哲學、倫理學若くは神學にもあらずして、其靈能、智慧及愛を見はし、以て有心的に自己を啓示するものなり、故に神の啓示は言語を以て交通せる命題を重しとせずして、自己の作用を以て

自己を啓示するを重しとす、

神の啓示する所は、聖書にあらずして自己なり、元來神の啓示は聖書を作り、之を人に授けて以て信仰と愛の生活に人を改悟せしむるとに非らず、神は宇宙の創造保持、進化と、攝理的及道義的政治又は救贖等に於ける其作用の大進路に於て自己を啓示するなり、

神の啓示する所は學術上より形成せられたる宇宙の系統にあらざるの自己なり、今夫れ萬有は組織せられたる星學を啓示せず、只た複雑なる運行、交渉を有せる太陽と遊星とを啓示するのみ、故に星學者は是等の運行關係を觀測して、以て其理法を計較し、而して後其所謂星學なるものを發見せざるべからず、而して星學者は己れが作りし式に満足するとなく、又其定説、證徴、教系をして其心意より星宿の天を遮斷せしむるとなし、之と同しく、人は合理的なるが故に、其神に就ての知識を説明、組織せざるを得ず、然れども其説明、組織及聖書に満足すべからず、又是等の者をして自己と神との間に侵入せしめ、以て神を遮蔽せしむるとなく、反て之を以て其作用によりて自己を啓示する神の性を表示するの器械となさざるべからず、

且つ神の啓示する所は宗教にあらざして自己なり、即ち信仰と愛の挑發者として、或は禮拜を以て交通すべきものとして、或は其生活中の勞苦、艱難、喜憂の裕助者として、神は人の實驗に於て自己を啓示するなり、此神と人との交通は即ち宗教なり、然れども其宗教たる所以のものは神が宗教を啓示せしに由るにあらざして、神か自己を啓示し、人は之によりて神を發見し、之と相交通せしに由るものなりとす、

第四章

神の啓示の收接、了解

啓示なるものは、人が其啓示せられたる物体を知覺し、之に注意し、之を思想の中に認知するにあらざんば、則ち人に授くるに知識を以てすることなし、

(一)此理は獨り天啓に限らずして、人の意識に表現せらるゝ凡ての物体に就て然る者なりとす、物を知覺するに、覺官は唯知覺者の器械たるに止る、夫れ心意は眼を通して見る可からざる者を知覺す、即ち覺官を通して表現せられたる意義を讀會す、蓋し此く讀會せられたる意義は、覺官に啓示せられたる實躰なれども、又覺官に超越せるものなりとす、人若し漢土に於ける書籍の一頁を披閱せば、其る見所は只だ白紙上の黒痕に過ぎざるへし、又英語の聖書を讀み、吾人が、吾人の容易なる邦語を以て之を讀むとを神に感謝するときも、吾人は漢書に於けると同一の眼を以て之を見るに相違なし、然れども吾人の心は其眼を通して其中に神聖なる思想を讀み、人に來れる神の王國を視る、之と同しく人は眼を以て地の表面を見ると雖も、其眼

を通して其眞の意義を讀み、又其眼を以て見る能はざる實躰を視るなり、人の鑛塊を見るや、單に岩石の形躰と配置を見るのみなれども、敏慧の鑛山師に取りては此等の者も、以て其思想を財寶の秘庫に經過せしむべき符號とはなるなり、彼の形而下の學術なるものは、取りも直さず、絶へず見へざるものを見絶へず可感的より超感的に經過するものにてあるなり(有神的主義哲學的) 學術家に取りては、其萬有中に觀察する物躰は、常に其秘義に通達すへき符號なりとす、夫れ人が物の啓示を收接するや、其心意は直覺と反省の力を兩ながら使用す、心意は常に意識中にある主觀的の感覺に止まること能はずして、之を通して自己を啓示するところの物を知覺す、加之心意は常に知覺したる物躰にも止まると能はずして、反省の思想によりて、賴て以て是等のものを學術的の系統に構成するところの原理、理法、目的を會得す、夫れ人は萬有の解釋者なり、故に吾人にして萬有の書を讀むと云ふは、必らずしも比喩の語に非るなり、凡百の學術は一個の碑文の意味を解明するものに外ならず、而して有神論者は萬有を以て、神が手から録し玉ひし一個の碑文なりと信す、是れによりて見れば、人凡百の知識を得るには、必らず見るべ

き者を通して見るべからざる超物的の者を視るの能力を使用しつゝあるなり、神の啓示に於けるも之れと同じく、人の心意は之を收接解釋する爲めに活動する者なりとす、

故に啓示によりて知識を交通するは、單に其啓示せられたる物躰を知覺し、理會するに適當なる能力を附與せられたる心意にのみ之を爲し得べし、光線は眼なき所に形象を呈せず、空氣の震動は耳なき所に音聲を呈せず、感覺は知覺する心なき所に概念を呈せず、人其靈性的資性を有するも、若し之を理會すへき有心的及び靈的能力あらずんば、永く他に知らるゝとなくして止むべきなり、

加之、啓示なるものは受動的存在者に對して爲す能はざるものなるを知る、何んとなれば凡ての知識は、假令如何なる方法を以て之を傳與するにもせよ、之を收接する心意の作用なればなり、

且つや、啓示せられたる物躰の知識は、一度の啓示にて完全無欠なると能はず、一個の物躰心意に啓示せらるゝや、其物躰の上に反省して以て其物躰の何物たるを知覺し、又其物躰の特性と關係、及び凡百の事物の系統中に在りて、其物躰眞個の地位

と意義の如何を探究するは心意の職分なりとす、假令へ此の物體をして、吾人が籠中より投し、吾人の指頭を以て之を取り、又瞬く間に其四周を吟味し得へき一個の象牙の骰子ならしむるも、若し吾人之に就て知り得べき一切の者を知悉せんと思はば、其與ふるところの知識は以て一大類典を成すに足るべし、彼の天地の公開秘義は、人類の此世に生存せしより以還、毎日毎夜覺官を通して人に啓示せらる、而して幾百の世代を経て、之を考ふるも、未だ此秘義と其竟義の十分なる知識を得たるものあらず、十字架上に於て基督は言へり、曰く、事竟ぬと、而して首を俯して靈を付せり、是に於て乎、基督の現世の務め終れり、蓋し基督の之に因て爲したる所の啓示は、彼の猶太が言へる如く、一度傳へられしのみ也、然れども凡て基督を信する所の人は、生涯の問益々基督の生と死に因て啓示せられたる、人に對する神の愛を學び、而して益々諸の聖徒と偕に測る可らざるキリストの愛を知りその濶さ長さ深さ高さを識るを得るなり、基督の死より現今の世に至る迄、基督敎國に於て、未だ基督ほど多く人の研究を受けたるものはあらず、然れども凡て是等世代の研究も、未だ以て世界の改新に關する基督の啓示の意義を明瞭ならしむるに足らず、全き類

悟の富を得、父なる神と基督の奧義を知るに至るとを得ず、吾人は轉た使徒彼得が斯事は天の使等も知らん事を欲へりと記述せし往古の日と同しく、今も亦然ることを思考するなり、

右の如く、啓示なるものが、知識を人に與ふる爲めには、其啓示せられたる物體に心意の反省を必要とするが故に、吾人は神の啓示を收接し、及び其意味を解説する爲めに、人間理性の作用甚だ必要なるを見る、蓋し啓示は、人間理性の之を收接し、認知し、解説するにあらずんば、則ち全然虚無に歸するものにてあるなり、故に神に就ての智識には三要素ありとす、曰く、神の啓示、曰く、宗教的經驗、即ち啓示せられたる神に就ての意識、曰く、靈の知覺、及反省的思想によれる心意の反應是れなり、

(二)思想を以て啓示を認知し、解釋する心意の作用、即ち左の如し、人は先づ自己禮拜の目的者たる神に就て、實際如何なる觀念を有する乎を其心意の中に解明せざるへからず、人自己を顧みれば、則ち超物的又は超人的實在者の存在を信して、之を崇拜すると看出すへし、彼は謂ふ、吾れ此の實在者の存在と能力

とに就て経験を有せりと、又謂ふべし、吾れ許多斯の如き實在者の知識を有すと、彼れ若し是等の経験及び自然的信仰の上に反省考察を下さば、其神に就ての自己の概念より、其禮拜する所の神は果して如何なる者なるやとの觀念を形成せん、此理は一層巨大なる知識と富贍なる経験を有する基督教信徒にも適用すべきものなり、彼も亦自己の禮拜する所の神は、果して如何なる者かを自己の心中に解明することを以て、其講究を始めざる可からず、

次に、此神の實に存在すると、及び其信仰の眞實の知識たることを信するの理由を確定せざるべからず、世人或は駁して曰く、神は論理學の原理によりて證明すへき物に非すと、若し此論にして、神の觀念は證明の結果より生ずるに非ずして、却て其初頭に生起するものなりとの意義なりとせば、眞實なり、吾人は神の存在を信するの理由を考究するに先て、神の觀念を有せざる可からず、若し又神の觀念をして、表現的或は合理的直覺力により少くとも其觀念を組成すべき要素たる下題を経験上有するとなく、單に思想の製作物たらしめば、則ち彼の反對説は確實ならん、若し果して其推理にして、此の如く空虚の觀念より發程せんか、則ち其結果たる觀念に

於ても、亦同しく空虚たらんのみ、然れども心意なる者は表現的若くは合理的眞覺力より材料を取るにあらずんば、決して一の觀念をも造ると能はず、故に此場合に於ても、研究者は基礎を経験に置きたる神の存在の信仰、及び其信仰を基礎とし、直覺力によりて其元素を得たる神の觀念を以て研究の端緒を開く者なり、故に神の存在に對する證明とは、只吾人が其存在を信する理由を述ふるものたるに過ぎざるのみ、語を換へて之を云へば、其信仰の由て立つ所の證據たるに過ぎざるなり、故に若し神の存在を證明すること能はざるが如きとありとするも、是れ神の存在の證據なく、又其存在を信するの理由なきが故たらざる可からざるなり、

ヤコビ主唱して曰く、神の存在は證明す可からず、何となれば之を證明せんと欲せば、必らず或る物よりして之を推度せざる可からず、而して斯く推度するは、取りも直さず、吾人が依て以て神の存在を推度する物に、神が附屬することを意味すればなりと、是れ彼は思想上の論理的附屬と、具體的實躰の因果上の附屬とを混同して、至大の謬妄に陥れるものなり、且つ彼は、推測は單に原因より結果に及ぼすべきも、決して結果より原因に及ぼす可からずと自定するものなり、夫れ此の後の場合に

於て思想運用の有様は、即ち原因作用の反對なり、具體的實験の實際の運用に於ては、則ち原因は結果に先ち、思想上論理の運用に於ては、則ち結果の知識は原因の知識に先つものなり、ヤコビの反對説は、原因より結果を推測すれば、則ち原因は結果に附屬するを示すと云ふに在り、今吾人合理的なる言語と行爲とを理會したる後、合理的有心者の存在を推測す、然れども此の如く推測すればとて、其有心者の存在は其言語行爲或は之を認知したる吾人の心意に附屬すとの意義を含蓄すべきに非ず、此の如く、人は其經驗と觀察とに由て知り得たるものより、神の存在を推測す、而して此く推測すればとて、必らずしも神の存在を以て、經驗と觀察、及び之より出てたる推測に附屬すと爲すへきに非ず、此理や、移して理性の他の原理に適用するを得べし、蓋し實際に於ては、普通なる者は特別なるもの前に在り、絶對は絶對ならざるものに先たつ、然れども人間思想の實際の運用に於ては、特別なる者、普通なる者の前に知られ、絶對ならざるもの絶對の前に知られざる可からず、而して思想は其特別なる者によりて、啓示せられたる、普通なるものを發見し、絶對ならざるものに於て、絶對なる者を發見す、今日に至るもヤコビと同一の難問を起すものあり、然れども是れ獨乙の唯心學派及び凡神教派哲學者の間に有り振れたることにして、物界の運用と論理的の運用とを混同したるもののみ、

神の啓示に於ける反省的思想第三の結果は、即ち智識の進歩と共に、神の觀念を誤謬より脱せしめ、此觀念の欠乏を補ひ、之を漸次に發達せしめ、以て絶對の理性、永遠の靈なる獨一の神の眞正の觀念に達せしめ、且つ人の心意を以て達し得へき凡ての源泉よりして、神及び神と人間との關係に於ける凡ての眞理を確定し、告白することとなりとす、是れ即ち教義神學にして、神が自己に付て如何なることを啓示したるやを認知、解明し、其啓示自身の和合、及び啓示と一切の己知の事實との和合を發見し、以て及ふべき丈け之を組織せる人間思想最上の結果なりとす、吾人は神の觀念の、吾人幼稚の時代より成熟の時代に至るに隨ひ、次第に廣大の觀念に轉移するを記憶す、吾人は虚偽の教理より、或は自己が眞理を誤解するよりして起れる、神に就ての壓抑的概念を洗除するとき、心舒び、情怡ぶを覺へたり、凡て壯年の基督教信徒は、其神の知識を増加すると共に、神の觀念も亦隨て増大するとを驗知す、

此事や、人類の歴史に於ける神の知識進歩の状態に就ても亦真なり、夫れ宗教の最下等の状態たる靈魂教及び拜物教に於ては、人皆各物各躰の中に、目に視る可からざる、超物的能力の存在するを承認す、其萬有の知識次第に進歩するや、人尙ほ視るへからざる超物的の者存在するを承認すと雖ども、此時に於ては之を以て、日月、若くは燦然漫々たる蒼天、及び其他萬有中高等なる勢力と形躰の中に存する者とす、而して人物性的宇宙は其各部、法則の支配の下に在りて、相一致する秩序的宇宙なりと認知するの時に至ても、亦宇宙間到處に視るべからず若くは悟るへからざる能力の存在するを發見す、然れども此時に於ては、之を以て宇宙間に權能智慧及び愛を啓示する唯一有心的の神と爲すなり、然り而して遂に基督を通して人間歴史の中に自己を啓示する神の完全なる啓示を見るに至りて、人は尙超感的若くは超物的に關する原始の知識を保存するも、今や罪惡の拯救者たりとの神の最高最美の概念に達す、

夫れ幾多の謬妄顯出し、人世進歩の途上に於て、時に或は神に關して種々奇怪なる觀念の生出するは他なし、思想に於て神の啓示認知し、解釋し、及び啓示せられたる

神の觀念を解明する右の運用に在りて存するなり、昔日セシユイット教派の、初めて加奈太地方印度人の中に傳道するや、其教師等は印度人も亦神に就ての或觀念を有するとを看出せり、因て神の惡人を罰すと云へるとを彼等に説明せんとて、爾曹仇敵を擒にするときは、之を拷責、焚殺するにあらずや、神も亦其敵に對して同一の罰をなすなりと云ひたりしに、此語は忽ち非常の感動を彼等に與へたり、然れども若し斯語にして、彼等の復讐心と瘴猛なる害惡心は神の義と異なるとなしとの考定を彼等に起さしめたりしならば、寧ろ其從來懷抱せし觀念を其儘に實行せし方、彼等の爲めに利益ありしなるべし、

人々神に就て謬妄の觀念を形成し、而して此概念年代の異なるも、國民の不同なるに因て變化するも、是を以て決して其神の存在の眞實なるとに反對する所の駁論となすを得ず、其故は第一に、是等千變萬化なる概念の中を通して一貫する所の確實の數要素あればなり、蓋し此等諸種の概念中には多少無限といふ意義を含有し、且つ超物的及び超人的能力の存在に就て多少明了なる意識を存し、又吾人が萬有人間兩界の勢力に就て知りたる所の方法を以て解すべからざる結果により以

て自己を表顯するところの、視るべからざる能力ありて、其物たる猶ほ視るべからざる人心の如しとの意識を存す、彼の靈又は超物的觀念は後世の生出にして、幾多艱難の事情を経過して後初めて得來れる者なりと言ふは、是れ未開人種の歴史に於て吾人が觀察したる凡の事實に反對するものなり、蓋し人が自己の個存同一に關して有する意識の強大なる、吾人が知れる最も古代の人よりして今日に至るまで、死も以て其存在の永續を害する能はずと確信するに至れり、元始の世、人は唯物教を奉して、只眼に視、手に觸るゝ者を信するが如きことなく、反つて其自己心意の不可視的、不可觸的能力を意識するの旺んなんと、萬有中の各物は、皆な自己と同一なる心意によりて活動するものなりと信するに至れり、左れば當時に在ては、人の死するや、遺族皆な信すらく、只死者の靈のみ冥土に旅立するに非らず、其墳墓に供へたる馬、及其中に蓄藏せる食物若くは刀劍等も亦靈と爲りて、死者と共に彼の冥土に行くど、夫の未開人が存在するど信し、神として禮拜する所の者は、即ち自己の見へざる思想と意思とに同じく、而かも又自己の上にて自己の及ばざる所の、此視へざる靈の超物的能力に外ならず、而して此觀念は、彼が思想中に自己の神に

就て形くる諸種の觀念の基礎と爲れり、然り而して其概念は、年代より年代に、其知識と文化の進歩に隨て純粹にせられ、又正確にせらる、故にシェワイツェル曰く、人心は太古より以來、現象の裏面に陰伏し、心の中に意識したる實躰を禮拜し、而して其實躰を以て物質と物質力に類似せるよりは、寧ろ觀念に類似したりと信したるとは疑ふべからずと、

フオイエルバ・クは有神説に對して一の反駁説を試みたり、曰く、諸族宗教に於ても、神なる者人に自己を啓示したりと想像せらる、而してシセロ及び他の非基督教著述者は、異教信奉の目的者の眞實なるを論するに、今日基督教信仰の目的者に對して世人が一般に用ゆるが如き同一の議論を用ゐたりと、然れども此反駁説たる根基なきものなり、何となれば靈的、超物的、及び超人的なる者は、基督教の神に於けるが如く、異教の神に於ても、亦常に其要素と爲りたればなり、如何なる形狀を以て異教徒の想像中に之を思念するにもせよ、是れ必ず人の見へざる思想及び意思に似たる超物的及び靈的、能力なり、而して靈、超物、無限なる觀念は神の最高觀念中の根元的要素なり、若し異教徒にして基督教信徒が発見せし如き同一の實在者の

存在せる證據を發見したりとせば、是れ彼は幾分神に就て眞正の觀念を有するが爲めなりとす。

且つや人一旦神の存在に就て證據を擧ぐるの境に達するときは、已に彼等が文明の途に上りたるるときにして、異教神學の小見らしき説を幾分放棄せるの際なり、故にアナクサゴラス、ソクラテス、プラトール、アリストトル、及びシセロ等の證明せんと欲せしことは、異教の古傳皆眞理なりとのとにあらざ、又異教の偶像は眞にして神なりとのとにもあらざりしなり。

次に言ふべきは、人は神の知識に於けるが如く、宇宙の知識に到達せんとて巨大なる誤謬に陥り、而して幾百千年を通して困難なる進歩に因り、以て一層巨大にして且つ正確なる觀念に進行せるといふこと、是れなり、若し此事にして、吾人か神に就て有する知識を無効とするものとせば、則ち凡百の形而下學をも無効とすべき譯なり、知識進歩の各部に於て、常に必ず不明の暗影中に眞正なる知識の中心光を藏す、人の心の漸次の發達と、其教育及知識の進歩とに於て、知識は進歩的に其周邊なる不明の中に其明光の領分を増大擴張す、之と全時に其中心の明光と常に存留す

るなり、而して此進歩を爲すに際して、誤謬、缺點、疑義、批評、及び新規の考究を生し、之と共に知識の曠野を廣大にし、清潔にし、醇正にする、とあるは、是れ其必然の事情のみ、之と全しく神に關する人の智識の進路に於ても、永存して變らざる眞正なる知識の中心光ありて、漸次に不明の暗境に明光の領分を増大したり、而して缺點、誤謬を有せしとはいへ、是れ只他の一切の知識の進歩に伴ふて起りしものと毫も異なるどころなかりしなり。

(三)神の啓示は、單に人が主動的なる智力を以て之を收接したる時にのみ、其知識を人に與ふるものなり、故に神は如何に人に啓示するも、人の神に關する知識は必ず進歩的ならざる可からず、而して啓示に因て與へられたる知識は、此啓示を收接する程度に隨ふものにして、人の教育と發達とに隨て開發せざる可からず、是れ特に神の知識に就て眞實なる而已ならず、各種知識の性質亦此の如きなり、人が物の中に啓示を發見するは、皆に其人の感覺の銳純に關するのみならず、亦其知識の範圍と、智性の方と、靈眼の明否と、及び印象に對する種々の感受力の如何に關するものなり、彼のヘイターミルが觀察者の地位に立つや、

“A primrose by a river's brim
A yellow primrose was to him,
And it was nothing more.”

岸邊に咲ふ逆罌花も

鶯致を解らぬ彼が眼には

黄色の花と見るばかり

何の妙味もあらざりき

是れ實に今日幾多の人が、世界の眞實直正なる見解として稱賛する所のものなり、然れども是れ單に覺官上に啓示せられし淡泊無味の事實を把握せしものに過ぎずして、是より以上何物をも見ざるものなり、然りと雖ども凡そ人たるものにして、此かる乾燥なる事實の外に何物かを見ざるものなく、且つ各人恐くは他人の見るとなき物を見るが如し、今茲に中央に河流ありて、其傍に丘陵森林あるの一地方ありと假定せよ、農夫茲に來るときは、米麥の耕作に適するの地質あるを見る、而して工學者は其水車塲を建設するに適するを見て、心中既に器械の音と、市上熱鬧の聲を聞くなるべし、漁獵者は獸を追ひ、鱒を網するに便なるを見る、地質學者は茲に來りて、地球組織の歴史を讀む、畫工は茲に來て、天地自然の美を觀、之を帛上に寫出し

て以て永久の歡樂に備ふるとを得べし、基督教信徒は此に神の榮光の煥發するを見るべし、蓋し蒙昧の人民も星學者と同しく星宿の天を眺むるに相違なし、然るに前者は單に無數光輝ある物體の懸れる青天を見るのみなれども、後者は尙ほ空間の奥座、不測の延長及び距離、太陽及び其系統、法則の普及の統治等を見る、蓋し各人の觀察する所の「皮相外の或物の實在なるは、ペーター、ベルが把握せる彼の無味なる覺官上の事實の實在なる」と毫も異なるどころなし、デオルヂ、ヘルベルト曰く、人は一世界なり、而して又他の世界ありて之れに伴隨する者なりと、余は寧ろ考ふ、人は其心意か占領したる知識界の數丈け、自己に伴隨する世界を有する者なりと、而して是等の世界たる決して自己の想像の造出せしものに非らずして、實際眞實なるの世界なり、蓋し宇宙なる者は、神の思想と愛の千變萬化なる富贍と充實との發出顯現せる者なれば、宇宙の最も深遠なる眞相と意義即ち神と相關係するものとして世界を知るは、是れぞ乃ち眞の宇宙實體論なり、夫れ人間の教育と發達とに於て一步を轉する毎に、人の眼前には一新世界の開示せらるる者なり、故に人の神の啓示よりして得る所の知識は、其人の收接力と能力とに關係するなり、人の次第に進

歩して、其靈能と收接力と漸を追て擴張せらるゝや、人は毎に啓示の中に新意義を發見し、此によりて神の榮光の新通路彼れの眼前に開くなり、人の進歩的成長及び發達は、恰も彼のヤコブの梯子の如し、人は之によりて知識の頂上より頂上に上り、其眼界愈々擴張して、遂に茫々たる蒼天と儼乎たる神の面前とに至るなり、或時一女兒あり、人に謂て曰く、兒思ふに星辰は神の榮光をして通過せしむべき天上の穴なるべしと、蓋し此時彼女は穉痴なる心意の中に、太古人類の幼稚なりしとき其成人が創造したるが如き鬼神談を創始しつゝありし、夫れ小兒及び幼稚なる人類の懷抱したる神の概念より、智慧と愛との全能の靈としての、神の嚴肅なる觀念に至る迄、神の知識に於ける進歩の速力は、毫も彼の小兒と蒙昧人の概念よりして、今の星學者の知識に至れる、星天の知識進歩の狀に異ならざるなり、蓋し星學の其中より發見せられたる星天は、幼稚なる人類の眼前にても、天文學者の眼前にも、皆一樣に顯はれたり、而して後者は前者よりも適かに許多の事物を此同一の天空中に觀たるものは、他なし、其收接力と能力との適かに廣大なりしが爲なり、之と同一く、萬有の本性と進路に於ても、人類の本性と意識的經驗に於ても、神の原始的啓

示は、蒙昧人及び哲學者に對して毫も差異あらざるなり、蓋し其一人をして啓示の中に、他よりも多くの事實を見るところを得せしむる者は、只其教育と知識との能く發達したるが故のみ、

故に神の高尙なる啓示は、人の之を收接するに差支なきに至るまで猶豫せられざる可からず、是れ必然の事なり、夫れ小兒には加算を習はしむる前に當て、比例の問題を解説し、若くは利息を計算するとを教授すると能はず、最下等野蠻の種族には、電器或は蒸氣機關の組織を説明すると能はず、速記器若くは裁縫器械は、彼等に對して無益の寄贈物たらん、何となれば彼等は之を使用すると能はざればなり、嘗て亞弗利加に在りたる一傳道師、一挺の鋤を輸入して、數人の土蠻に之が使用法を授けんとて、非常なる苦心を爲したり、然れども彼が再び彼等を訪問したりしときは、計らざりき、彼等は其鋤を使用せずして、却て之を地に植へ、赤色の繪畫を以て之を塗粧し、其下に俯伏して禮拜を行はんとは、夫れ器械の發明は、之を必要とすべき進歩の度に達する迄は人に對して用なき者なり、故に一器械の發明ありたるとき、首を回せば、同一の發明數世記前に在りと雖ども、世人の之に注意せずして全く忘

失せられたるの事實を發見すると往々にして之あり、之と同じく神の啓示も亦、其當時の人民の受納力の程度に順應せざる可からず、而して進歩的ならざるを得ず、蒙昧の種族に道を傳へんとする教師等は、皆其土蠻に靈性上の純潔と聖といふ基督教の觀念を傳通するの困難を發見せざるはなし、且つや聖書に記述せる啓示も、亦此の進歩的方法を以てせられたるにあらずや、イスラエル人の埃及を逃走せしに當てや、其有せし思想の形状、即ち異教主義と奴隸主義との爲に形成せられ、而して、其嚮導者と豫言者の教へたる一神教的訓誨にも其臭味を帶はしめたる一種の思想の、全く破壊され果りたるは、殊に長久の手續と堅忍なる勞苦とを経たる後にてありたり、其受納力に超絶せし眞理と眞理の適用との啓示は、之を變化し若くは濫用するとなくして、之を受納するの能力あるまで其教育を進め、其知識を發達せしめざるべからず、而して此に至るまでは則ち之を猶豫せざるを得ざりしなり、故に高等なる啓示の元素も、之を暗昧、邪惡なる彼等の心意に授くるには、諸種の制限、命令、記號、予表、禮文、儀式を以てせざるを得ず、蓋し此等のものは其目的を達せば復た用いるところなきものなり、之と同じく、我主基督は使徒等に告げて言ひ玉へ

り、我なほ爾曹に多く語る可きこと有ども今なんぢら曉ことを得ずと、是を以て吾主の出現も、亦種々の永々しき準備を経、時已に満ちて、世は新しき啓示を受納するに適し、從來舊約の提挈、束縛を去りて、基督より送られて、凡ての人の上に濺がれたる、見る可からざる神の靈の指導に放任し得るに至りし迄猶豫せられしなり、
 (四)神の啓示は、之を受納し且つ解釋する所の人の心意の作用なくんば、則ち毫も知識を人に與ふると能はずと云へる事實は、聖書中に記述せられたる神の啓示の進路の上に明光を照し、而して誤解を正し、又某の反對説の乖理なるを證明するものなり

神は直接に人の覺官に自己を啓示すると能はず、世人時として問を發するとあり、曰く、何故に神は吾人をして疑訝の念を抱かしめざる爲めに、一層明晰に自己を啓示せざるやと、此疑問たる、之を尋て其基礎に至れば、則ち神は吾人の覺官に自己を啓示すべしとの要求を含むとを發見すべし、然れども神は靈なれば、直接に人の覺官に啓示すると能はずして、只人の靈性にのみ自己を啓示すべきのみ、未だ神を見しものなし、神は只人の合理的靈性が頼て以て、其表現せる神を認知する所の媒介

として、有形的結果を通して自己を顯すべし、只人の心意が頼て以て神の思想を讀會する所の記號、表章として有形的結果を通して自己を啓示すべし、吾人は又神の啓示は、之を收接する人の發達と教育の度に順應せざるべからざるを見る、故に一人たび獨一、絶對の靈として神を識認するに至るまで其教育の度を高むるときは、忽にして消滅すべき表章、記號、及び儀式、制度を通して啓示せらるゝこともあるべく、或は某の重要な神の性質を啓示すると同時に、未來に於ける一層高大なる啓示を望ましめ、心を將來に向はしむる所の歴史的事蹟及び豫言的感化によりても、啓示を授けらるゝことあるべし、

例へば、舊約書中に於ける啓示の數條を思考せよ、嘗て荒野に於てイスラエル人の行旅せるとき、或る危急窘迫のときに際して、モーセは祈禱して曰へり、われ爾に求む願くは爾の榮光をわれに顯はせと、翌朝に至りて、シナイ山の峯頂に、彼の祈禱は應答せられたり、而してエホバの榮光は彼の眼前に來れり、然れどもモーセは岩石の孔罅中に伏して何物をも見ざりし、何となれば神言ひ給ひたればなり、曰く、爾我面を見ること能はずと、彼は唯一の聲を聞けり、曰くエホバと、即ちイスラエルの契

約の神の意なり、曰く、エルト、蓋し全能の意なり、而して又恩恵、善良、久耐、真理、正義などの靈的及び道義的品性を、其聲によりて悟れり、而してモーセは將に散せんとするの榮光を見て、之に俯伏し以て崇拜せり、是れ神モーセに啓示するに、神の靈なると、神の直接に人の覺官に啓示せらるゝ、能はざると、及び神の榮光は、只靈性と道徳性を有する實在者のみ知るとを得べき、靈性的及び道義的なる品性と能力に在るとを以てせしものにあらざや、彼の聖所及び聖殿に於ける聖の聖なる處も、亦其意義に於ては全く上の道理に基因せし者なり、蓋し其聖所には、神が人に恩恵を顯はせし所の恵の座なり、然れども坐前に幕ありて之を遮蔽せり、故に何人、と雖ども決して幕内を窺ふと能はず、幕裏は寂寥として、祭司長を除くの外は一人も之に入るとを許さず、而して祭司長と雖も、一年一度の外は決して之に入るを得ず、而して之に入るときには、自己と一般人民との爲に贖罪の供物の血を携ふるなり、而して神は見るべからざる靈なる實在者として、闕然として獨り其内に住玉へり、然り而して是れ實に絶へずイスラエル人に教ふるに左の如きことを以てせるものなり、曰く、神は靈なり、曰く、覺官に神を啓示する所のものは是れ神を遮へざるの幕たる

に外ならず、曰く、神は形像を以て表現せらるゝを得ず、又見るべき形骸の下に禮拜せらるゝを得ず、曰く、物質的宇宙は神の手工たるの點よりしては、素より其中に神を顯はすに相違なしと雖ども、宇宙其物は亦是れ神を遮へざるの幔幕たるに過ぎずと、是れなり、蓋し未開の民に偶像禮拜の愚を知らしめ、神殿に入る毎に、神は靈なるが故に、禮拜者は靈と眞理とに因らざるべからずと云ふとを教ふるに於て、勢力ある、恐くは此表號に勝るものあらざるべし、

人時に或は想像する者あり、曰く、若し神にして絶へず萬人の前に奇蹟を行ひ、以て自己を啓示したりし者なれば、則ち古より一人と雖ども神の存在を疑ふとを得ざりしならんと、然れども奇蹟は只人の覺官にのみ表現する者なり、故に萬有通常の行動と同しく、奇蹟も亦神を啓示すると同時に、神を陰蔽する所の幔幕となる者なり、去れば心意が此幔幕の背後なる、視る可からざる靈の神に至らん爲めには、宛も萬有の可覺的現象を通過するが如くに、又奇蹟をも通過せざる可からず、而して若し奇蹟をして彼の夏日の驟雨及び虹等の如く普通の現象ならしめば、則ち奇蹟も亦雨及び虹等と同しく人の注意を惹くとなかるべし、又人時に或は思考する者あ

り、曰く、若し神にして聖書に記述するが如き自啓を以て自己を啓示する者ならば、則ち之に就て怪疑の生すべき理由なきに非らずやと、然れども自啓の時と雖ども預言者は現に之を見たるに非らず、彼等は只表章、記號を見たるのみ、而して其表章と記號とを通過して、彼等の靈の眼は、單に靈としてのみ視らる可き者を視たり、イゼケルは旋風と包みたる火焰と閃々たる電光と共に北方より來れる雲を見たり、而して其琥珀色の明光中に水晶の天を包めり、天は驚くべき高さなる綠玉の車輪を以て、四箇のチェルビムの上に在り、車輪は閃々たる光を以て常に運轉し、而して其車輪には生靈の印象あり、天上には碧玉の寶座あり、寶座の上に一箇の人を見たり、扱若し斯の如き異象にして、毎朝北方より來りて吾人の目に觸る者とせば如何、斯若天は毎朝東方より昇る所の太陽よりも一層多く神を啓示すべき乎、將た夜毎にと吾人の頭上に旋轉せる數千萬の星辰を宿せる廣大無邊の蒼天よりも一層多く神を啓示す可き乎、嗚呼學術が物形的宇宙其物の中に發見しつゝある勢力は彼が如きなり、動の速力は彼が如きなり、實在者の宏大、美麗にして、幾多系統の莊嚴にして相調和せるは彼が如きなり、生靈を以て印象せる能力、理性の表彰神の表現は

彼が如きなり誰か謂ふ、覺官に對する神の啓示にして之に勝るものあるべしと、吾人は物の性質上、言語を通過せる神の啓示には或る制限あるとを發見するなり、或人は必ず思はん、若し星を以て文字と爲し、神は愛なりと云へる者の天空に記載せらるゝとあらば則ち信仰に對して大なる祐助なるべしと、吾人は斯人に向て問はん、如何なる言語を以て之を記載すべきやと、而して又此人に問はん、若し右の如き組織を爲さんと欲せば、地球を以て宇宙の中心とし、凡て他の世界は地球の爲に存在せるものなりとの誤見を起さしむるとはなきかと、今若し右の言語記述せられたりと假令するも、是れ只星辰の秩序整然たる配置と異なることなけん、故に其中の眞義を讀取せんとするには更に心意を凝らし、觀察を下さざる可らず、而して其整然たる配置は吾人到る所に之を見る、只夫れ基督耶穌の生存と、其身を殺したるの愛とに因て神の顯はしたる愛の啓示は、實に測知すべからざる深遠の意味を含めるのみ、

夫れ凡ての宗教家が常に確信する如く、神は言語に因て自己を啓示する者なり、神の恩恵に就て富贖の經驗を有し、神と親交して靈の眞義を思想と生活とに開發せ

られたるの人は、皆其認知したる者を証言す、夫の預言者及び使徒等に至ては、一層深く神の感化を受け、以て神の眞理を世上に宣傳したり、吾人は既に、婦女は母たる愛情の作用に因て自己を啓示するに至る迄は、如何に工夫を費すも、言語に因て其母たるとを自己の見女に啓示すると能はざるを知れり、之と同じく預言者及び使徒等の言語も、神の作用に因て其言語の意義の明示せらるゝ迄は、人の耳朵に觸るゝも何の意味なけん、故に彼の預言者が吐露する所の言語を聞きて、之を曉解せんと欲する者は、先づ神の恩恵に關する自己の經驗若くは萬有に於ける神の作用、若くは人類の歴史、殊に基督に於ける神の作用の知識によりて神を知らざんばあるべからざるなり、

フオイエルパツハは神の啓示に異論を唱て曰く、啓示は、特別なる時代に於て與へられたる一箇の限定せられたる啓示たらざるべからず、例へば神は何年何月に唯た一度自己を啓示せりと云ふが如し、且つ一般の人類に對し、凡ての時代、凡ての場所、凡ての人に對し、及び種族に對して自己を啓示すべからずして、只た或る箇人に對して自己を啓示せざるべからざるなりと、

夫れ啓示なる語の一層廣濶なる意味に於ては、神の啓示は即ち神の作用に由れる啓示にして、凡ての場所、凡ての時代に行はるゝものなり、而かも特別の時代、特別の人に對する特別の啓示は、此語の中より除かるには非らず、彼の聖書中に記述するところの、基督に由て成遂したる啓示は、凡ての人類歴史を通し準備の段階を經過して、進歩し來り、而して聖書により、教會により、及び凡ての人の上に濺かれて永く止まれる聖靈によりて一般人に擴布せられ、且つ永く世に存する者とはなざるゝなり、

(五)以上人の啓示の受納力に關する吾人研究の結果は、則ち世間普通の套語、即ち人が自己に就ての意識を充分に發達するときは、其の中に神に就ての意識を包含すとか、神の意識は自己の意識の背面バックグラウンドなりとか言ふ如き語に、眞正の意味を與ふるものなり、夫れ人の自己最高の資質及び其能力を自覺するは、只人の神を知り、神と自己との關係を知るの時に在るのみ、之を反言すれば、人の自己最高の資質と能力とに就ての意識は、則ち其中に神に就ての意識を包含す、人の感受官上に活動する外部の世界は、自己を人の意識に啓示す、然れども外界に就ての意識によりて、人は自

己の之を知覺し、其中に生存し、其上に活動する者なることを知り、又自己が種々の感性と能力とを有して物界に關係せるを知る、然り而して若し外界にして其感受官上に活動し、以て自己を人に啓示するとなかりせば、則ち人は右の如きものとして自己を知るとなかるべし、之と同じく、神は人の靈魂上に活動して、其意識に自己を啓示し、人も亦自己に自己を啓示す、人は神を知り、神の面前に生存し、神と關係して作用するものとして自己を知る、若し神にして人の意識に自己を啓示せずんば、則ち人は自己を覺知すると能はざるなり、故に吾人は言ふを得べし、人は自己を知り、充分に其自覺心を開發するによりて、外界を知り、又自己を知り、自己の意識を充分に開發するによりて、神を知ると、吾人は又言ふを得べし、人の外界に就ての意識と、神に就ての意識とは、其人の自己に就ての意識の背面に在りと、故にアレキサンドリヤのクレメントは曰く、最高、最大の知識は自己を知るに在り、何となれば人若し自己を知るときは、則ち神を知るべければなりと、
此の如く看來れば、先に掲けたる套語は、皆凡神教的の臭味を脱するものとなるべし

第五章

人の神の啓示を收接し、及び之に由て神を知るべき能力、

人は靈的感性を通過して神の印象と勢力とを收接し、以て其意識に啓示せられたる神を知ると、猶ほ有形の世界及同類の人間を認知するが如し、廣義を以て之を言へば、意識なる語は主觀的並に客觀的意識の兩者に通用すべし、故に意識の目的物は或は物質、或は人、或は神たるへし、其主觀的形狀及び作用に於て、心意は自己が此形狀、作用に對する不變の主觀たることを知覺し、其客觀的意識に於ては、覺性上に表現する所の覺性的物体を知覺す、若し一人ありて言語若くは行為に由て覺官を攪動し、之と同時に靈的感性を通して合理性、自由意思、愛及び他の靈的資性の印象を爲すときは、心意は之に反應し、以て啻に其感覺を通して其形骸を知覺するのみならず、又其理性若くは靈魂の印象を通して、合理にして自由なる有心的實在者を知覺するなり、人は「我なる者と全しく、爾」と云ふ者を知覺す、而して之と全しく超物的及無限的なる者に對する宗教上の印象に於ても、心意は又反應

して以て其意識に啓示する所の神性を具ふる實在者を知覺するなり、吾人は今より、人は神の啓示を收接し、及び之に由て神を知る可き能力を有するとを説示せんと欲す、

(一)人に此の如き能力あるとは凡て宗教の豫想する所にして、一般世人の證據する處なり、曰く、吾人は神の啓示を收接し、之に由て神を知るべき能力を有すと、是れ此能力の人間心意の一能力たる確證にあらずや、

若し人類宗教の目的物にして果して何等の實体を有する者とせば、則ち人間は神の啓示を收接するとを得て、之に由て神を知るとなる可からず、夫れ凡ての宗教は神と人との交通を豫想するものなり、即ち人は經驗を以て神を知ると預想し、神は意識に於ける或る作用、勢力及び印象に由て人に自己を啓示する者と豫想し、人は此作用の結果に於ける其經驗に由て神を知ると預想するなり、ヘーゲル曰く、宗教の實体は新奇なる者として人に受け入れしむると能はず、若し之を爲さんと欲せば、其背理なる、尙ほ印刷せる聖書を嚙ましめて以て狗子に靈魂を吹き込まんと欲するが如しと、夫れ宗教の目的物果して實体を有するものとせば、則ち人には彼

のヤコブが「フェルモンフトシ」即ち理性官能と稱する者ありて、自己を意識に啓示するところの神の勢力に對する靈魂の感性及び啓示に因て神を知る可き能力の固有する者なかる可からず、倘し然らずとせば、凡ての宗教的感情、信仰及び作用は全く主觀的に歸して、毫も眞實の目的物を有せざるに至り、而して世界の宗教は全く幻影となるべし、然れども宗教なる者は人性普通の特質にして、其根底を人類の本性に置く者なり、故に若し宗教の原質たる凡ての信仰、感情及び行爲にして悉く幻影と化せば、則ち正則に使用せられたる人の本性上の能力は忽ち不可信のものとして廢棄に歸し、而して一切の人間知識の眞實性は崩壊するに至らん、之に反して宗教果して幻影に非すとせば、神は之が目的者として人の意識に自己を啓示し、人は靈の感性を以て神の作用と勢力とを感受し、神の啓示に由て神を知るの能力を有するものたらざるべからず、

(二)人間智識の眞實、及び其知識力に就ての眞正なる概念は、必らず其中に神の啓示を收接し、之に由て神を知る所の人の能力を含有せざるを得ず、此能力あるとを否定するは、凡て人間智識の眞實性の否定を含蓄するものなり、凡て知識の眞實に關

する至大の難點は、主觀的印象より客觀的實體に至る遷移に在て存す、而して此困難は他物を知るの時に於ても、神を知るの時に於ても、共に其度を全くせり、否、此遷移の際に於ける心意の眞實の作用は、必ず神の存在を意味す、而して神の存在を許さざる以上は、之に對して道理ある説明を與ふると能はざるなり、語を換へて之を云へば、神の存在と云ふとは、之を合理的とするも、學術的とするも、彼の意識の如き、及び覺官の印象の集合の如き單純なる者よりも、眞實の知識に對しては一層必要なるものなり、此道理たる以下の攷究よりして明白なるとなりとす、

形而下の學術は其基礎を自然實體説の上に置く者なり、即物質、動、分子及び精氣の眞實なると、分子力の精確なると、凡て五官に表現せる實體の眞確なると、觀察せる事實より歸納したる超覺的實體の眞實なると、及び凡て是等の物の交渉、關係の眞確なることを自定し、又萬有の原因、不變、不斷の諸法、若くは凡て思想の準繩となるべき數學の公理、若くは他の原理を自定す、而して是等の予想をば、經驗に由て證明せられたる者として承諾す、吾人は是等の原理に準據して推理するの安全なるを経験によりて發見し、以て絶へず觀察せる事實に之を適用す、然り而して此自然實

躰説よりすれば、有神論と形而下の學術とは全く相契合するなりとす、然れども哲學は萬物の究竟基礎を攻究して形而下學術の進むと能はざる點に進む、故に哲學は理性の一層深遠なる真理を識認して以て理性中に自然實躰説の根本あるとを顯はす、之を以て哲學は自然實躰説の意義を擴め且深め、以て的當に合理的實躰説と稱す可き者を造らしむ、此點に於て哲學は形而下の學術と相反對する者に非ざる而已ならず、形而下の學術が疑はずして、信賴せる所の自然實躰説の合理的根據を現はすものなりとす、斯くの如くにして吾人は主觀的印象より客觀的實躰に至る遷移に於て、心意の眞實の作用を發見するなり、

覺官的知覺は第だ主觀的感覺の知覺なる而已ならず、其中に自己を啓示する物躰の知覺なり、夫れ最初に一物ありて感官を經由し、吾人の上に活動し、以て意識の中に啓示するに非ずんば、則ち官能的知覺なるものあると能はざるなり、而して人は其智性的反應に因て、啓示せられたる物躰を知覺し、之と全時に自己が啓示を収接したるを知覺す、此交渉に於て物の知覺と自己の知覺とは、全一なる心意的作用に於て決して分離す可からざるものにして、甲の知識の確實なるとは乙の知識の確

實なるに全し、若し知覺す可き物躰なくんば、則ち知覺する所の主觀あらず、知覺する所の主觀あらずんば、即ち知覺すへき客觀あらざるなり、

且つ一の物躰にして斯く意識に啓示するときは、只だ覺官的知覺の之を知覺する而已ならず、合理的直覺力も亦之を知覺す、蓋し知覺的直覺力の中には暗々の裡既に合理的直覺力を含むものなり、左れば全一なる作用に於て吾人は覺官の表現と理性の形狀とに因て物躰を知覺するなり、人は理性の直覺力に因て、始めある者と變化ある者とは必らず原因を有す可きと、及び各の作用は作用者を顯はし、各の現象は實在者を顯はすとを知る、故に人は是等理性の形狀に於て、凡の表示せられたる物躰を知覺し、各の變動に於て原因を知覺し、各の作用に於て作用者を知覺し、各の現象に於て實在者を知覺するなり、人は只混沌、無質なる者、即ち主觀的なる印象を知覺するものにあらず、自己を印象中に啓示して以て、統一と實質とを之に與ふる所の實在者を知覺するなり、固より人の注意は其知覺する物躰の上のみありて、其合理的及び知覺的直覺力を自ら感知せざるなり、然れども是等の兩者は冥々裡に其知識の中に在るものなりとす、人は官能の表現と共に理性の形狀に因て物

躰を知る、

此の如くして意識に於ける主観的印象より客観的實躰に至るの遷移は安全に實行せらるゝなり、左れば知識なる者は其初め實躰的にして、實在者の知識なり、客観と主観は皆な實在者として知らるゝなり、意識中の現象即ち顯現は、其表現したる所の實在者より分離せらるゝものにあらずして、反て前者は後者を以て充實せらるゝ者なり、要するに意識中に現はるゝものは實在者其物なりとす、(有神論哲學的基礎一五二、一五三、一五八、一六六)

夫れ知識は此の如くに遷移し、而して其物躰は覺性を通過して表現せるものなるも、官能を通過して肉躰的に表現せし人間なるも、靈的感性と其能力を通過して表現せる人間の靈的有心性なるも、或は靈にして特異なる宗教的感性と能力とを通過して啓示せられたる神なるも、均しく皆知識として實在するなり、心意が此等の知識を混沌、無質の狀に捨て置くこと能ざるに至ては、彼此毫も異なるどころなく、眞實に其中に啓示せられたる實在者を認識し、其意識に於ける表現と理性の形狀とに因て物躰を知るなり、

以上の道理は單に實在者に就て眞確なる而已ならず、亦其關係に就ても眞確なり、如何なる物躰と雖ども單獨に表現するものに非ず、必らず常に他の物と關係して以て表現するなり、夫れ物躰は初め只漠然として人に表現するのみ、然るに吾人の注意之に加はり、初めて之を認知し、區別して以て其關係を發見す、是等の關係と統一は單に心意の主観的概念にあらずして、心意に對する客観的實躰なり、心意は決して是等を創造するものに非ず、只此等を發見するものなり、吾人が凡てのものを其相互の關係に於て知るは、是れ只凡ての物躰が關係をなして存在すればなり、譬へば人類なる者は名目論者の教ゆるが如く、只名目を以て知られたる主観的概念に非ず、實躰論者の主唱する如く、概類的なる巨人にあらず、何となれば是等は徒に解得すへき意義を有せざる言語たるに過ぎざればなり、然らず、人類とは類族の關係をなして生存せる凡ての人間より成立する具體的實躰なり、若し人類にして彼の今日僅に化石の中に其踪跡を止むる或る廢絶の動物の如く、其發達を終結したりとせんか、苟も類族の關係をなして存在する人間の集合躰を知覺するを得るのみに對しては、人類も知覺の具體的物象たるへし、苟くも總稱名辭を以て示された

る概念は、人、馬、石、遊星等の如く、或る關係を有する或る實際の資性と能力とを以て存在する或る確定なる實在者を顯はすか、若くは堅徳、動力等の如く、實在者の中に客觀的に實在し、抽象的に人の思想に思考せらるゝ、或る實際の資性、能力及ひ行爲を顯はすか、若くは距離、方角、過去、未來、附屬、類似等の如く、實際實在者が客觀的に互に有する關係を顯はすか、此數者の中何れか其一に居らざるを得ず、故に是等は單に主觀的心理の概念及び名稱にあらすして、實在者概念及び其眞實なる客觀的資性、能力、行爲及び關係の概念なりとす、

此を以て見れば、關係に於ける物體も亦官能の表現と理性の形狀との兩様を以て知らるゝなり、吾人は思想に於て表現する所の物體を認知し、分別し、以て其種々の關係に於て統一せるとを發見す、此運用に於て吾人の思想は理性の必至的原理の支配する所となる、而して又一方に於て、外界の物體は、其關係に於て是等理性の原理に従ひ關係して存在し、及び活動するを見る、故に是等理性の原理は思想の法則たると同時に又物體の法則たるなり、吾人は此法則に従ひて吾人が觀察する所の者よりして觀察せざる所の者を推測し、而して后吾人の推測は事實に由て確

定せらるゝを知る、故に凡ての思想を支配せる所の理性の原理は、絶へず觀察と經驗の確定する所となりて、主觀的に必要なるが如く、亦客觀的に眞實なるを見る、形而下學は是等の原理が皆眞正にして其思想を支配する如くに、亦其物體を支配すと云へる假定の上に其基礎を置けり、而して其偉大にして底止する所なき發明は、絶へず物體を支配する所の者として、又は之に由て宇宙の組織せられたる所の原理法則として、是等原理の眞正と其客觀的に實體たることを確定して止まざるなり、而して吾人は是等の原理は宇宙の本性且つ其秩序的作用及び進化の理法にして、宇宙の形成せられたる模型、一切事物の元精及び可曉解的意義たるを發見す、故にアリストートルは是等の合理的原理若くは觀念を稱して、事物の元精即ち事物の事物たる所以と謂ひたり、

且つや一切の物を支配する此等の原理なるものは、抽象思想として虚空に浮遊する非有心的のものたるべからず、此等の原理たる、一切の思想を支配する普遍的なものなれば、徒に觀察者の心意に於ける主觀的の信仰たるべからず、此等の原理たる、宇宙の本性なるが故に、宇宙に超越し、而かも又宇宙に活動して、超絶理性に於け

る根本、永遠の合理的原則、理法、理想、及目的を絶へず進歩的に空間と時間の形状に於ける有限の實在者の中に顯はすところの一大理性の啓示たらざるべからず、絶對的理性の中に於ては吾人遍滿の實在を見る、而して彼の物形的及び靈的なる全宇宙は則ち之が啓示たるに外ならず、故に有限の事物に啓示せられて以て其合理質を組織する所の合理的原理、理法、理想、及目的は即ち絶對的實在者が自から現はれ、又自己が宇宙に活動する絶對的理性なることを示す所の現象なりとす、蓋し右の意を以てせば、人は右の諸物の現象と云ふとを得へし、而して現象の中に自己を顯はし及び啓示するものは即ち實在者なり、

絶對的實在者の存在は又理性の必然的直覺力を以て知るを得へし、苟くも人其身邊の物象及變化に就て多少深遠の知識を得るときは、之と全時に凡て存在する所の事物の中に顯はるゝアンソニシ、ロンド、ノール、コンヂヨニシ無碍アンソニシ、凡碍なる者、即ち始あらざる者存在すと云ふ確信を自己の中に發見せざるを得ず、而して此確信は只主觀的印象にはあらざるなり、若し果して然りとせば、客觀的に眞實なる者として存在せざるに至らん、吾人若し自己と外物の實在者たることを知らば、則ち絶對も亦實在たらざる可からず、若し知

識にして實体的に始まるものとせば、絶對的實在者の知識に至る迄實体的として進まざる可からず、自覺を以て自己を知り、覺性を以て外物を知るには、吾人其理性の之を知る所の形状を以て之を知る、此の如く宇宙を知るには、吾人或絶對なる實在者に屬するものとして理性の之を知る所の形状を以て之を知らざる可からざるなり、

心意は合理的直覺力を以て宇宙の眞理を知り、又凡て思想と行爲の理法として之を知る、心意は眞善、全及び理性が眞價を有すと鑑定する福と云ふ根本的の概念を有す、蓋し是等のものたる普通的にして、理性の光によりて是等を見る所の人に超絶するものなりとす、人間の理性は混沌、無質の中に是等を放棄すると能はずして、之を以て普遍絶對なる理性の原理、理法、概念と爲さざるを得ず、吾人宇宙を攷究するときには、其中に吾人が既に自己の合理的直覺力と、合理的存在者たる自己の本性中に發見したる眞善、全、福の概念顯はれたるを見る、故に理性は宇宙、即ち萬有及び人類に於て普遍絶對なる理性の存在と指導とを發見す、理性の形状に因ては、宇宙は神に屬して神を啓示せる者として知らるゝなり、故に學術上の知識は神の知識

と相分離すると能はざるや明白なり、學術は其本質上明々地に、若くは暗々裡に、宇宙の根據として必ず絶対の理性なる神を承認せざる可からず、而して凡そ學術上結論の眞理なるは一に此に依據せざればならず、

以上の説は則ち合理的實体説なりとす、此説に於ては、下の如きカントの説を包容するの餘地を存せず、曰く現象は全く實体と全然相離れたるものなり、曰く是故に後者は其現象と同じからずと云ふとの外は一切知る可からざるものなりと、之に反して、吾人が物象に就て知る所のものは、則ち其存在の元精と、合理的知識に對する其元精的意義とを具へたる物体其物なりとす、成程吾人の心意に優れる心意は、物象の中吾人の知覺する能はざる實体と眞義とを知覺することあるべし、然れども吾人の之を知る限り、其物は吾人が之を知る所の物体其物にして、眞實の關係を有して存在する物体たらずんば、如何に優等の存在者なりとも、合理的存在者たる以上は、其中に於て之に反對する所のことを知ると能はず、而して吾人は其知られたる物体が、其形体たり、其吾人自己たり、其他の合理的にして有心的なる人間たり、若くは其神たるに關せずして、眞實に物の實体の智識を有するものなり、

是に由て見れば、人が神の啓示を収接し、又之に因て神を知るの才能を具備すと云ふ證據は、合理的自由の人たる其本性、及び斯の如き者としての其作用及發達の中に發見せらるゝものと云ふべし、ヤコビ曰く、理性を具有すること、神を知ることとは一なり、尙ほ神を知らざること、禽獸たること、一なるが如しと、故に吾人少くとも謂ふとを得へし、有心的存在者たること、神の示視を収接し神を知るの能力を有すること、一は一なり、其能力を有せざること、非有心的なること、一は一なりと、

然れども此能力は、理性の乾燥なる光の中にあるところの純粹なる智力の作用にあらずして、又人が神を知覺する殺風景の合理的直覺力に非ず、覺官的の知覺に於て、知覺的直覺力と共に感官を経由して外部の作用の収接あるが如く、神の知識に於ても、亦直覺と共に収接作用あるなり、即ち神が依て以て自己を意識に啓示する所の合理的及び靈的感性あり、而して理性は其直覺力を以て之に反應し、以て神を知覺するなり、是れ則ち所謂理性官、神性官、及び神性意識にして、夫の無助の理性に依頼しては何人と雖ども神を知るとなしと云へる神學上の語は、明かに之を認容

せるものなり、之と同じく、無助の理性に依頼しては、何人とも外界を知るとなしと云ふも亦誤謬に非ず、夫れ外界は直覺力及び思想に於て、知覺認知せらるゝ前に、感官を経由して吾人に啓示せらるゝものなり、神も亦直覺力及び思想を以て認知せらるゝ前に、合理的即ち靈的感性を経由して自己を吾人に啓示するものなりとす、

且つや一方に於て、人間の心意は何にても外部より其上に印象するものを差別もなく輒く受動的に收接するが如き無色の磐面にあらず、若し果して斯の如くならば、則ち心意は全く諸種の印象の眞偽に對して無關係なるべく、而して其間に辨識をなすと能はざるべく、又確然として眞理を知ると能はざるべし、何んとなれば之を檢討すべき合理的標準なければなり、之に反して吾人の本性たるや、眞なる者は偽なる者と全然相違せる有様を以て吾人の合理的本性に感銘せらる、故に全然たる無傾着を以て學術的攷究に必要とする、現時の文華者流イノミコツムの説は常に合理的たる人の本性に反對せる虚偽の思想なりとす、左れば理性の變化なき形状と、其一般原理と法則とに於て萬物を觀察する心意に取りては、二個の直線は一の場所を包圍

すとの命題と、二個の直線は一の場所を包圍すると能はずとの命題とを見て、毫も其矛盾を意識するとなく、冷然平氣に之を信受せんとするも出來べからざるの事なり、夫れ人は合理的に造られたる者なり、故に理性の原理、理法及び其不變の形状を有する凡の物を知るは是れ正則的なり、而して合理的たる人間の本性に契合するものなりとす、左れば知識の唯一目的物として有形物を認め、而して其唯一の根元として覺官を認むる今日の傾向は、是則ち不正則の者なり、而して是れ人間の本性に反して健全なる状態より墮落したるか、若くは未だ適當の發達を得ざるか、此二者の爲めに彼れが不正則の状態に在るとを證明するものなりとす、神の人に自己を啓示するは、是れ人をして其靈的包圍を曉知せしめ、之に因て彼が合理的及び靈的の本質を有するとを知らしめ、且此本質は不正則及び奇怪なるものにあらざして、彼れの正則の状態及び最深なる性質則ち本性たることを悟らしめんが爲めなり、抑も人が自己の中及其包圍の中に靈的及び超物的なる者あるを知らざるとこそ不正則奇怪と云ふべけれ、之を知るを不正則とか奇怪とか謂ふべき理由なし、是に由て是を觀れば神の啓示を收接し、又之に由て神を知るの能力あるを否定す

るは、偏に人の知識と智力に就て虚偽の思想を有するに基因するものにして、論理上其中に凡て人の知識の眞實の否定を含むなりとす、
 (三)人は有心者及び靈として神に育る者なり、之によりて人は神と交通し、又神に就て知識を得、

ゼレミイ、タイロルは種類の解説の必要を説けり、眞に然り、吾人にして若し某の存在者と意識的及び智力的の交通を爲さんと欲せば、吾人は此實在者と同類なる者たらざる可からず、兩者の間に此の如き交通の存する爲めには、必ず共通なる合理的及道義的本性、互に相訴へ得可き共通なる眞善の原理、行爲に對する共通の感情及び動機なかるべからず、苟も此の如く共通の本性を分有する以上は、互に相理會して以て意識的交通を爲すを得べく、苟くも此の如く分有せざるときは、思想と雖とも經過すること能はざる大溝渠を以て互に相分離せらるゝなり、今夫れ人は萬有と靈魂の二者に籍を列するが故に、二者共に人の上に活動して、其意識に之を啓示することを得、然るに人は木石の上に活動するとを得ると雖とも、木石は非情物なるが故に、人は之に對して自己を啓示すると能はず、海燕及牡蠣の如き下等動物

に於ては、人能く彼等に對して其感覺を惹起すへき活動を及ぼすとを得べしと雖とも、彼等は智力なきが故に、明かに彼等をして自己を認めしめ、何等の智力的交通に由て彼等に自己を知らしむると能はず、且又人は其狗馬及び他の二三高等動物とは或交通を爲すとを得べし、何となれば是等は幾分か人間と同じく智能情慾、願望及び行爲の動機を有すればなり、然れども右の動物は直覺的理性、自由意志、合理的、道義的及宗教的感情即ち有心者固有のものをも有せず、左れば有心者と非有心者とを分割せる線路には、濟渉すへからざる溝渠のあるありて、彼の動物より吾人を分離するなり、故に狗は小兒に伴隨して校舎に出入するとを得べしと雖とも、彼は數學を習ふの苦心と、學業上達の快樂とを小兒と共に分享すると能はず、彼は其主人に伴隨して公拜所に行くべしと雖とも、會堂の石柱と全しく、祈禱の意味に就て無感覺なり、狗は其分割する所の溝渠の前岸を見て、以て自己の無智を悟ると能はざる而已ならず、亦其分割する溝渠の存在を知らざるなり、一切の獸類は自己が乗算表を知らざることをも、又自己が神を知り、神を禮拜する能はざるを知らざることをも意識すると能はず、(有神論の哲理的基督五三) 七五五四、一八頁等參觀)

若し人にして毫も神と似たる所なく、又一も神の性質を分有するとなくんば、則ち又経過す可からざるの大溝渠は神と人との間を横截し、而して人は凡て神に就ての知識を得るとなく、又自己が神を知らすと云ふとを意識することなく、及び己れが神を知り、神を拜するの能力なきとをも意識する能はざるべし、若し充分に他人の心事を忖度せんと欲するとき、則ち自家の性行他人と相類似するとを要す、其性行にして迭に相抵牾せんには、其牴牾の度に從て相知らざるの度を生ずるなり、茲に人あり、生平酒に近つかずとせんに、此人や、世の飲酒家の實驗する誘惑痛苦及び快樂を充分に量知すると能はざるべし、ニロ帝の性行は善人の夢にだも視ると能はざる所なり、人若し單に私心のみを以て解釋せば、基督に於ける神の愛を正當に理會すると能はざるべし、然れども其心の差異あると面貌の如くなるにも關せず、其合理的本性に於て萬人共同の一點を有するが爲めに、義人を論せず、罪人を問はず、皆愛の理法を覺知し、罪人は其理法の命するところを曉知歎稱して自ら之を己に責め、己を以て犯罪者となす、然りと雖ども人若し全然他人の具有せる本性的資質と能力とを欠けるときは、其欠ける丈け、彼れは他人を知る能はず、又之と交通

すると能はず、故に吾人彼の絶對的理性たる神と同一種類の理性を天より賦與せられたりしに非ずんば、則ち人の本質、歴史及び宇宙の間に於ける神の啓示を覺知すると能はざるなり、唯た其れ人は神の如き有心的靈たるが故に能く神を知るを得るのみ、即ちケプレルの言へる如く、神に從て神の思想を讀會するを得るなり、神の如く愛するを得るなり、又靈眼を以て視らる可き物を知るを得るなり、此理由こそ、有神論が神人相肖ると云ふ説の眞實なること、及此相肖るとは何なる點を云ふかを示す哲學の存するところなりとす、

人は有心的若くは靈性的なるが故に又超物的なり、即ち物界の上に在り、是れ人の神に肖る所にして、人が神の啓示を收接し、又之に由て神を知り得る所以なりとす、物質的と超物的の間を分割する所の線は、世人之を看て、有限と絶對、即ち神と有限實在者との分割線と全一なるものと倣せり、倘し之をして眞理ならしめば、則ち人は超物的に非ざるなり、經驗上超物的の知識を有せざるなり、超物的は決して人の意識に表現せざるなり、人の思想中に此觀念を構成する所の諸要素は絶無なるなり、超物的とは徒に物界中に包有せざる者といふのみなり、此觀念は積極的に一物

をも其中に含有せられざるものと云ふのみなり、此觀念は積極的に一物をも其中に含有せざるものなり、故に人超物界と物界とを分別する所の線外に其思想を放たんと欲するとき、其思想は徒らに否定と爲りて、再び自己に歸り來り、毫も積極的の知識を携へて其線外に達すること能はざるなり、是を以て彼れは論理上スヘル派の不可知説を取らざる可からざるに至らん、彼れ若し神の自己を啓示せる宇宙に、よりて積極的に神の何物なるかを知り得べしと稱し、以て右の困難を通れんと欲するか、又他の全一の困難中に驅逐せられざるを得ず、何んとなれば此假定説に従へば、全宇宙の間には物界上に位するもの一物もあらざるものにして、神學者が彼の分割線外に携へ到り、以て物界を説明すべきものとは唯だ物界に止まればなり、此の如くんば、神は單に物界たるに過ぎず、即ち世人が時に或は稱する如く、大物界たるに外ならざるのみ、果して然らば超物的なる者は雲散霧消して、残るは唯だ物界あるのみ、而して物界は永遠の昔より存在せしものたらざる可からず、故に若し神學者にして一旦物界及超物界の分割線と、有限及絶對の分割線とを混同せば、スヘルサー派の不可知説を採るか、又は永劫より不變なる原因結果の理に

よりて運行したる物界の外復た一物をも承認せざる唯物説を採るか、此二者の中必らず其一に居らざるべからず、抑も神學者が此く有限の宇宙は超物的なる者を一切含むとなしとの説を許容するあるは、是れ彼の懷疑説、不可知説及び唯物説との論争に際し、自家の論據を自ら挫くものにして、此等の不信説が世に行はるゝも、重もに之に基因せずんば、要するに人に靈的即ち超物的なるものありや否の問題と、神は果して存在するや否の問題とは、物の表裏の如き關係を有するものなりとす、眞實に之を論ずるときは、超物界と物界との分割線は、有心的實在者と非有心的實在者との分割線なり、合理的自由意志は其本質に於て超物的なり、勢力の原因として然るに非ず、勢力を指導、使用する所の者として然るなり、合理的自由意思とは理性の光明に照らされて自決的に且つ自行的なる能力を謂ふ、從て此能力は物界の一定したる進路を守る夫の物力共存法の上に位し、物界の一定せる規程に放任するとき、其の生ずる能はざる結果を物界の中に生出するものなりとす、少くとも此れ丈けの作用を有するものなかりせば、則ち宇宙の間に自由にして道德上の責任を有する作用者なるものあると能はざるなり、

故に人は有心的若くは靈的實在者として又超物的なり、此の如くなるが故に、人は超物的の何物たるを知り、自己の内に理性、自由意志及び合理的動機、超物的若くは靈的實在者か有する至要の屬性を發見す、人は靈たるか故に、靈たる神に肖、永遠的の理性なる神と全種の理性を分有し、自己の理性中に於て神の命令する所の愛の大法を認む、即ち彼は神の如くに他を愛するを得るなり、故に人は神と共通なる或者を有し、神と同一の世界に住し、神と全しく合理的靈なり、故に人にして神に就て思考せんと欲するあらば、彼は有心的靈として、活動的理性として、若くは合理的意志として、神に關する積極的の知識を有するを得るなり、固より人の思想は神の無碍性と無限性に關しては消極的たるを免れず、然れども無碍、無限なる性を有する合理的靈其物に關しては積極的なりとす、故に夫の奇蹟にして超物性を啓示する限りは、人は其自己の合理的にして自由なる有心性と、超物的能力とによりて之を知るとを得べし、此くありてこそ、人は神の像に肖たりと謂ふを得べく、唯此くありてこそ、人は神と交通し、神の啓示を收接し、而して神を知り、神に事ふるとを得べし、故に人は神を知るとを得るや否を攷究するに方りて講せざるべからざる至緊至

要の疑問は、他なし、吾人は果して合理、自由、有心的なる實在者なるや否やと云ふと、即ち是なり、若し吾人にして此かる實在者なりせば、吾人は超物的なる語の眞義に於て超物者たるなり、若し吾人正當に、且つ衷心よりして吾人が眞正に有心性を具ふるとを肯定するを得ば、則ち永遠的の靈なる神を信するの信仰必ず隨て起り來らざるべからず、

物界及び超物界の間に介する分割線の位置に就て上來述べたる誤解は普通に見る所なるが、此誤解たる、嘗に論理上神の積極的知識を阻閉する而已ならず、亦人に關する充分正確なる知識を妨くるものにして、人を物界に幽囚し、以て超物界を窺測するを得さらしむるものなりとす、然れども人は靈なり、故に又超物的なり、其自己に就ての意識中には、既に超物的の知識を有す、人は其肉體に於ては草木と同じく物界中に存在し、物界が自己の上に活動するを感觸し、以て其意識的經驗に因て之を知る如く、其靈性に於ても、超物的にして、超物界の自己の上に活動するを感觸し、以て其意識的經驗に因て之を知るなり、故に人は宇宙の間に二箇の系統あるを知る、即ち物系と靈系即超物系なり、人は物界に屬するが故に、其感官に於ては物

質及び物質力の印象を感じ、而して其意識は一切物質力の聚合し、又其物質力が自己を啓示するの中心點と爲る、此の如く又靈として、人は人間及び神の靈的及び超物的勢力を感受し、而して其意識は靈系一切の能力の聚合し、又其能力が自己を啓示するの中心點と爲るなり、故に人は物系と合理的にして且つ道義的なる系統とを知り、又神の啓示なる宇宙に於て此等二系の統一せるとを知る、而して此統一の成る所以を觀るに、物界が靈に服従し、又物界は靈の活動し、且つ自己を啓示する場所及媒介として、兩者互に相調和するによらぬはなし、物界は神の靈の充盈する所にして、又之を啓示するものなると、猶空氣が日光の充盈する所にして、太陽を啓示するものなるが如し、

“The earth is crammed with heaven, 86 And every common bush afire with God.

But only he who sees takes off his shoes; The rest sit round it and pick blackberries.”

而して若し人の肉躰をして、唯靈が依て以て自己を啓示するの形躰媒介たるに止まらしめば、若し凡ての物界をして、唯だ神と靈系が自己を啓示するの形躰及び媒介たるに過ぎざらしめば、則ち物界と超物界の間に於ける衝突は消滅すべし、然か

も此二者の間の區別は猶ほ依然として存在す可く、而して人は靈的及び超物的能力に因て、神の理性の光明の分亨者と爲り、以て神を知り、神と交通し、超物的なる者を知りて之を分亨するを得べきなり、

由是觀之、人は超物的即靈的の包圍に在て超物的實在者たると同時に、物形的包圍に於て動物性の分亨者たり、若し吾人一たび此眞理を確認するとき、人の覺官を通じて物形的包圍が人の意識に自己を啓示する如く、其靈的包圍も亦靈的感性を通じて人の意識に自己を啓示するを疑ふと能はざるべく、而して斯の如く確認すれば、實に靈なる者は、畢竟幽鬼、浮靈と思惟せらるべきものにあらざして、人間の人間たる骨髄を成し、其特質を形つくるものと信せらるべきものなりとす、

(四)神を知るの能力は、有心者なる人の本性を驗討すれば、則ち之を發見すべし、夫れ人は有心的及超物的實在者として、理性、合理的にして靈的なる動機及感情に對する感性、及び自由の意志を賦與せられたり、人は一々此等のものによりて神の啓示を收接するの能力を具有す、

人は人間の理性を以て、神及び普遍理性の光明を分亨し、斯光明に由て、自己の意識

に啓示せらるゝ神及び普遍理性を知る、人は此光に由て智性の目的物たる宇宙に接し、宇宙を支配、統一する物界的原理と法則の中に顯はれたる神、及び普遍理性を發見す、人は推理して萬有より萬有の神に到達す、何となれば人は、理性の本質的要素たる普遍原理の光に由て物界を見ればなり、蓋し人は神の像にして、神の理性の光明は人の合理的智性の中を照すが故に、右の如く普遍原理は其思想を指導するなり、夫れ人の心意は、覺官の印象を以て禽獸と同水平に思考の端を發し、竟に覺性を通過して、遠く覺官以外に進入し、以て物系及び靈系を知り、又此兩系が共に神に從屬して相統一するを知るなり、故にプラトンは言へり、靈魂は神託の一種なりと、蓋し其の然る所以のものは他なし、靈魂は即ち理性たる事實あるが故なり、此の如く、神は人の理性に因て直接に人の意識に自己を啓示し、或は人の理性により、物系及道義系を含有せる宇宙其物を通し、間接に人に自己を啓示す、然り而して以上吾人か知る所のものは啓示にして、徒に思想の産生物には非らざるなり、蓋し徒らに思考すればとて、知識を生ずるものにあらざり、心意の中に知識を注入せんと欲せば、思想は其既に啓示せられたる或物象を捕へ、而して後之を反省

せざるべからず、彼の六合に散布せる光輝は、空氣及無量の物躰が太陽の光を反射するより生ずる如く、心意も亦其四周に表現する無數の實躰より反對したる思想によりて智慧を得、之によりて以て照さるゝなり、ゲーテ曰く、「一切の思考は毫末も吾人を思想に導く者にあらず、吾人若し善良の思想の吾人に來ると、猶彼の『我等は此に在り』と呼ひし神の自由なる小兒の如くならんと欲せば、萬有の側に侍らざるべからず」と、夫の靈才とは、思考を以て其大思想を創造するにあらずして、寧ろ他人より更に遠く、更に深く、其前に表現せらるゝ事物を洞觀する能力を云ふ、神の小兒の如く、吾等は此にありと叫びつゝ、心意の前に群至する所の思想は、皆物系及道義系に屬する一切の物象よりして來るものなり、蓋し此等の物象は、心意中の、神靈なる視力及器能の前に自己を表現し、且つ其中に存する靈的にして、神的なるものを啓示して、之を視るの力あるものは、能く之を覺知するとを得べければなり、此の如く、靈生に於ても、神に就ての知識は、思考より原造せらるゝ者に非らずして、先づ神の啓示ある者なりとす、而して靈生に在りても、夫の靈才と等しく、靈性上の洞察力を有し、其表現せられたる事物の眞義を洞觀するものあり、基督教信徒の意識に

於ける神の啓示に在ては、其最も謙遜なる心意は神を視、又神と相關係せるものとして宇宙を視る、然るに如何程靈才の士なりとて、心に神なきものは、其全幅能力を盡すも決して之を視ると能はざるなり、

神は又感情を、通過して自己を啓示す、蓋し神の啓示が常に人の智性に對して行はるゝときは、常に直接ならざれども、此啓示たる、又其他の能力及び感性を通過して之を爲すとを得べきものなり、神は人の感情によりて自己を啓示す、即ち人をして事を行はしむる所以の動機、及び人が其行爲及其行爲の目的に對して有する情緒によりて自己を啓示す、而して人は本性上此啓示を收接するを得べき數多の感性を賦與せられたり、抑も諸の感情なるものは、外部の作用者の作用に對する感應力の門戸にして、此等の作用者及作用が依て以て自己の臨在を人の意識に感ぜしむるとを得る者なりとす、夫れ感官及物質的情慾、願望及嗜好は、人の物形的包圍が人と相接觸し、以て其存在を人の意識に感ぜしむる所の感應力の門戸なり、此の如く合理的感情及び學術的、道德的、美術的、終局的及び宗教的の動機、情緒は皆靈的包圍に對する感應力の門戸にして、之に因て靈的包圍は自己の臨在を人の靈的意識

に感ぜしむるなり、然り而して神は是等を通過して自己を啓示す、即ち眞善、惡全、美及び高尚性に屬し及び眞福の現實に屬する動機と情緒とを通過して自己を啓示し、又直接に神に屬するの宗教的動機と情緒とを通過して自己を啓示す、人は常に自己の物系の一部たるとを知る而已ならず、亦其軀重と物體力の接觸、飢餓及び凡ての感覺に因て物界を感ず、之と同じく、人は常に自己の道德的にして靈的なる系統の一部たるとを知る而已ならず、凡て合理的及靈的動機と情緒に因て之を感ずるなり、靈的實體が其思想に於て證明せられ若くは反省せらるゝに先ちて、早く己に人は此等の動機、情緒によりて之を知覺す、プラトーン曰く、余は余が出来得るだけ善良、高尚ならざるべからずと云ふとほど明白にして確實なるとを知らずと、ダブリユ、エス、リッイ曰く、余は汝に日没の美景と、哀情の神聖と、レギエラス、及びスカウリ、及び夫のビユニツク敵軍の捷利を得しときに當り、巍然たる其偉大の精神を發揮せしバウラスの豪邁とを證明すると能はずと、宗教的情操は吾人内部の意識に組織せられたるものにして、人は之に因て其無限者の接觸を知覺し、且つ自己が神と同族のものたるとを知る、之れに由て、永遠にして見るべからざる者の實在

人の精神に啓示せられ、而して其感情皆な此秘奥なる臨在に對して震揺す、蓋し此宗教的感情は深く思想の下層に横はり、而して人は推理する前已に之を意識し、此意識は推理を以て打破せらるゝとなく、又種々なる利害得喪の沓至紛亂、催迫ありと雖ども、決して此意識を制伏すると能はざるなり、夫れ吾人は永遠の大洋に於ける航行者なり、而して吾人一たび船中に入りては、吾人の眼より渺茫たる大洋を遮断せられて復た之を見ると能はざるも、此船中に在りて身を娛樂と塵事に委するとあるも、吾人は時に或は吾人が航行せる無限海の洶湧を感せざるを得ず、是れ則ち夫の往々明確、清明ならざる心内の神の聲なり、心裡に感應せられたる至上者の臨在なり、

若し夫れ以上説く所に於て眞實ならざりせば、則ち人は其靈的包圍の作用を感受すべく、若くは己の上に来る神の作用に感應すべき感性を本性的に賦與せられざるものなり、即ちシェーリングの云へるが如く、根元的無神の意識を以て賦與せられたる者、と謂はざるべからず、

人は又自由意志の範圍内に於て神を知る、人は自由意志の使用に因り有心者とし

て自己を知り、自己の靈能と道義上の義務及び責任を自覺す、人は道義的及び靈的系統の中に自己が存在するを知り、又眞實、普遍にして至嚴なる理法のあるありて、恰も彼の光明燦焉たる蒼空の如く宇宙を覆ひ、人は行く處として常に其天心の下に動かざるべからざるを見るなり、人は此覆はざるとなく、照さざる所なき理法を知るよりして、前より后よりわれを圍む所の覆はざる所なく、照さざるなき神を視る、

以上論ずるが如くなるを以て、吾人は左の如き結論に歸着せざるべからず、曰く、人は神の啓示を收接し、之に因て神を知る可き能力を賦與せられたる者なりと、人は自己の意識に神の啓示せらるゝとを發見す、此知識たる唯一個の能力に根底するに非ずして、人の靈性の全體に基因し、又人類の全生活及び全歴史に於ける一要素として顯はる、人は其思考するとき、其思想が普遍、超絶なる原理の爲に支配せらるゝを見、之によりて以て超絶、普遍なる理性を知る、人は其動機と情緒とに因て、自己が自己の上に位し、自己の能力を超えざる者を仰慕し、以て神に關係するを見る、人は其自由の意志を以て事を行ふ、而して之によりて、自己の上に位する理法の存する

ありて、以て自己を其義務の下に置き、又神の聲を以て自己の内にて語るとを見る、
 (註)余は只此處に於ては、本性よりして神を知る可き能力の存在する證據を啓示せるのみ、人の本性に係はれる證據論中には、已に神の存在することは包含せらる、予は充分之を後章に於て論究すべし、

(五)人の神を知る能力は、特別なる信仰器能に非らず、
 人或は神に就ての知識を以て特別の信仰器能に歸す、然れども彼等は大概其所謂特別の信仰器能なる者の意義を精細に解説するとに注意せず、ハミルトンは神に就ての知識を否定したれども、神に於ける信仰を承認せり、然るに氏は何の處にも、信仰の何者なるかを釋明せず、エースは公然に信仰の定義を立つるとを肯んぜずして曰く、嚴密なる定義なくとも、吾人は充分に何處に此信仰を觀察す可きかを知らる、又基督教の信條は何等の原理を以て成立てるかを知らる、
 夫れ片言隻語に就て兎や角に爭論を試みるは實に無益の業なり、固より人の心意は其爲す丈けの事は之を爲すの能力を有するに相違なし、故に吾人此能力を呼んで智性上の一器能と稱するとするも、是れ唯此一種の働きを爲し得る全軀の心意其

物に外ならず、然れども此事たる第九言語の爭論に止まらざるが故に、予は今より進で之を論ぜざるを得ず、

以上講究したる所を以て、神に於ける信仰は合理的有心者たる人の本性に基因するものにして、此信仰は人の有心的の能力と感性とに四通八達すとの事實を明白にせり、故に人の本性中には神の知識に對する特別の器能に對して心理學的基礎の存するとなし、又此かる能力なくんば説明し難き事實もあらず、之に反して此かる特別能力の存在を自定するときは、則ち大なる誤謬に陥りて、有神論の勢焔を薄弱ならしめ、又該論をして諸種の困難と反對の中に立たしむるに至るべし、而して此困難と反對は、上の如き自定を爲すに非らざんば、決して起らざるべき者なりとす、

世人が假定したる信仰器能なる者に就ての議論を見るに、其中自ら此信仰器能を以て人の理性外に在りとし、之より起る所の信仰は即ち知識にあらずとの意を含有す、果して然らば有神説及び凡ての神學は皆知識の外に驅逐せられ、而して只信仰と妄想に歸せんのみ、故に吾人が研究す可き真正の問題は、人の神に於ける信仰